松葉名所和歌集第十　婦古江天

布当　宮　野辺　山　　山城　藻塩三当国相楽郡

八七四　万葉載　高しすゐたいの宮は河近み瀬音を清き山もかみ
八七五　同　六　みかの原ゐたいの野へを清みこそ大宮所定めけしも
八七六　同　ゐたい山やまなみ見れは百代にもはるかしす大宮所
八七七　夫木　泉川今こほるらしゐたい山やまなみ見れは雪白くして

船岡　野　渡　山　　同　類考

八七八　六帖　舟岡に花つむ人のつみ果てさして行しんかたやいつくそ
八七九　家集　ゐなをかの御幸ののちはるへなみ流むと侘し物思ひもなし
八八〇　同　千代をへてみゆきあるへき舟岡の松ならぬ身の老そかなしき
八八一　同　けふの色のさし出て照すゐな岡の紅葉はいとあかくそ有ける
八八二　家集　ゐなをかのわかなつみつゝ君かため子日の松の千代を送らん
八八三　堀百　舟岡のわたりにさける卯花は汀にさする浪かとそ思ふ
八八四　山家集　浪たかきとをこきゝて人はみな舟岡山を泊りにそする
八八五　良玉　舟岡のとをき渡に子日してつなてに野への松や引らん
八八六　夫木　子日してまひしものふる舟岡は松の千年をつもるなりけり
八八七　同　昨日けふ春雨晴ぬ舟岡のわかなはをしてあすやつまし
八八八　同　秋くれと舟岡山のしの薄たれに恐ひてほに出さらん
八八九　同　舟岡やむかしの子日跡ふりて昨日の野へに松風そふく
八九〇　同　ふなをかの子日の跡はそれなからきた野の松にひく心哉
八九一　同　はかなさは舟岡山の夕まくれしほしもたえぬ煙にもしれ
八九二　同　ふな岡のすそ野のつかのかすそへて昔の人に君をなしつる
八九三　同　をとに聞いつきの宮のありすゐたふなをかの渡りなりけり

伏見　里　野辺　小田　村　山　　山城

八九四　家集　年ふれはふし見の里もあれにけり昔の人はすまぬなるへし　忠見
八九五　同　梅花ちりかふ空はくれにけり伏見の里に宿やからまし　中務
八九六　堀川　草枕旅ねをしつゝ人そつむふし見の野へにおふるすみれは　師時
八九七　同　もろ共に伏見の里のかきつはたこゝろはかりはへたてきらなん　肥後
八九八　同　夕されはふし見の里のをみなへしおらて過へきこゝろこそせぬ　国信
八九九　拾玉　いかにせむふし見の里の有明にたのむのかりの月になく也　慈鎮
九〇〇　同　ふし見山しかのねおろす夕風に稲葉か末に鶉鳴也　同
九〇一　同　をしねかる伏見の小田に初時雨心ある庵の板ひさしかな　同
九〇二　同　袁にも衣うつなりふしみ山松風さむき秋のね覚に　同
九〇三　詠藻　あはてのみふしみの里に立鴨のほやすにおつるわか涙哉　作者不審
九〇四　名寄　見わたせは伏見の村の夕霞たか帰るさの道まよふらん　同
九〇五　月清　ふなれし伏見の小田のあせ伝ひ苗代水にと絶しにけり　同
九〇六　愚草　とけてねぬふしみの里の名のみして誰ふかき夜に衣うつらん　洞院摂政
九〇七　玉吟　君と我伏見の里は名のみしてかほの庵のいねかての空　同
九〇八　同　ふし見山秋の田のもの色付はは松のみとりそよそよに成行　同
九〇九　御集　五月雨にふしみの里は水こえて軒にはつの声聞ゆ也　同
九一〇　同　春くれて一夜ふしみの明ほのにをほつ世山の夏をみる哉　同
九一一　建保　ふえ竹の伏見の里は名のみしていれのよにねをもにつき　定家
九一二　同　契をく里はふし見の夕まくれまつをいなはに秋風そふく　定衡
九一三　同　ひとりやもいとよ伏見の里遠み思ふなかさへ雲はたてつ　忠定
九一四　同　里はあれてよなゝかほる秋風に伏見の里は夢も絶にき　知家
九一五　同　里のなもひとゝもあれまくや伏見のあそに夢路絶つ　範宗
九一六　建保　とことはにたかこゝろの葉を頼むらんひとり伏見の里の月影　康光

深草　里　野辺　　山城　類字　紀伊郡

九二七六 象潟ふか草に君をまとはして俤る身の涙にそめる色とやは見ぬ　公継
九二八六 六宮畑しけき野となつもなり行ふか草の里は鶉のなかぬ斗に　好忠
九二九六 同　あけぬるかしまの羽がきねや過て袖に月もる深草の里　家隆
九三〇六 同　朝戸あけて都かたつゝ詠れほゆきの稍やふかくさの里　行家
九三一六 山象潟鶉なく折にしなれは霧龍て哀さひしきふか草の里　尊雅
九三二六 拾玉 衣うつ音にしれや秋の夜の深き哀も深草の里
九三三六 同　ふか草やうつらの床の朝露の袂にうつる秋の夕くれ
九三四六 同　いまは又我袖いとふ泪かな露ほいつくそふか草の里
九三五六 同　ふか草は秋ほよしなき栖哉うつらの床に袖ならしつる
九三六六 新六深草は名のみなりけり藤の杜春をかけてそ花は咲ける　伊勢
九三七六 月清ふか草のうつらの床を今日よりやいとゝむなしき秋の古郷　家隆
九三八六 同　秋もして野への鶉の声もなし誰にとはまし深草のさと　隆信
九三九六 玉吟 王吟はなもあしすやかて野分の風たちぬ霧の朝の深草の里　仲実卿 後大夫
九三〇六 夫木 花もまたさきぬときかは尋見ん色も匂も深くさの里　西行
九三一六 同　咲なはと契りし日より深草の花や都の人を待らん　慈鎮
九三二六 御集 かりにこし鶉の床もあれ果て冬深草の野へさびしき　同
九三三六 同　深草や暁寒く吹風にいとゝ身にしむさり〳〵す哉　同
九三四六 同　大かたのなしひかさとの袖の露猶ふか草の秋の夕くれ　信実 3オ

藤森　山城　藻塩

九三五六 新六 深草は名のみなりけり藤の杜春をかけてそ花は咲ける　後京極
九三六六 夫木 紫の雲とまそにて見えつるはこたかき藤の森にそ有ける　信実

藤生野　同　藻塩

九三七六 千五百大方の春の日影ものとけくて時にそあへる藤生の之花　公継
九三八六 名奇 ふちふ野に栄かる民の手をたゆみつかねもやとす風のさむさに　好忠
九三九六 玉吟 面影になをそ忘れぬ藤生野のかたちが原の有明の月　家隆
九四〇六 藻塩 藤生野のかたちが原をしめはやしいつちはひし時あるかも　仲実卿 後大夫
九四一六 夫木 藤ふのにたみのやつこたえすがるはしも恋の身をそやすめぬ　行家
九四二六 同　ふちふのかたちが原の女郎花色めくさまも気色ことなる　尊雅

二葉山　同　藻塩

九四三六 夫木 神がきにかくるあふひの二は山いくとせ袖の露はらふらん　季経 14オ

布計里　山城　夫木三当国

九四四六 夫木 秋風のふけの里人音すやとわれも心にかくる河なみ　同

藤井原　大和　万葉長歌ニ見えタリ

九四五六 万長歌 あら妙の藤井か原に大御門始めたまひてはにやすの堤の上にありたゝし　家隆
九四六六 夫木 紫の藤井か原の花かつら松にや春の暮かゝるらん　為氏

藤原宮　里　同　類字

九四七六 万 一藤原の大宮つかへあれせんや乙女か友はしきりめすかも　円空上人
九四八六 同 十藤原のふりにし里の秋萩は咲て散にき君待かねて　後鳥羽院
九四九六 同十三かけすくもあやにかしこし藤原の都しみさに人はしも　同
九五〇六 現六 藤原の古里人になれる身を嶋松のえもさこそしるらめ　信実 3ウ
九五一六 夫木 御笠山神のちかひにたつしかの声かすかなる藤はらの里　小侍従

古河辺　山城　類字

九五二六 新古今 涼しさは秋や帰りて泊瀬川古河野への杉のしたかけ　有教

九五三 続拾遺 五月雨は古河のへに水越て波間にたてる二もとの杉　無名
九五四 同 月清三もとの杉の梢は初しくれふる河のへに色もはしす　同
九五五 同 ときはなる御代のしるしにたてりけり古河のへの二本の杉　坂氏大首
九五六 同 年月を古河のへに恋わびぬいつかあひ見ん二本の杉　金村
九五七 夫木 いつしかと春くる風になびくなり古河のへの青柳の糸　無名
九五八 同 石上古河野への杜若春の日数はへたてさりけり
九五九 同 風さゆるふる川のへのさゝ千鳥夜はにと渡る声聞ゆ也
九六〇 同 いか斗ふる河野へに年もへぬいつあるをおひのふたもとの杉
九六一 同 春雨のふる河のへの身をつくしやせてうへゆく水の白波
九六二 草庵 おいて世に古川のへの桜花さたもあひ見ん春そすくなき

古柄小野　志水　大和　類字

九六三 拾玉 君か代にふるからをのゝもとかしはもとに帰るや我身なるらん　雅有
九六四 千五百 あはれ雪のふるがしをのゝもとかしは本見し空に帰る春哉　後京極
九六五 同 春雨のふるから小野の梓弓をしていさゝは若なつみてん　公経
九六六 同 春雨のふる柄をのを見わたせは若葉さしそふもと柏哉　家長
九六七 新六 よはひのみふる柄小野のもと柏もとの身はかり恋しきはなし　読人不知
九六八 御集 をや原うらかれにけり冬の雪ふるからをのゝ明ほのゝ空　為家
九六九 夫木 色も香も古柄小野の桜花むかしの春の名残とそみゆ　知家
九七〇 同 花さかは行てや見まし石上ふる柄小野のもとめしの萩　為家
九七一 同 村雨や古柄小野のもと柏秋風さはきを鹿なくなり　頓阿
九七二 同 五月雨のふるからをのゝわすれ水みなぬまへに渡る瀬もなし　慈鎮
九七三 夫木 夕時雨ふるからをのゝもと柏本はなから紅葉しにけり　公経
九七四 同 行秋の末葉のあさち露霜のふるからをのそかぬてしらゝ　権僧正

布留　川早田　高橋道野杜都　同

九七五 万 七 古もかきゝつゝや忍ひけん此ふる河の清き瀬の音を　寿能
九七六 同 石山ふるのわさ田のほには出す心のうちに恋るこのころ　衣笠
九七七 同 九 石上ふるのわさ田のほには出す心のうちに恋るこのころ　後鳥羽
九七八 同 ふる山にたに見わたす都にそいねすてふる遠からなくに　覚源
九七九 同十二 石山ふるの高橋たかくに妹か待らん夜を更けるなり　公朝
九八〇 玉葉 ふた本の杉のたちとを尋すはふる川のへに君を見ましや　知海法師
九八一 寄書 はかなくて世にふる河のうき世には尋もゆかし二本の杉　俊頼
九八二 同 ふる河の杉のもとたちしらぬ共過にし人にはそへてそ見る　家長
九八三 家集 いそのかみふるのゝ道草わけてし水くみには又もかへ覧　為家
九八四 家集 みな人のそむきはてにし世中にふるの社の身もいにせん　貫之
九八五 堀百 いにしへのふる野の道を尋きて清水を猶も結ひつる哉　河内
九八六 同 我心過にしかたに立かへりふるの都を今も恋しき　紀伊
九八七 同後 頼みてほ久しく成ぬ石上ふるの社のもとのちかひを　常陸
九八八 六百番 我中をふるの荒田を打すて誰にゆきあひのわせ作らん　顕昭
九八九 同 わか恋はふるのゝ道の小笹原いく秋風に露こほれきぬ　有家
九九〇 拾玉 石上ふる野の小笹ふみしたき鹿こそなけ三輪の山さと　慈鎮
九九一 愚草 春雨のふる野の道のつほすみれつみてそゆかん袖はぬるとも
九九二 名寄 石上ふる河野への柳陰めくみもあへぬ春のくれかな　具親
九九三 同 此森のふるの杜と聞からに神さびてなく郭公かな　大宮大政太臣
九九四 同 石上ふるの高橋たかしとも見えすなり行五月雨の比　讃岐
九九五 名寄 千早振神やしるらんかけてたにふみ見ぬ物もふるの高はし　定家

笛吹池　大和　藻塩

九九六 夫木 ふえふきの池のつゝみは遠く共こちくと云名は忘さらなん　読人不知

二上山　同　勅撰名所集三当国葛下郡　越中射水郡三有同名

九九七六　万二　うつそみの人にある我やあすよりは二上山をいもせと我見ん　上総
九九八六　同七　紀路にさそ妹山ありといへつときの二上山も妹こそ有けれ　盧主
九九九六　同　十大坂を我越来れはふかみに紅葉は流る時雨ふりつゝ　隆季
〇〇〇七　同十一　ふたかみにかくろふ月のおしけれと妹か袂をかさのころ　行家
〇〇一七　新六帖　春されは友まとはせをはこ鳥の二上山に朝な〳〵なく　順徳院
〇〇二七　玉吟　夏衣てる日をいとふ吾妹かあけて涼しき二上のやま　中務みこ

吉魚張　大和　藻塩

〇〇三七　万十　我門の浅茅色つくふなはりの浪柴の野の紅葉ちるらし　大業
〇〇四七　同　我宿の浅茅色つくふな張のなつみの上に時雨ふるらし　皇女
〇〇五七　同　ふなはりの野木に降おほふ白雪のいとしろくしも恋む我かも　無名
〇〇六七　名寄　ふなはりの夏見の上の山を出て西をさしたる月の影見ゆ　同
〇〇七七　夫木　ふなはりのなみしはのゝ秋風にはやくよ渡る月のさやけさ　人丸

吹飯浦　安房　和泉　類聚日根郡　越前丹後三有同名

〇〇八七　六帖　すきつるふけゐの浦の蓋にもか今なき行ていへつしまん　衣笠
〇〇九七　家集　いそに出てあさりする火の消ぬれはふけゐの浦を尋つる哉　家隆
〇一〇七　拾玉　ながきよのあかつきのあか千年も夢なれやふけゐの浦に鶴のねむれる　同
〇一一七　拾玉　秋も今はふけゐの浦の松風にたつ鳴夜はの有明の月　無名
〇一二七　同　梶枕夢路はなくおとろけは吹ゐの浦の暁のそら　同
〇一三七　詠藻　月清み千鳥啼なり沖つ風ふけゐの浦の明かたの空　同
〇一四七　愚草　さす浪にわかせふけゐの浦みさて打ぬる夢も此比そみる　家持
〇一五七　玉吟　いたつらにをのか吹ゐのうらなれてなを思ふ鶴のふかひもなし　定嗣

船寺

〇一六七　御集　しほ風やさむけかるらん冬のよのふけゐの浦に千鳥鳴也　俊成
〇一七七　夫木　春風のふけゐの浦に散花を桜かひとてひろふけふかな　上総
〇一八七　同　乙女なかあまの羽衣ひきつれてむへもふけゐの浦にをるらん　盧主
〇一九七　同　冬さむみさよもふけゐの浦風に嶋渡りする音や出らん　隆季
〇二〇七　同　徒にわかよのあきやふけゐかた袖なる月もかたきにけり　行家
〇二一七　同　芦へより塩みちくるしあまつ風ふけゐの浦に田鶴そ鳴なる　順徳院
〇二二七　同　袖のよのふけゐの浦にふなてして月にやあまのすきつるらん　中務みこ

二見里　伊勢　名寄三当国

〇二三七　名寄　ふな寺にのりうかせ夜もすがら声をほにあけてをみすましつゝ　俊頼
〇二四七　名寄　ときならて又も桜の花盛春を二見といふへかりけり　長明
〇二五七　名寄　心せんひとつ御法のすゑ迄も二見の里は人へたてけり　同

二見浦　潟　沖　同　和名三度会郡播磨三有同名

〇二六七　家集　玉くしけふたみの浦に住あまわたらひくさはみるめ成けり　躬恒
〇二七七　山家集　波さすとふたみの松の見えつるは梢にかゝる霞なりけり　西行
〇二八七　同　今そとるふたみの浦のはまくりを見あはせとておほふ成けり　同
〇二九七　拾玉　あかぬかな明暮みれと玉くしけ二見の浦の松のむし立　慈鎮
〇三〇七　建保かさねて袖の涙の玉くしけあけて二見のうらみをそみる　俊成
〇三一七　同　わかれてはあかぬ名残をますかゝ鏡二見の浦の有明の月　知家
〇三二七　同　二見かたたゝす涙の玉くしけたまゆら袖のかはくまそなき　行家
〇三三七　同　伊勢嶋や二見の浦のかたしはひはて月日も待そうれなき　康光
〇三四七　名寄　二見潟神ひたくる御塩とのいく千代みちぬ松陰にして　長明
〇三五七　同　古郷の大原山せいかならん二見の浦の今朝の初雪　同

○三六七　門　袖のうへは浪があらぬか三見潟くもらぬ月に村雨の声　同　定家
○三七七　同　二見潟いせの浜荻しきたへの衣手かれて夢もむすはす　同　長明
○三八七　同　二見潟をちの湊やいかならん塩あひは駒のつめもかくれす　定家
○三九七　愚草　玉くしけあくれは夢の二見潟いたりや袖のなみに朽なん　家隆
○四〇七　玉吟　いかさきに我身を分て二見潟衣にかへてあふかひも見ん　後鳥羽
○四一七　御集　二見かた春のしほやのよはの月烟いとへかすむ空かな　同
○四二七　同　秋の月ひかりそささる玉くしけ二見のうらの明かたの空　家隆
○四三七　夫木　夏の夜は玉ゆらもなし玉くしけ二見の沖にあくる月かけ　慈鎮
○四四七　同　霞行はるのしほやの烟かな二見の浦のあけほのゝ空

留河　伊勢　藻塩

○四五七　名寄　ふえ川のいしなとりつと見えつれはねに万代を吹なかせもや　同
右歌宮石取合歌

○四六七　同　音にたてゝ恨やせすし留河のせによる竹のものがうきふし　俊頼

藤潟山　同　藻塩

○四七七　名寄　ふもかたにさき紫の色かひはいくしほ浪の染かへしけん　丸系内大臣
○四八七　名寄　あしはらも千代のしるしのみゆる哉いのりかけたる藤潟のまつ　皇后宮下野
○四九七　同　さきくさももえ初らめやそ春きなは若な摘へき藤潟の山　好忠
○五〇七　類聚　ひきてこし人忘すは藤潟の松もむかしの物かたりせよ　光俊
○五一七　藻塩　紫のかひある浦の藤潟は波のかくるゝ花と見えける

二村山　里　参河　類字

○五二七　家集　玉くしけふたむら山の月影は万代をこそ照すへらなれ　兼盛
○五三七　同　秋風にはたをる虫の声しけみたつねそきつる二村の山　重之

○五四七　山家集　出なから雲にのくる月影をかゝねて待や二むらの山　西行
○五五七　名寄　二村の山の端しらむしのめにあけぬとつくるほこ鳥へこえ　小侍従
○五六七　同　雪となり雨と成てゝ嶺わけにかゝれる雲も二むらの山　後九条
○五七七　同　分て行二村山のこくれよりはそましりの霰ちる也　為忠
○五八七　名寄　程ちかく衣の里は成ぬらん二村山を越てきぬれは　経衡
○五九七　山家集　晴やらて二村山に立雲はひらのふきの名残なりけり　西行
○六〇七　詠藻　時鳥二むら山を尋れはみねをへたて鳴かはすなり　後成
○六一七　夫木　霞立二むら山の若つしたかをりそめしから錦ても　後忠
○六二七　同　今こそは二むら山の郭公声ふりはへてあやに鳴なり　後頼
○六三七　同　二むらの山の麓の秋萩に錦をしけるのへかとそみる　匠房
○六四七　同　しつかなる二むら山の麓こそ千年の秋の花も咲けれ　正家
○六五七　同　忘すはあやめもわすれ行くらし二むら山の末の野原は　四条
○六六七　同　くれはとり二むら山をきて見れは目もあやにそ月はすみけれ　後頼
○六七七　同　唐錦おらまくおしき木の本は二むら山のもみち成けり　為仲
○六八七　同　唐錦二むら山のもみちゆへあかてもけふを立くらすかな　同
○六九七　同　しくれする もみちの錦ゆかしきにあけてをたん二村の山　叡念法師
○七〇七　夫木　たが代よりうへてこの名をとゝめけんそのふの竹の二村の里　冷泉太政大臣

二見道　参河　藻塩

○七一七　万　三妹も我もひとつなるかも三河なる二見の道に別れかねつる　高市連黒人
○七二七　家集　三河なるふた見道より別るゝは我せもあれもひとりかもぬる　家持

藤野村　同　藻塩

○七三七　夫木　紫の糸くりかくと見えつるは藤の村の花さかりかも　宗国
○七四七　同　きしなで藤野の村のふち波は松のこすゑにかゝる成けり　通経

さゞ波

富士　芝山　御嵩　高根山　駿河

○七五万　三ふしの根にふり置雪は六月のもちにけぬれは其夜降けり　無名
○七六同　ふしの根を高みかしこみ天雲もいゆきはばかりたな引物を　高橋連虫麻呂 11オ
○七七万　わきもなにあふさしもなみ駿河なる富士の高ねのもつかあしん　人丸
○七八同　妹名も我名もたかはしみそふしの高ねのもへつ渡れ　同
○七九同十四　あまの原ふしの芝山この暮の時ゆつりなはあはすかもあらん　無名
○八〇同　ふしの根のやとをおかき山路をも妹かりとへはけに夜は過ぬ　同
○八一同　霞ゐるふしの山へに我きなほいつちむきてか妹かなけかん　同
○八二同　さぬらくは玉のをはりこふらくは富士の高ねのなるさはのこと　伊勢
○八三家集　はてはみのふしの山ともなけぬなりもゆるなけきの烟たえねは　同
○八四同　人しれす思ひするかのふしの根は我ことおくややまもゆらん　同
○八五同　もゆれともしるしたになき富士の根に思ひ中をきたとへる覧　貫之
○八六同　から衣するなにおへるふしの山越ん人こそかはておしけれ　同
○八七同　世に人のをよひかたきは富士の山麓にたかき思ひ成けり　清正
○八八同　草ふかみまたきつけたるかやり火をみゆるは富士の烟なりけり　能宣 11ウ
○八九家集　焼人もあらしと思ふふしの山唐のうちより烟こそたて　壹之
○九〇堀百　駒なへてくれぬと人はりそけ英遠そはるけき富士の柴山　顯仲
○九一同　後ふしの山おりぬる雲は立のほる煙のやはてなるにや有らん　兼昌
○九二六百番　昔かく恋する人やふしの根の絶ぬ烟ともえはしめけん　中宮權大夫
○九三七家集　煙たつふしに思ひのあらそひてとはけき恋をするかへそ行　西行
○九四拾玉　ふしの根の雪けの雲を吹のけて震にかふる春の初風　慈鎮
○九五同　日にそへて震はれ行富士の根は煙そ春の名残成へき　同
○九六同　秋風に富士の煙のなひき行を待とる雲の空に消ぬる　同
○九七同　君か代は清見か関にちりとりて富士の高ねに浪ゆるまて　同
○九八詠藻　五月雨は高ねの雲のうちにしてなかさそ富士の烟なりける　後成

○九九七名寄　時しらぬ山はふしの根いつとてかかのこまたらに雪の降らん　業平
○一〇〇同　人すまぬ山は富士の根いつとなくたつるや何の烟なるらん　覚性 12オ
○一一七名寄　舟とむる田子の浦わの多塩に富士の御嵩は霧こめてけり　康光
○一一二同　富士の山峯は雪けの雲なからすそ原に秋風そふく　義隆
○一一三七新六　消かての富士の根の山の嶺の雪時のうつるとや震ゐるらん　為家
○一一四同　するかなる富士の峯子のにゐ錦は高ねの雪の色にゝるらん　頼輔
○一一五七同　夜もすから富士の高ねに雲消て清見か関にすめる月かけ　定家
○一一六七愚草　天の原富士のしは山しはらくも煙絶す雪もしなくに

富士　河　駿河

○一一七七家集　あまんとは思ひわたれとふし河のつねにすますは影も見えしを　躬恒
○一一八七名寄　夏も猫雲けの水に月冴て氷しぬへきふしのしは川　信実 12ウ
○一一九七新六帖　賦のをかあつまもしけのあき衣山たまた川はさそ渡るらん

二俣河　武蔵　藻塩

書巻河　下総　藻塩

○一二〇七名寄　みつくきのかきなかせ英なかれぬはふみまき川といへはなりけり

古市里　近江　天木三当国和名三　滋賀郡

○一二一七夫木　ふるいちの名にあらはるゝ思なれは文數かゝる池のふちなみ　兼仲

舟木浜　同　和名三当国清生郡　或類聚二豊前

○一二二七寛治二大倉会　川嶋や舟木の浜の磯千鳥まのれか名をは年と顕まん　匡房

船木山　美濃　類書

○一二三七続拾遺　いかなれは舟木の山の紅葉ゝの秋は過れとこれ紅ゐらん　通俊

○一二四新勅嵐吹　舟木の山の紅葉ゝは時雨の雨に色そこかるゝ　経忠

一二五七　夫木さゝ浪や舟木の山の時鳥ほに出て今そ鳴渡るかな　慈鎮
二六七　夫木　今もかも夕立すゝし舟木山のゝかのにしに雲のかゝれる　為家
一二七七　同　東路や舟木の山の木間よりほのにみゆる夕月夜哉　俊頼
二八七　御集　まかちとるふなきゝ山の夕時雨そむる紅葉もこかれてそ行
一一九七　名寄　なけかしな舟木の山の時鳥月の出塩にうつたひして

不破山　関　中山　美濃　類字

一二〇七　長歌二　我大君のきかしみしそともの国の横たてるふは山越て
二一七　同三十　ふはの関越てわは行馬のつめつくしめ崎にちまりねて
二二七　塩後東路のふはの関やの鈴虫をむまやにふると思ひける哉
二三七　六百番　故郷に見し面影もやとりけりふはの関やの板間もる月
二四七　拾玉　旅ねするふはの関やの板ひさし時雨するよの哀しれとや
二五七　同　不破の関せきち侘しき旅ねかな身の有さまは冬を友にて
二六七　拾玉　契をかんふはの関屋の板ひさし時雨せさらん比はやとゝし
二七七　同　霰ふるふはの関やの板ひさし時雨しよはの袖もまたひす
二八七　名寄　ふはの山朝越くれは霞立野上の方にうくひすのなく
二九七　同　憂に今せきもとゝめぬ涙とてなゝ〳〵越るふはの中山
三〇七　同　見る程に人とまりけりいはてた花にすかせよふはの関守
三一七　月清　まはらなるふはの関やの板ひさし久しく成ぬ雨もたまらす
三二七　玉吟　秋風にふはの関やはあれにしを霞にくもる春の明ほの
三三七　夫木　山かけのふはの関守とはね共心と名のる郭公かな
三四七　御集　なかめこし心を秋の関なれや月影清きふはの中山

伏屋　信濃　類字

三五七　夫木　数ならぬ世やにふる名のうきにあるにもあらすきゆるはき木
三六七　山家集　あはさらんことをはしらてはゝの世やと聞て尋行哉
三七七　拾玉　は木のゝそにのみやと思ひつきよき伏やに身をまかすらん　慈鎮
三八七　藤川百ちすなよ下に伏やの夜半の露そのはらからの風もこそ吹　為家
三九七　方　与その原やゝせやに忍ふさほしかのほ木をたに見えすとやなく　俊頼
四〇七　名寄　山田守きそのゝせ屋に風吹はあせったひして鶉なく也　同
四一七　夫木　よすから哀とそ思ふその原やひとり伏やの大和撫子　読人不知
四二七　同　ちらすなそその原かしを尋ても世やといはん里のしるへに　教蓮法師
四三七　新葉　忘れすよ一夜ゝせやの月の影猫そその原の旅心もして　為家

人丸　河内　仲実　女房　中務　忠季　後鳥羽　俊頼　顕輔

二子山　下野　類字

四四七　六帖　しもつけやふたこの山のふたこゝろありけん人をたのみける哉　喜撰法師
四五七　同　ふたこ山ともに越ねはます鏡そこなるかけを尋てそやる　人丸
四六七　教集　なかきよに君と三子の山のねはあくともしらぬ朝霧そたつ　信明
四七七　名寄　つはりせし三子の山のはそ原よはうゝ過て消ぬへき哉　俊頼
四八七　同　旅人は鏡とや見ん玉くしけ三子の山にいつる月かけ
四九七　夫木　はこねの山三子の山も秋ふかみ明くれ明くれ風に木葉散かゝ　好忠

慈鎮　仲正　後京極　教隆　尤俊　後鳥羽　中務　隆信

二方山　陸奥

五〇七　名寄　陸奥のふたかた山の白雲はこなたかなたに立そわつらふ

深津嶋山　同　藻塩

五一七　万十一　みちのくしりふかつ嶋山はしくも君かめみねはくるしかりけり

藤嶋　越前　藤嶋左

五二七　拾玉　松の門にかけても頼む藤嶋を近江の海によそへてたてつる　慈鎮

奥隆左藤嶋事申とてこなたかなたにかゝるへきなりとつねにそへこと申さるれは

五三七　拾玉　君ゆへにしもにかゝる藤浪は我立松の松の末まて　慈鎮

顕輔　中務　忠季　後鳥羽　俊頼　人丸　河内　仲実　女房　慈鎮　同　慈鎮　同　隆信　仲正　後京極　教隆　尤俊　後鳥羽　中務　西行

一五四七 同　墨染のたつ杣なれは藤鳴の久しき末も松にかゝるか　墓下

吹飯浜　越前　仏覚抄ニ当国

一五五七 百十三 時つ風ふけぬの浜に出居つゝあかし命は妹かためこそ

一五六七 夫木 渡間より吹けぬの浜をみ渡せはみきはの松に木たかりけり

二上山　尾上　峯　越中　類字和名ニ射水郡

一五七七 百十六 しら谷の三山に鶯そ子うむといふさしはにも君か御為鶯そ子うむと云

一五八七 同十七 ぬは玉の夜は更ぬらし玉くしけふたかみ山に月かたふきぬ

一五九七 同長歌 玉くしけふたかみ山は春花の咲るかりに秋の葉の

一六〇七 同十七 玉くしけふたかみ山に鳴鳥の声の恋しき時は来にけり

一六一七 同長歌 玉くしけ二かみ山にはふつたのゆきは別すありかよひ

一六二七 同　かきかそふふたかみ山に神さびて立るとの木もとも枝も

一六三七 同　三鴉野をそかひに見つゝ二上の山飛越て雲かくり

一六四七 同　二上のをてもこのもにあめさしてあか待鷹をいめにけつつも

一六五七 百十八 ふたかみの山に隠れる郭公今も鳴ぬか君にきかせん

一六六七 同十九 ふたかみの尾上のしゝにこもにしは郭公きてといまた来なきす

一六七七 夫木 ふたかみの峯もやすらふ時鳥心つくしの声そふりせぬ

布勢海　沖浦　同　仏覚抄ニ当国

一六八七 百十七 ふせの海に舟うけすへて沖へきへに漕みれなきにはふせの海の沖つ白波有通ひやとしのほに見つゝ忍ん

一六九七 同　うしくはしふせの水海に海士舟に真楫かいぬき白妙の

一七〇七 同　いかにせるふせの浦そもこたくに君か見せんと我をとむる

一七一七 同十八 いかにせるふせの浦を行つ玉もひろはん

一七二七 百十八 玉そしけいつしかあけんふせの海の浦を行つ玉もひろはん

一七三七 同　音みにきて自に見ぬふせの浦をみすはのほとゝし年はつぬ英

一七四七 同　ふせの浦を見て見れは百數の大宮人に語りつきてん

一七五七 同　明日の日のふせの浦間のふもとなみにけたきの鳴すもとしてんかも

無名　大伴家持
読人不知
無名
道良　大伴家持
同　大伴家持
同
同
遊行女婦土師
大伴家持
光明寺
大伴家持
同
同
大伴家持
同
同
田辺福麻呂
田辺福麻呂

古江村　越中　万葉ニ当国射水郡歌中

一七六七 百十七 芦鴨のすだく古江におとつれも昨日もありつ近くあし

一七七七 名寄 五月雨はふる江の村のとまやかた軒すてかこるたゝの浦浪

一七八七 愚草 すもえつる古江の藤の春の日に梢の花をならへてそみる

一七九七 新集 君か代にわか身ふる江のあやめ草老のかみにそなかきねはなく

舟井河　出波　和名ニ船井郡埴奈井

一八〇七 藻塩 時に日にのほる御調の舟ぬ川真おちしけぬく波もたきなみ

一八一七 名寄 古代のかすをつみなるふなぬにてひろきめくみをくみてしりぬる

笛吹山　同　藻塩

一八二七 夫木 足曳のふえ吹山の松風に万代の秋しらへこそすれ

一八三七 同　若ぬさすふえ吹山のかひありて千とせをふへき声そ聞ゆる

藤坂山　同　類字

一八四七 続後撰 ふち坂山に咲花の千代のさかしは君かためかも

一八五七 類聚 君か代にあふひありて紫の雲たち渡る藤坂のやま

一八六七 夫木 音たかみ藤坂山の藤花まろつの年の数をそ契る

一八七七 同　さき草ももえぬらんやそ春きなは若菜摘へき藤坂の山

笛浦　丹後　藻塩

一八八七 懐中 音たかき浪立さりてさゝしかはふえの浦にも風は吹けり

吹井　同　類字

一八九七 建保ほの〳〵ときの山けぬのあま霧にあらはれ渡る天の橋立

成美　巨房
正家
巨房
正方
好忠
行意

16ウ
17オ

一九〇七　類聚橘立ゝさの吹ぬの浦千鳥遠きひかたの寒々月影　衣笠

不可忘山　石見　藻塩

一九一七　懐中なへてそのふかしの山に入ぬれは帰らん道もしられさりけり　読人不知

二見浦　播磨　類寺

一九二七　古七　ゆふつくよおほつかなき玉くしけ三見の浦はあけてこそみめ　兼輔

一九三七　名寄　玉くしけふたみの浦の中におつる月の影そかゝみなりけれ　17ウ

一九四七　同　いつくそやふたみの浦のありとおもひ心をいれてとはまし物を

美作国へ下るにはりまふた見の浦にて

時鳥を聞てよめるとなん

一九五七　同　玉くしけ二見の浦の時鳥あけかたにこそ鳴わたりけれ

一九六七　良玉　玉くしけ三見の浦の卯花を有明の月と思ひけるかな　戒秀

一九七七　夫木　あひにあはぬ三見のうらにねもなんあらいそ波の枕なり矣　範宗

一九八七　同　玉かつらふた見の浦のゆふつくよあけてもみぬは夢路なりけり　順徳院

船坂山　同

はりまのふなさか山といふ所にて

一九九七　家集　風をはぬふなさか山は年月もおなし所そときりなりける　忠見　18オ

船瀬　浜　播磨　藻塩

二〇〇七　万　六なきすみの舟瀬にみゆる淡路嶋松帆の浦に朝なきに　金村

二〇一七　同　行帰り見れともあかぬやなきすみの舟瀬の浜にしきる白波　同

二〇二七　夫木　ゆきかへるふな出のほすのしほ風にみきはをこえてしるき白波　為家

藤戸　同　藻塩

二〇三七　堀百　おほみふねしたゝに浪にかくれ共藤戸をきして鳴かくれつゝ　顕季

二〇四七　家集　定めなき空の気色に追風をまつに藤戸をかけてさりぬる　俊頼

藤江浦　入海　同　仙覚抄三当国

二〇五七　万　六　沖つなみへ浪しつけみいさりすと藤江の浦に船そとまる　赤人

二〇六七　同十六　白妙のゝとう江の浦にいさりするあまとや見らん旅行我を　無名

二〇七七　詠藻　はりまかた藤江のうらにみつ塩のかゝくて世にも沈つる哉　俊成　18ウ

二〇八七　新六帖　夕なきの藤江の浦の入海に鹽つるてふ蜑の乙女子　衣笠

二〇九七　名寄　もすきする藤江の浦に舟とめて月の出塩を待そ久しき　仲正

二一〇七　玉　吟浪にまよふ藤江の海士の藤衣いかて玉もの光なすらん　家隆

二一一七　同　玉なしぬ藻塩の草もいかてかは藤江の浪にとけて過へき　三位入道

二一二七　御集　よふねこゝろ江の浦の有明に浪路を送る月のさやけさ　雙鳥羽

二一三七　草庵　うつもれぬ波もひとつに白妙のふちえの浦の雪のあけほの　頓阿

古畑　紀伊　藻塩

二一四七　山家集　ふるはたのそはのたつ木に居る鳩の友よふ声のすゝき夕暮　西行

古屋泊　同　類寺

二一五七　風雅　泊のみふるやの軒の板ひさしもりける月そ袖に曇れる　僧正遍昭　19オ

二一六七　山家集　神無月時雨ふる比に澄月は曇しぬ影もたのまれぬかな　西行

吹上　浜　浦　小野　磯　神　紀伊　類寺

二一七七　堀百　おきつ風ふき上の浜のさむけ比は冬の夜すから千鳥鳴也　永縁

二一八七　同　はま風のふき上のをのこあさちふ原なみ立るおしに玉そもりける　国信

二一九七　山家集　天くたる名を吹上の神なとは雲晴のさて尤あらはせ　西行

二二〇七　同　波がくる吹上の浜の落貝風もそおろすいそき拾はん　同

二二一七　拾玉　見れはけに行あもしらぬまゝ哉沖つしほ風吹上の空　慈鎮

二二二七 同　吹上のはまの真砂のきえぬるなごりに頼む冬の白ゆき　安嘉門院四条

二二三七 同　おきつ風吹上の浦の夜千鳥たつ白浪の花かとそみる　定意

二二四七 同　誰か見ん秋吹上の浦風に月影くだく夜のさざなを　為家

二二五七 名寄今夜たれ松と浪とに夢覚て吹上の月に袖ぬらすらん　20ウ

二二六七 名寄けふそ見るおきしの浪の花の上にいとはぬ風の吹上の夜　同

二二七七 同　これも又花かあしぬか浦風の吹上にたてる春の白雲　同

二二八七 同　秋風の吹上の夜の真砂山ほのぼのにはみる月のかけかは　同

二二九七 千五百 松風の吹上にさける梅花天つ空なる雲や匂はん　後鳥羽院19ウ

二三〇七 建保あさ霞花かあらぬぬか春風の吹上の浜に波やたつらん　定家

二三一七 同　春の夜のためしもしるきのくにや吹上の波にすむ月かけ　内兵衛尉

二三二七 同　春なれは花とさきもる白波の吹上の浜のおきつ塩風　為家

二三三七 同　おきつ風夕波たかくふきあけの浜もやすらふ春の舟人　定家

二三四七 同　まさこもる吹上の浜のあかぬ色を都の春と思はましかは　内兵衛尉

二三五七 新古 秋風の吹上の小野のくすかつらさそうらかれて露こぼるらん　為家

二三六七 月清 紀の国や吹上の浜にはる波のよるへ涼しき磯すらかな　定家

二三七七 玉吟 秋のよる吹上の峯の木かしに横雲しぬ山のはの月　定家

二三八七 玉吟 まさこもる吹上の浜の月を見て恋しきことの数をきかれる　定家

二三九七 夫木 春風の猶吹上の浜千鳥色なき浪の花になく也　定家

二四〇七 同　月影はもさともきよくみつしほにみなみはれたる吹上のはま　定家

二四一七 同　沖つ風吹あけの浜の松かけにたちよる波の音そすさしき　後鳥羽院

二四二七 御集 塩竈の浦吹あけの浦のとも千鳥いく夜さえたる月を見るらん　後鳥羽

藤白　御坂山神　紀伊　仙覚抄ニ当国

二四三七 万九 藤しろの三坂をこゆる白妙の我衣手はぬれにけるかも　無名

二四四七 名寄 千早振君か千年を松のはにかりて咲る藤代の神　安芸

二四五七 夫木 一しほのみどりの外も色やそふ花さく春の藤しろの松　安嘉門院四条

二四六七 同　行春のすゑの葉にかゝる藤白の松に残りて花はすくなき　定意

二四七七 同　みかさにはみさやとらん藤白の山はしくるとも木葉ちる也　為家

二四八七 同　ふち白の山のみさかをこえんもあへすまつあにかゝる吹上の浜　為家20ウ

深山　同　名寄ニ当国

大峯の深山と云所にて月を見てよめるとなん

二四九七 名寄 ふかき山にすみけるを月を見さりせは思出もなき我身なりしまし　西行

筆山　讃岐

二五〇七 山家集 筆の山かきのほりても見つる哉苔の下なる嶺の気色を　同

筆海　同　類聚ニ当国

二五一七 類聚 水くきの岡の湊の浪よりや筆の海てふ名には立らん　為家

船坂山　肥前　藻塩ニ当国播磨ニ在同名

二五二七 懐中 風はやみ立白浪をよそ人は舟坂山と見るそあやしき　家隆20オ

吹手浜　豊前　藻塩

二五三七 藻塩 秋風のふきてのはまのはまひめは夜寒にあれや衣かたしく　範宗

二五四七 夫木 秋の夜はさそ寒やらしうら風のふきてのはまに衝鳴也　後丸系

敷可手乃嶺　対馬　八雲御抄

西園寺　鷹司院師

二五五七 万十四 つしまのねはしたもあらなふかむのねにたな引雲をみつゝ忍はん　無名

古江浦　未勘

二五六七 続後万 代のかけをならへて鶴の住古江の浦は松そ木高き　相模

船瀬桟　同

二五七七　風雅御調物はこぶ舟瀬の桟に駒のひつめの音そたえせめ

吹越浜　同

二五八七　夫木　ふきこしの浜の塩風身にしみて千鳥の声の聞ゆなる哉

不賀那浦　同

二五九七　堀後　ふかなうらうみの心やいかならんうらみぬあまはなしきこそきけ

古瀬河　同

二六〇七　夫木　袖ぬれてわたりし物をふる瀬河ふるくも人の思ひけるる哉

藤井河　同

二六一七　家集　をとに聞ふち井の河を立かへりかなしきせきも渡りぬるる哉

不多河　関　同

二六二七　夫木　なかれてはいつれのせにかとまるへき泪をわくるふた川のせき

伏猪嶋　同

二六三七　古今　誰かも見て忍ふらんかるもかく伏猪の嶋の秋のよの月

吹立河　未勘

二六四七　懐中　秋風の吹たち川の紅葉はをにしきと見つ渡りぬるかな

藤崎　同

藤さきの宮にて百日に

二六五七　家集　ふもさきのみきの老ほに生る松今いく千代か子日過さん

衣手杜　小野里関　山城　類字

二六六七　堀後　秋もまたたちしぬるきに衣ての杜の下にはほのめきにけり

二六七七　拾玉　いつしかとおつる涙を時雨にて紅葉ほしむる衣手のもり

二六八七　同　はかなさを思ひ知へき妻なれや色付初る衣手のもり　匡房

二六九七　拾玉　冬の名をぬきすてて行にしきをは旋にたてたむ衣手の杜　慈鎮

二七〇七　名寄　竜田姫秋の気色やこれならん紅葉ぬさぬの衣手のもり　信家

二七一七　同　なのめとくくはなけれと衣手の小野の春雨ふりなくしそ　前摂政左大臣

二七二七　玉吟　たちぬれてたれまちそふる衣手の杜の雫も氷ぬるらん　家隆

二七三七　同　雨ふれとくるれはもゆる夏虫を誰ゆへつむ衣手の杜　同

二七四七　千五百　春の色のなりもの更に夏たてはみとりにかおる衣手の森　家長

二七五七　同　朝風にはにもさむし衣手の杜にも冬はたちはしひらん　顕昭

二七六七　御集　見わたせはけふ白露のうはそめに色つきにけり衣手のもり　後鳥羽

二七七七　夫木　吹風の下草そむる花の色や春の形見の衣手のもり　知家

二七八七　同　時鳥こゑやさ月の玉をなすわか衣手のもりの下露　有季

二七九七　同　郭公からくれなゐのふり出てなけ共そめぬ衣手のもり　大宮太政大臣

二八〇七　同　衣手の森の木末やたからん遥に蟬の声を聞ゆる　法性寺

二八一七　夫木　衣手のもりの下風吹かへて寒き蟬なく秋は来にけり　頼氏

二八二七　同　誰か又かさねてもきむ秋霧のたてにもさむき衣手のせき　弁内侍

二八三七　同　紅にちしほやそめし山姫の紅葉かさねの衣手のもり　俊成女

二八四七　同　色〳〵にとりそめてけり竜田姫はしむらくなる衣手のもり　季経

二八五七　同　春は花秋は紅葉ときそはいて人もたちよる衣手のもり　馬内侍

二八六七　同　かたしきのきこの初霜色に出てるな〳〵きゆる衣手のさと　知家

二八七七　同　今も又泪やさそふほとゝきす わか衣手のさとになくなり　西園寺入道

二八八七　草庵　時鳥涙がちなる衣手の森の梢になきわたるらん　頓阿

木幡　山巻　川里関　山城　山階郡　宇治郡

二八九七　百十一　山科のこはたの山に馬はあれとかちより吾来なれ思ひかね　人丸

二九〇七　名寄　こまをめてうちより渡る木幡河思ひなかすとうき名なすな　為教

二九一七 新六帖 木幡山あをはすながら口なしの宿かをとてもこたへやはせん
二九二七 名寄 雪ふかき木幡の峯を詠ても年治の渡に人やまつらん
二九三七 同 よそに見てふしみもしらぬ木幡河こはたかゆへにぬるゝ袂そ
二九四七 月清 待わひぬこよひもさては山しろの木幡の嶺の遠の白雲
二九五七 愚草 木幡川こはたかための唐衣比も久しきつもの音かな
二九六七 玉吟 いかにせん人の心は木幡河月日ふれとも渡せもなし
二九七七 夫木 木幡山花の錦はをりてけり柳桜をたてぬきにして
二九八七 同 五月雨にいかにかもせんこは川かちより人の渡せもなし
二九九七 草庵かちよりそ木幡の里もかよひしなをかゝ恋路のくるしかるらん
三〇〇七 千首 春はほや木幡の関の朝ほらけ都のたつみやゝかすみぬる

狛山　渡野里　同

三〇一七 万 六こま山に鳴郭公泉川わたりを遠みこゑに通はす
三〇二七 家集 小椋 ありとゝろこまかにいつしらうりのつを尋て我ならさなん
三〇三七 同 うりとゝろ爰にはあらし山城のこまかにしらぬ人な尋そ
三〇四七 家集 山城のこまの渡を見てし哉うりつくりけん人のかきねを
三〇五七 名寄 大和とも唐とも見えす山城のこま野に咲る撫子の花
三〇六七 同 山城のこまのうりゝ田昔よりたかめとてか作り初けん
三〇七七 玉吟 五月雨は渡りを遠み泉川こま山見えす雲そかゝれる
三〇八七 千五百 山しろのこまのうりゝの芦中やならしはてゝ人のつれなき
三〇九七 新六 泉川楸もいまたもみちぬに狛山こえて雁は来にけり
三一〇七 夫木 春山かくなりゆくまゝに狛山に立のみ渡る花のしら雲
三一一七 同 今たにもひく人あれや山城のこまのかりゝしけ下草
三一二七 同 森の葉も水上かけて泉川狛山人や御祓しつらん
三一三七 夫木 紅葉せぬこま野の山のときは木も秋は下葉を色付にける
三一四七 同 いしかはやはなたの帯の中絶はこまのわたりの人にかたらん
三一五七 同 山城のこまのわたりのもみち葉をかし錦とや人は見るらん
三一六七 同 うりうへしこまの之原のみそのゝしけくなり行夏草もある哉
三一七七 同 そめかねていかなる露のこまる覧こま山のへのまつの下草
三一八七 同 泉河こまの渡りのとまりにもまた見ぬ人の恋しきやなそ
三一九七 同 山ちかみあさたつ雲と見えつるはこまの之里の煙なりけり

衣滝　山城　藻塩　御室辺三十首

三二〇七 堀百 石ゝこる音はかくれす夕暮さゝろもの滝を立こむれとも
三二一七 夫木 秋ことのもみちの錦きて見るを衣の滝といはやあるらん
三二二七 名寄 されはわかなきなかしたる袂かは衣の滝におつるみなはゝ

久我森　里　山城　藻塩

三二三七 六帖 いとはやも鳴つる雁かこかの杜木にはゝ蔦も紅葉あへぬに
三二四七 同 打むれてこむ人は猶しかの森木ゝの紅葉のまたちしぬさに
三二五七 同 木ゝにはゝ蔦もみちせりこかの杜よとの渡りや時雨しつらん
三二六七 春歌 五月雨にかたつき麦をほし兼て夕まとのするこかの里人

小篠岳　里原　同　藻塩

三二七七 六帖 君かゝるこさゝの原にゝる雲の絶てわかる恋もする哉
三二八七 類聚 野への草またあさしとや片岡の小篠か里に雉子鳴也
三二九七 堀百 白鳥のさき坂山をこえくれはこさゝか嶺に雪降にけり

木嶋　同　類字　拾芥三云山城祈雨十一社内也

三三〇七 新勅 水もなく舟も通はぬ大の嶋にいとか蕃のなまあかるらん
三三一七 同 あなしには木の嶋のみや白妙の雪にまかへる波はたつらん

知家　小宰相　寂蓮　後京極　定家　家隆　堀川右大臣　行家　頓阿　為尹　作者不審 24オ　素盞　義源　家隆　内大臣　行家　経正　知家　後光条 24ウ　恵慶　俊成　為具　好忠　後光明寺殿　読人不知　公任　国信　赤染衛門　光俊 25オ　大伴郎女　光俊　西行　三条入道　顕季 25ウ　すけみ　俊頼

小嶋崎　関限　　同　類音

三三二七　浮雲暮年ゝとともはらん物かたち花のこしまの崎にもきる心は　　人丸

三三三七　同　たち花の小嶋の色はかはらしまこの浮舟そ行方しられぬ　　同

三三四七　堀百さきぬれは人をとめけり山吹のこ嶋か関にあらぬやともに　　中務

三三五七　名寄橘の小嶋のくまの河風に昔もきかすすめる月かな　　同

三三六七　同　忍ぶんそてを尋よ橘の小嶋か関は人もとめす

三三七七　玉吟たち花の小嶋か崎の旅枕ぬれてそかほる山吹の花

三三八七　千五百尋つゝ小嶋か崎の山吹のいはぬ色しもしるへかほなる

三三九七　千五百君をきて小嶋か崎の岩枕なみよりほかの波もかけけり

三四〇七　同　暮ぬ美いか見捨て橘の尋こしまの歌冬のはな

三四一七　夫木　郭公宿りやすらん橘の小嶋か崎のあけほのこ空

三四二七　御集　橘のくしまかさきの月影をなかめや渡すうちのはし守

三四三七　同　風をいたみ小嶋か崎にすむをしは見えてもみえぬ波の波まに

三四四七　同　舟かよ山やそうち川のかはる瀬にたれか小嶋の雪の夕くれ

三四五七　夫木　かさしおるやそうち人のあさ衣ぬれて小嶋の山吹のはな

三四六七　御集　都人今もこしまの山吹に波おりかくるう治の川なみ

三四七七　草庵　咲にけり八十うち川の浪間より見ゆる小嶋の山吹の花

木津河　渡　　山城　藻塩

三四八七　名寄　君こすは誰かは見せんこの河のせにうつまく滝の白糸

三四九七　名寄　桃の花咲や三月のみかの原こつの渡りも今盛なり

小松峯　　同　歌枕藻塩三ヲリ

三五〇七　夫木　暮てゆく秋や悲しき嵐吹く松か峯に鹿の鳴なる

越大野　　大和　類音

三五一七　長歌　玉たれのこすの大野の朝露に玉もはひつゝ夕霧に　　人丸

三五二七　同　敷妙の袖かし君玉たれのこすのを過て又もあはぬやも　　同

三五三七　名寄　この野ぬる朝露かけて玉たれのこすの大野に秋は来にけり　　中務

三五四七　夫木　玉たれのこすの大野の女郎花白露かけて咲にけるしな　　同

三五五七　同　身をつめはあはれとそ見る女郎花人もこす野の露にしほれて

三五六七　同　花薄人もこす野の名をしして誰まぬくらん秋の夕暮　　隆源

三五七七　同　玉たれのこす野を行は白露のきくにあまたの虫そ鳴ける　　顕季

三五八七　夫木　玉たれのこすのおほのゝ夕霧ひまもる風にはなの香そする　　鴨長明

忠良　雅経　有家26オ　家隆　光明寺　後鳥羽

巨勢山　　大和　名名云高市郡

三五九七　万一　こせ山のつゝ〳〵椿つゝ〳〵にみつゝ思ふなこせの春のを　　坂上人足

三六〇七　同　河上のつゝ〳〵椿つゝ〳〵に見れとも飽ぬこせの春野は　　蟲麻呂

三六一七　同十三　たらしなの此こせ路から石橋とつゝそわか来る恋てすへなみ　　無名

三六二七　新勅　玉椿みとりの色も見えぬ迄こせの冬野は雪降にけり　　範兼

三六三七　十五番　駒なめてこせの春野を朝ゆけはもゝきか原にきす鳴也　　季能

三六四七　新六　霞たつこせの春野になく雉子いつかありかを人にしらゝ　　光俊

三六五七　夫木　霞たつこせの春野のはつこはねもあすみえす見えすみ　　殿上人　院上西門　院宮大輔

三六六七　現六　霧はる川上遠く日さえてこせのさ山に鹿そ鳴なる　　大炊御門宮大夫　修正　実伊27ウ

木瓶宮　　同　八雲御抄

三六七七　長歌　みけむかふこかめの宮の常宮を定めたまひてあしさはふ　　人丸

目辞も絶ぬそこをしもあやにかしこみぬえ鳥のかたこひ妻朝鳥の通ひし君か夏草の思ひしなへて

光俊26ウ　定頼

米山　河内　鷲百首ニ交野内ノ別所也云々

三六八七 鷲百首 この山の峯とふ鷲のますかきの羽かたかりの名さへなつかし　摂津

国府渡

三六九七 名寄 都人ありやととはは津国のこふの渡にわふとこたへよ

三七〇七 夫木 たつはつる心もしらて津の国のこふとも人のつくるなりけり

昆陽　野池渡　松原　浦　同　類名 武庫郡 藻塩 初名ニ

三七一七 堀後 天の戸をほのかにあけてこやの野の霞と共に立やすらふ　法蔵寺

三七二七 同 いなかい世かるらんこやの池のみくさのもとにすたく蛙は　公任

三七三七 六百番 津の国のこやの渡りの詠にはあそふ人こそひまなかりけれ　顕仲

三七四七 夫木 寒夜はよそのそにそもしも鳴永にけりなこやの池水　兼昌

三七五七 拾玉 こやの池に移れる月の光あれは蘆の下葉の露もかくれす　季経

三七六七 同 絵に書ていさ唐土の人に見せん霞渡れるこやの松原　西行

三七七七 同 津の国のこやの池なる杜若つのくむ芦の花かとそ見る　慈鎮

三七八七 同 津の国のこやこやとや契けん芦まの舟にのりの行末　同

三七九七 同 こやの池のをのかあしまにつらねて枯葉の霜はをしそなくなる　同

三八〇七 名寄 をしてるや難波の浦を見渡せは夕日かくれるこやの松はら　同

三八一七 月清 ふりにけるこやの池水みさひねて芦間も月の影そともしき　同

三八二七 愚草 津国のこや蛍花と今も見る伊駒の山の雪の村きえ　同

三八三七 玉吟 旅ねする難波のこやは荒にけり空に芦まの月そもりくる　同

三八四七 同 立別今朝やこやの花薄まねくけりきもかなかるらん　同

三八五七 家集 こやのいけのあやめにきしる杜若花ゆへ人にしられぬる哉　同

三八六七 夫木 こやの池の汀にたてる杜若浪のおれはやまはら成らん　同

三八七七 同 鴨のゐる難波ほり江はさされてこやの芦かき数おかくやす　同

三八八七 同 わたのへや大江の岸に水越てこや野のきはに舟つなく也　長方

三八九七 同 伊駒山たかねにはの人まにしほり消行こやのいけ水　摂津

三九〇七 同 こやの池におりゐる鴨のひとつおれなかくつのすかた成らん　摂津

三九一七 同 津の国のこやの浦風音つれてあしのうれはに秋は来にけり　摂津

三九二七 同 あしの葉にかくれてすめるなにはのこやは夏こそ涼しかりけれ　摂津

三九三七 同 多されはさらすの日にくるけれはたとりそ渡るこやのまつ原　摂津

三九四七 家集 五月雨はこやのしのやにあしねは共是もほしあへすさかにの糸　後鳥羽

三九五七 家集 秋ふかき難波のあしのさら風にやのしのやし衣うつ也　後鳥羽

古曽部　摂津

津の国にこそへといふ所にこもりて前大納言公任のもとへいひつかはしける

三九六七 詞花 ひたふるに山田もる身と成ぬれは我のみ人をおとろかすかな　能因法師

津の国こそへといふ所にてよめる

三九七七 後拾遺 わか宿の梢の夏になる時はこすの山そ見えすなりける　同

津の国古曽部といふ所に住ける比都なる人に申つかはしける

三九八七 千載 時鳥かたらふ声を聞しより あしのしのやにいそねられぬ　同

粉浜　同

三九九七 万六 住吉の粉浜の四時美閑落も見す隠耳や恋渡りなん　作者未詳

定家

四〇〇七 名寄 よそへても見るかひそなき待人ほとすのとこ夏花ほすけとも　為尹

四〇一七 千首 住吉やこすのとこ夏そなから岸野の草の花も忘す　定家

小松崎　同　藻塩

四〇二七 万代 難波潟浦風さむみ塩みてはこまつか崎に鳥鳴也　勝方

清輔　後鳥羽　家隆　定家　後鳥羽　家房　法蓮　飯福

恋湊　森　伊賀　藻塩

四〇三七　夫木　人をのみこふる湊にまる浪は袖をのみこそうちぬらしけれ
四〇四七　同　なけきのみわが身ひとつにけれは恋のもりともなりやしぬらん
四〇五七　同　うつもれてこん人はなをこひの杜木ゝのこの葉のまたもしぬまに

小浜　伊勢　名寄二当国

四〇六七　名寄　音だかくこはまの浪そ聞ゆなる見うちまする風は吹らしも

衣手山　伊勢　藻塩

四〇七七　懐中　きて見えん事を頼ん身にしめれは立そひぬへき衣手の山
四〇八七　夫木　衣手の山のふもとにたつ鹿のうちさひしきは暁の声

衣里　参河　藻塩或夫木三医奥

四〇九七　名寄　立かへりなを見てゆかん桜花衣の里に匂ふさかりは
四一〇七　同　程ちかく衣の里はなりぬらん二村山を越てきぬれは
四一一七　類聚　今よりは霞もいかに立ぬらん衣の里に春しきぬれは
四一二七　夫木　白妙に咲ぎさなれる卯花は衣の里のつまにそありける
四一三七　同　わきもこか衣の里の梅の花さそくれなゐの色も咲らん
四一四七　同　夜をかさねみやきたら出て時鳥衣の里にきつなく也
四一五七　夫木　春過て夏のひと へになりなから衣の里は名こそかはらね

事任　遠江　藻塩

四一六七　名寄　入もこんわかねきことのまなちはしはしちすな木ゝの紅葉は
　　右さやの中山の道の口なることのまさといふ

杜にてよめるとなん

四一七七　夫木　神かけてたのみしかとも東路のことのまさにはめしすそありける
四一八七　道記　ゆふたすきかけてそ頼むいま思ふことのまさなる神のしるしを

木枯森　駿河　類聚

四一九七　六帖　人しれぬ思ひするかの国にこそ身をこがらしの杜はありけれ
四二〇七　夫木　いくしほ時雨ふりいて染つらんかりくれなゐに木枯の森
四二一七　夫木　行やとて秋はこのとまる哉紅葉ちりしく木枯の森
四二二七　同　ふかくのみ秋のそめゆく紅葉さをもとせにもしす木枯の杜
四二三七　同　うつりゆく日数もいくか紅葉さをもしはしとめよ木枯の杜
四二四七　同　やよやまて今はかきりの秋の色は紅葉にかをる木枯の杜
四二五七　同　君ふと我こそむねきこがらしの秋をはなしにかけになりつゝ

許奴美浜　駿河　類聚

四二六七　百十二　若き山だゝ越きませ磯崎のこぬみの浜に我立またん
四二七七　堀後　いつとなくこぬみの浜に君待とたよる浪の絶ぬ日そなき
四二八七　玉吟　岩木山越てこぬみの浜ひさき久しく成ぬ浪にしほれて
四二九七　夫木　奄崎のこぬみの浜の友千鳥朝みつ塩の声さはく也
四三〇七　同　風ふけはとはになみこすいほさきのこぬみの浜はふねも通はす
四三一七　同　駒なつむいはきの山きこえかねて人もこぬみのはまにかもぬん
四三二七　夫木　かち人はちへのうちわにゆきなはみこぬみの浜はふねも通はす
四三三七　同　よしてらはこぬみの浜のうしまつのとはになみこすねるもしのはし
四三四七　同　たのめてもこぬみのはきの浜松のつれなきいろに恋わたりつゝ

古ゝ井杜　伊豆　類聚

四三五七　拾遺　爰にたにつれ〳〵となく郭公ましてこゝの杜はいかにそ
四三六七　同　思ひやるこゝの杜の雫にはよそなる人の袖もぬれけり
四三七七　新六　露しくれ色に見せてもかひそなき程はこゝの杜の言の葉
四三八七　夫木　人のおやのおもふやいかならんこゝのもりの秋の夕くれ

為忠　31オ
読人不知
定家　31ウ
公朝
為家
後鳥羽
顕光
元輔
行家
法慶師

四三九七 同　まちえたるかひもある哉時鳥こゑの杜にはち帰りなく

小磯浦　相模　藻塩

四四〇七 名寄大磯のこいその浦のうら風にゆくともしらす帰る袖かな

小余綾磯　相模　類字

四四一七 家集之こゆるきのいそのなのりそ名のらぬは袖斗にそさくりしりたる

四四二七 家集風吹は玉もりいたす白波のよせみともなくこゆるきの磯

四四三七 同　こゆるきのなさきに風の吹しからくたものさす浪もよせけり

四四四七 同　こゆるきのあすはあさりにやつれつゝいかなる時かなまめかるらん

四四五七 万葉番　妹たにも待としきかはこゆるきのいそく舟出もうれしかりけし

四四六七 拾玉　都へと思ひたつよりこゆるきのいそく日数も猫つもる哉

四四七七 名寄　わかめかる春やすきぬらんこよろきの磯のあたなみにはしれり

四四八七 玉吟　興つ風吹くる波もこゆるきの磯への千鳥立ぬ鳴なり

四四九七 同　こよろきの磯たちなししまる浪のまるへも見えす多やみの空

四五〇七 千五百こゆるきの磯の松風音すれは夕浪千鳥たちさはくせ

四五一七 類聚　こゆるきの磯山持咲しより興つなみまにとまる船人

四五二七 同　鶴もすみ松も生たるこゆるきの磯のあまさへ千代をこそいのれ

四五三七 夫木　岩かねの磯のはつ草下もえてよすれは青きこよろきのなみ

四五四七 同　こゆるきの磯のわかめもかゝぬ身をおきのゝなみや誰をまつらん

四五五七 同　やくわかめかりそめふしの袖のうへにけふとしなみもこゆるきの磯

四五六七 方与　こゆるきの磯へに風の立ぬらし叢にも咲花のしらなみ

四五七七 同　徒に又此度もこゆるきのいそかて法の舟をこくなな

四五八七 新業風　吹は波も岩根をこゆるきの磯たちならし千鳥鳴なり

氷河　武蔵　藻塩

四五九七 名寄　浦さむみ月の老はやけくて氷川には水もなかれす

四六〇七 夫木　うち解て水もむすはす氷河しなるこゑやわひしかるらん　読人知

32オ

四六一七 同　氷河水底ふかくとてけりはやくなかれし音も聞えす　弥式部

四六二七 同　冬くれはふち せもしらす氷川うへはかみと見えわたりつゝ　紀伊

許我渡　下総　仙覚抄三当国

四六三七 万千四　まくらかのこかの渡のからかちの音高しもぬなへ子ゆへに　無名

四六四 同　あはすしてゆかはをしけんまくらかのこか行舟に君もあはぬかも　同

四六五 名寄　霧ふかきこかの渡のわたし守岸のふなつき思ひさためよ　西行

四六六七 王吟　かしろおす音もほのかに行舟のこかの渡りの秋の夕きり　家隆

四六七七 千首　月そなきをかすみのこれる扰かのこかの渡りの明かたの空　為尹

四六八七 同　吹風にうす雲かけて行舟のこかの渡りの夕くれのそら　同

四六九七 家隆　都鳥にこととふわさも数なしと暮て舟まつこかの渡りは

33ウ

恋瀬河　常陸　類字

内大臣 32ウ

隆祐　四七〇七 続拾遺　恋瀬川うき名をなかす水上も袖にたまる泪なりけり

能宣　四七一七 新拾遺　水のうへの泡と消なは恋せ川なかれて物は思はさしまし

為相　四七二七 名寄　こひせ川つれなき中に行水は年もせかれぬ涙なりけり

心見崎　近江

重之

四七三七 懐中抄　近江なる心見の崎年へてもまし心見よ人忘るやと

四七四七 夫木　あけぬとて心見まてはきにけれとまたふかき夜の渡なりけり　清正

比歌は近江へくたりけるに心見の渡といふ所をきけるに夜ふかきこと云々

宮内

頼綱

攸々内侍主

前内大臣

木葉浦　同

四七七五　千首山風はおよはぬ方のさゝ波に木葉の浦の名をもらすらん　為尹

小松　山谷崎　浜原里　近江　藻塩

四七六　教集　いかにして君か衣にたもつらんこ松の山のすみそめの雲　信明

四七七　堀後さ浪やこまつにたゝて見渡せはみなの御崎にたつむれて行　仲実

四七八　拾玉　なにとこはこ小松の谷の松風に散ても花は又にほひつ　慈鎮

四七九　詠藻　子日して小松が崎をけふみれは春に千世のかけそうかへる　後成

四八〇　名寄　あさほらけ思ひやるかな程もなく小松は雪にうつもれぬらん

四八一　夫木　ゆふ波やしけくよす覧近江もの小松の浜に千鳥なく也　国親

四八二　同　行末のはるかに見ゆる小松はら君かちとせのためしなりけり　清輔

四八三　同　神代よりおひやそめけんこ松原いくちよへぬと知人そなき　道経

四八四　同　みとりなるおなしふたはをひきそへてこ松原にわかなをそつむ　隆教

四八五　同　三千代もかさねてゆつれ君をいのる小松の里の鶴のけころも　[illegible]

己高見山　峯　同　類字

四八六　古歌　あなうめに人もうらみしこたかみの嶺よりおくに庵むすはん　[illegible]

四八七　金　衣手によるこの浦風寒くてこ高見山に雪降にけり　[illegible]

四八八　夫木　さ浪やこたかみ山に雲晴てあしりの沖に月落にけり　[illegible]

四八九　同　こたかみや谷のこ松にかくろへて風のよきたる春をみるかな　[illegible]

四九〇　千首　こたかみの山の嵐ををひてにてしかのみなとへいつる舟人　[illegible]

衣崎　信濃

四九一　名寄　しなのなる衣の崎に来てみれはふしの上漕あまのつりふね　[illegible]

古礼毛我御崎　同

四九二　夫木　すはの海のこれもかみさき詠めつゝけふ甘くらしにおりくらすのみ　師氏

小鶴池　陸奥　和名抄国行方郡

三月はかりにみちのくにまかり行程に雪にこりしたるかこなたきこつるか池を尋くるにやこはいつくそといへはこつるのいけのつ

みとりへは心やりによめるといへは

四九三　重之集　ちよをすむこつるの池しかはらぬはおやのまはりを思ひこそやれ　むねちか

四九四　同　千ちをはひなにてのみやすくけんこつるの池といひて久しき　ちゝ

衣河　同　藻塩和名云磐井郡

四九五　六帖　身にちかきなをそ頼みし陸奥の衣の川と見てや渡らん　貫之

四九六　教集　をとにのみ聞わたりつる衣川袖にかゝるこゝろなりけり　元真

四九七　堀後　夏たつとしるしも見えす衣川いつも舟よる浦しなけれは　兼昌

四九八　六百番　遥なる程とそ聞し衣川やた戦袖の名にそありけれ　隆信

四九九　出教集　とりわきて心もしみてさえそ渡る衣河見にたなけふしも　西行

五〇〇　拾玉　墨染とふにてしりぬ衣川きよき名をたつみちのくまてに　暮下

五〇一　玉吟　衣河今朝たち渡る春風にとけし氷もとけやしぬらん　教隆

五〇二　同　たか袖につむ螢の衣川思ひあまりて玉ともゆらん　同

五〇三　夫木　衣河つまなきをしの声きけはつ我袖のさえまさりけり　読人不知

五〇四　同　衣川みさはにより立波はきしのまつかねあらふなりけり　西行

五〇五　教集　数ならぬ我身はよるの衣川きつれは人のまつかすらん　俊頼

衣関　同　類字

昔ころもの関のおさありしより老たりしを

五〇六　教集　昔見し関守もみな老にけり旦の行をはえやはとむる　重之

五〇七　堀百しら雲のよそに聞しをみちのくの衣の関をきてそこえぬる　顕仲

五〇八　愚草　桜色によるもの山風そめてけり衣の関の春のあけほの　定家

五〇九七 類聚散かる紅葉の錦うちきにて衣の関をすくる旅人
五一〇七 夫木 花の香をゆくてにとめよ旅人の衣の関の春の山風
五一一七 同 桜色のころもの関の春風に忘れがたみの花のかをする
五一二七 同 時鳥衣の関にたつねきてかぬ恨をかさねつるかな
五一三七 同 紅葉ちる衣の関をきてみれはたかたつまをもむなりけり
五一四七 一を初 都にはけふたつ春を過てこし衣の関はいくかなるらん
五一五七 新葉 露むすぶ袖を衣の関路とや空行月も影とむらん
五一六七 古拾初 山賤の結てかつくと妻こそ衣の関と雨もとをさね

恋山　出羽　類寄

五一七七 新勅撰 こひの山しけきを世の露分て入初るよりぬるゝ袖かな
五一八七 千載 恋の山入てくるしき道そとはふみ初てこそ思ひしりぬれ
五一九七 夫木 はらはれぬ恋のちりのつもりてや恋てふ山の名をは立らん
五二〇七 新葉 人やりの道とはきかぬ恋の山我心よりまよひそめつゝ

越中山　越前　藻塩

五二一七 山家集 かり金は帰る道にやまとふらんこしの中山震へたゝ
五二二七 同 ね渡しにしろしの空やたてつらん恋のまさつる越中山
五二三七 名寄 冬ふかき越の中山馬はあれと雪ふみなしかちにてそ行

越白根　加賀　類寄

五二四七 堀百 雪ふれはみなたかしぬ山もなしいつれみこしの白根なるらん
五二五七 拾玉 なきこゑん越のしらねに消ぬ雪の折しぬなは世に残すとも
五二六七 雲葉 都たに跡たゆはかり降雪に越の高根を思ひこそやれ
五二七七 玉吟 哀なりくしの白根に住鳥も松を頼て世をすこすらん
五二八七 同 さえのほる越の白根の冬の月雪は氷のふもとなりけり

家隆
経通
知隆
親隆
光信女
匡房
為忠

五二九七 一を初 うたゝねはさゆる衣の気色にて越の白根の雪をしそ思ふ

越海　越中　類寄

五三〇七 万 三こしの海の角かはまに大舟に真梶ぬきおろしいさなとり
五三一七 同 越の海のたゆひの浦を旅にてみれはともしみ日本思ひつ
五三二七 家集 こしの海にむれはゐるとも都鳥みやこのかたそ恋しかるへき
五三三七 夫木 雲ゐより雁かへるらし越の海の波のやまにかける玉章
五三四七 同 こしの海の山なき物を詠れは心にのみそ月はいりける
五三五七 同 さえ渡る峯の雲よりくしの海の空にもなみの雪の塩風
五三六七 御集 かへる山思ひつるかの越海に契やふかき春のかりかね

越大山　越中　勅撰名所集ノ藻塩ニ当国

五三七七 万十二 み雪ふるこしの大山行過ていつれの日にか我里をみん
五三八七 玉吟 ふきすさむ越の大山こえなやみ日影もみすくるゝ空哉
五三九七 千首 天つ雁春やあらぬを思ふらんゆき越かぬるこしの大山

金村
同
源順
忠季
道因
俊成女
俊鳥羽

永胤
家隆
行家
光俊
読人不知
同
為家

木葉里　杜　同　類聚ノ藻塩ニ当国

五四〇七 類聚 色さそふ木の葉の里の唐錦あらくなたちそすかの山風
五四一七 夫木 時雨のあめまなくしゐはなにしおふこのは杜も色かはり行
五四二七 同 吹くちる風の音こそさひしけれ木の葉の里の秋の夕くれ
五四三七 同 秋山かみ嵐にそひてしくれは木葉の里そさひしかりける
五四四七 現六 ちりまかふ木の葉の里を立別さそすみよしと秋もゆくらん

越路浦　越後　類寄　古志郡

五四五七 現六 降つゝく雪の高波はるゝ とゝかけも見ぬ越の浦風

為俊
家隆
同

五四六七　玉葉物思ひ越ちの浦の白波も立帰るならひありとそきけ　遊女初君

越山　里　同　類寺

五四七七　拾玉こしの山雪けの雲も晴のきて緑を分る雁の諸こゑ　俊頼
五四八七　同　雪はいかにそともの岡の嶺きへはるかの越の山に見すらん　慈鎮
五四九七　堀百嶺高きこしのを山に人人は柴車にてくだるなりけり　同
五五〇七　愚草こしの山またこの比のいかならんなへてのみねにそくはつ雪　顕季
五五一七　夫木こしの山たてまくさほのかひそなき日をふる雪にしるし見えねは　定家
五五二七　同　雪つもるこしの山風ふきぬしひはらまつの葉あらはれにけり　大炊御門
五五三七　夫木月影にうつもれぬとや思ふらん雪にならへるこしの里人　頼政

越水海　佐渡　類寺式越中

五五四七　続後拾遺恨ても何にかはせんあはてのみ越の湖みるめなけれは　俊成

越松原　同　藻塩

五五五七　名寄塩風にえやはむかはん枝もはもそむきにたてる越の松原　定家

越官原　同　藻塩　越惣名

五五六七　万七夏玉つくこしの菅原我かして人のからまくおしき菅原　顕季
五五七七　名寄しらさりきこしの菅原かれ果てかりにもあはぬ契りなりとは　定家
五五八七　新六恋侘ぬありし斗の隙もかな越のすか原人めもりつゝ　大炊御門
五五九七　夫木なにとまた人のからまくおしむ覧しめはさしを越の菅原　頼政

琴引山　但馬　藻塩

五六〇七　六帖いつからかしらへの声の絶にけんこと引山の音の聞えぬ　俊成
五六一七　夫木さのみこそ琴引山と人はいはめしらへても鳴せぬの声哉　喜撰法師　読人不知

古登多賀磯　石見

五六二七　堀百石見潟ことたかの磯による浪のくだけて帰る物としるすや　俊頼
五六三七　教集誰をかはこふわたりなる郭公草の枕にたひ〳〵そなく　忠見

国府渡　播磨

はりまのこふにやとりたるに郭公のなけは　忠見

恋夜　松原　同　雲御抄并藻塩当国

五六四七　懐中人しれすくるしき物を知ぬは猶うらめしき恋の夜哉　駿河
五六五七　名寄いかにせんあひ見る事のふるさとにしけりそまさる恋の松原　駿河
五六六七　夫木ほのかにもなをあ必事を頼てや恋の松原しけりそめけん　駿河

児嶋　備前　類寺　児嶋郡

五六七七　万六大和路のきひのこしまを遍てゆかはくしの小嶋やもほえんかも　大伴
五六八七　同八波の上にみゆる小嶋の雲隠れあないきつかし相別れなは　金村
五六九七　月清友千鳥沖つ嶋にうつる也岸の松風は寒なるしし　俊成
五七〇七　玉吟浜ひさしはるかに霞なかめにも小嶋の波は袖にかけけり　家隆
五七一七　新六浜ひさしさせるかひなきすみかにもみゆるこ嶋の月そ馴ぬる　行家
五七二七　夫木里中かすす花咲ぬれは浪間よりみゆる小嶋も雲かくれつゝ　醍醐寺前太政大臣
五七三七　同　海士のすむ沖つ小嶋の汐風に里もまかはすうつろもかな　家清
五七四七　御集浜ひさし浪のまにまに詠れは見ゆるこしまに有明の月　後鳥羽
五七五七　草庵わたの原多霧はれて波間よりみゆるこ嶋を出る月かけ　頓阿
五七六七　藤川しるらめやたゆたふ舟の波まより山ゆるこ嶋のもとの心を　定家

小池　紀伊　藻塩

五七七七　山家集いかにして稍の隙をもとめ出てこいけに今宵月の澄らん　西行

粉河寺　同

粉河寺の別当なりける僧不調なる事ありて彼寺にもすますなりて侍けるか年へて後熊野にまうつとて粉川寺の前を過ける時ふしおがみて涙をながして

五七八七　玉葉　見るたびに袖をぬらして過かなしおやなかれのこかはと思へはとよみて侍ける御返事として夢に見えけるとなん

五七九七　玉葉　人みなのそこの心のにこれるはおやなかれにすまぬとをしれ

乞許世山　川　同　薬塩

五八〇七　万七　我せをもこちらせ山と人はいへと君もきさきぬ山の名にあらし

五八一七　六帖　おもへゆくこちらせ川にたれしかも色とりかねきみとり染けん

五八二七　散木　鳴をくれしもこせ山の時鳥さなとの里の松のたれすゝ

五八三七　夫木　待まひもいつかはきますわきもこかこちらせ山はその名斗そ

木津神浦　阿波　類聚

五八四七　後拾　木津神の浦に年へてこる波もおなし所に帰るなりけり

許能紀山　筑前　薬塩

五八五七　万五　梅の花もちらくはいつくしかすかにこのきの山に雪は降つゝ

五八六七　玉吟　梅花咲やこのきの山風に衣にまはしおつるしら雪

子難海　筑前　往覚抄二当国

五八七七　万十二　わきもこをとそのゆきみんおもの海のかたの海の嶋なしなくに

五八八七　同十六　紫のかたの海にかつく鳥玉かつき出は我玉にせん

許能本山　同　薬塩

五八九七　万十四　ものしもとこのもとを山の真柴にものとぬ妹かなかたに出んかも　人丸

心関　肥前　類聚二当国

五九〇七　類聚　夜をかさねは心の関のかたき哉空には鳥の空ねなしねと　有教

琴引松　日向

ひろかのくにことひきの松ありきしにはぬるすす

五九一七　教集　白波のよりくる糸をこすけて風にしらること引の松　重之

40ウ

恋河　末勘

五九二七　久安百首　こゐ川に流むに付て思かなりかなをも石になるにや有とん　頼任

古呂々々里　末勘

五九三七　名寄　うなゐかはりおうへに打なとすいしなつゝてのころ〳〵の里　無名

古能久礼山　同

五九四七　万廿　このくれのしけき尾上を時鳥鳴てゆなりいましくらしも　忠岑

五九五七　夫木　待兼て尋きたれは時鳥このくれ山に一声そなく　俊頼

五九六七　久安百首　遣見えぬこのくれ山の松かたにきゝゐもしらす妹か待とん　知教

基房

五九七七　万十四　こすけらの浦吹風のあとすゝかなしけころを思ひすきん　大伴百代

41オ

琴浦　末勘

五九八七　夫木　松風に浪のしらゐをことの浦はかものあそしところなりけり　家隆

古登葉岑　同

五九九七　同　岩の上の苔のうもはとの幾我かことはのみはの月を見るとん　仲正

衣浦　嶋　同

六〇〇七　教集　玉のをゝ君か為にとよりをきて衣の浦をぬすそなりにし　無名

六〇一七　山教集　波ものらふ衣の浦の袖かひを汀に風のたゝみをくかな　俊光

42オ

花園左大臣　不知人　大伴家持　小大君　西行

六〇二七　夫木　立わたるくもの衣浦より千玉は見えて唐戸少るらん　後丸系　頼政
六〇三七　名寄　いやましに夜寒にもあるか波の打衣かしまの秋のうら風　中務

子持山　同　藻塩

六〇四七　散木　子もち山谷ふるところにおいたてて木のはくむ花をこそみれ　後頼忠居
六〇五七　六帖　こもち山わかかへるてのもみつまてねんと思ふ妹はいかにそ

許曽熊里　同

六〇六七　万十四　おほ舟をへにもとめもにもかためてしそのの里人あしはさめかも

東風々河　同　同

六〇七七　家集　をち風かはにたれしかも色さりかたくみとりそむらん　伊勢
六〇八七　夫木　山ひくくこかせ川の吹しにみかさたかく千波のたつらん　行家

越田池　同

六〇九七　六帖　何事もいはてこしたの池にこそ身をなけつ共人にかたらめ

43オ

考嶋　山城

六一〇七　夫木　武士の八十宇治川のえひす嶋落くる水のたけくも有哉　読人不知

榎葉井　大和　藻塩

六一一七　夫木　かつしきやとよらの寺のにしにあるえのは井にそとよ玉しつえ　読人不知
六一二七　同　ふりにけるとよらの寺の榎の葉井に猶とよ玉のこすかはけり　鳴長明

考神　西宮　榎津

六一三七　玄田歌合　世をすくすえひすの神のとかはにはもりさし物を数なとなる身も　安心法師

43ウ

六一四七　同　思へたゝ神にもあしの君たにしるなる物をものゝ哀は　頼政

江口　同

六一五七　あやさなく江口に立てうしとへは悲しき事にたつそ鳴なる　菅家

天王寺へまいり侍けるに俄に雨ふりけれは
江口に宿をかりけるにかし侍らさりけれは
よみ侍ける

六一六七　新古　芦中をいとふ迄こそかたかめかりの宿りをおしむ君かな　西行
六一七七　同　返し　芦をいとふ人としきけはかりの宿に心とむなと思ふはかりそ　遊女妙

得名津　同

六一八七　万三　住吉のえなつにたちて見わたせはむこう泊を出る舟人　黒人

江嶋　相模　藻塩

六一九七　藻塩　文のりまやさして塩ちに跡たるこ神はもかひのふかきなるへし

枝浜　上総　藻塩考三市原郡

六二〇七　懐中　散はける花の名残の恋しさに枝の浜へをきてみつる哉

得名津海　近江　夫木当国

六二一七　夫木　足引の山の高ねにのぼりてそえんなつの海はらかく見えける　能因

江林　美濃　藻塩

六二二七　万七　江林にやとるしかも求めきて白妙の神まきあけて廣得我せ　人丸

枝池　上野　春雨抄ニ当国或未勘

六二三七　名寄　秋風に吹しかれたるしら桜のえたの池にや波のこゆらむ　陸奥　類聚

考

六二四七　拾玉　秋の月あまねき影を詠てそ千嶋のえそも哀しるらん　慈鎮
六二五七　同　月を思ふえそかも嶋に秋かけくかつ〳〵今夜台川のせき　同

44オ

六二六七 同　思ふ事いなみちのくのえそいはぬこほのいふみがきつさねは　同

六二七七 同　あだしやあそがち嶋の春の花試むる色もなくて散しん　同

六二八七 玉吟おくの海やえそか若の烟たに思へはなく風や吹しん　八雲御抄

六二九七 家集我恋はあしかをねしふえそ舟のよりめよしすみ波まをそまつ　同

六三〇七 夫木たまりあしはつかるのおくにあもれてえそかへらぬといもにつけはや　仲正

六三一七 同　みちのくのえそおもしまの鷺のはにたなるのりのもしもありけり　家隆 44ウ

六三二七 同　いつく迄今日はいく野の道なしんえそしらすけの草枕哉　道因法師

六三三七 同　いしふみやつかろのきもにありときくえそ世中を思ひはなれぬ　仲正

六三四七 同　残ましやもしまのえそかつくるなるとくきのせこそ隙はもるなれ　公朝

六三五七 同　八十嶋のもしまのえそかたつかこ心つきしは君にまさしし　季経

六三六七 同　思ひこそもしまのおくをへたてぬとえそかまさぬつほの石ふみ　清輔

同　清輔

同　顕輔

六四一七 万代てしまなるなをたまさかの玉さかに思ひ出とも哀といはなん　顕輔

江河　末勤

六三七七 千首堰の引た河の水のそなれ松又こえて行春のふもなみ　為尹

六三八七 同　鷺のみるえ河におほふし柳今は波こす五月雨のころ　同 45オ

盈泊　同

もとすけすはうにくたれるみもに盈とき

りといふところにていひやる

六三九七 家集盈とまりに我さなをはしらぬはや今迄君か見にさるらん

手須佐比池　山城　夫木ニ当国

六四〇七 夫木あち小田にはり任せつてすさひの池となる迄たくへぬるかな

豊嶋　摂津　和名ニ豊嶋郡

六四二七 古歌月夜にはてくらの杜むくらかしすましてしらの浜いかならん　手倉杜　同　八雲御抄

天王寺　同

六四三七 拾玉にしへてむかふる君をたのむみちは難波の寺の御門なりけり　慈鎮

天王寺にはうてよみ侍ける

六四四七 同　難波津に人のぬかひをみつ塩は西をさしてそ契をきける　同

六四五七 同　この国の難波のうらの大寺の額のめいそまことなりけれ　同

彼寺に戒師初てきくとて読侍ける

六四六七 続後撰今更にたもたは玉を越なん難波の寺の人忘れかひ　前太政大臣

天王寺の西門にてよみ侍ける

六四七七 新勅撰さはりなく入日を見ても思ふかな是こそ西のかとてなりけり　安芸 46オ

手越崎　駿河

六四八七 夫木こく舟はとまもなしはてまかもとるて越の崎をいつる白波　九条内大臣

出羽

六四九七 山家集なくひなき思ひ出はの桜かなうす紅のはなの匂ひは　西行

寺泊　越後

為兼佐渡国へまかり侍し時越後の国てらと

まりも申所にて申をくり侍し

六五〇七 玉葉物思ひしちの浦のしら波も立帰る習ありとそきけ　初君

手間　関山　出雲　八雲御抄

六五一七 六帖八雲たついつもの国のてまの関いかなるてまに君さはるらん

読人不知

六五二七　同　まてしはし人しり見んや我せこをとゝめかねてはてゝまとなつけし　まくらの左大臣 469

六五三七　堀百さりともと思ひかとも八雲たつてゝまの関にも秋はきまして　細頼

六五四七　玉吟　まつ月のてゝまの関やの板間あとみ影もたましす秋風そふく　家隆

六五五七　同　君か代に雲吹はらへあまつ風越てかへらむてゝまのせき山　同

六五六七　新六　あかつきの袖の別をしほしをてとりたにとめよてゝまの関守　知家

寺井　未勘

六五七七　百丸　ものゝふのやそのいもらか汲まかゝる寺井のゝへのかたかこの花　

六五八七　新六　いもかくむ寺井の上のかたかこの花さく程に春そなりぬる　衣笠

松葉名所和歌集第十終

47オ

松葉名所和歌集第十一　阿

嵐山　寺　山城　葛野郡

六五七　堀百　嶺高き嵐の山の紅葉こはふもとの里の錦とそみる
六六〇七　同後　夕つくひさすや嵐の山風物わびしらに猿さけぶ也
六六一七　六百大井河いくせのほれはうかひ舟嵐の山の明わたる覧
六六二七　千五百　立まれは衣手涼しあらし山秋やとなせの滝のしら波
六六三七　同　秋の暮嵐の山を過ゆけは袖にこき入る岸の紅葉ゝ
六六四七　山家集　夜もすから嵐の山に風寒て大井の淀に氷してけり
六六五七　拾玉　思ふへき人もあらしの山寺にはかなくとまる我心かな
六六六七　同　嵐山木葉ふりしく麓よりしか住宿を思ひこそやれ
六六七七　雲葉　又たくひあらしの山のふもと寺杉の庵りに在明の月
六六八七　月清　ふもと行ゐせきの水や永る覧ひとり音する嵐山哉
六六九七　愚草　残る色も嵐の山の神無月ゐせきの波に落すくれなゐ
六七〇七　同　吹ほらふ紅葉の上の霧晴て峯たしかなる嵐山哉
六七一七　夫木　ことほりや嵐の山に咲花は心のとかに匂はさるらん
六七二七　同　吹おろす春の嵐の山風にとなせの滝の花のしら波
六七三七　同　くる人もなき物ゆへに呼子鳥誰をあらしの山に鳴覧
六七四七　同　紅葉の木末にゑしし嵐山庭をさかりと吹かへてけり
六七五七　御集　暮にけり秋の日影も嵐山紅葉を分て入相の鐘
六七六七　同　嵐山我身よにふるなかめしてはなに匂ひの庭の紅葉は

阿俊尼原　山城

六七七七　百十三　長歌　千早振うちの渡の滝のやのあこにの原を十年にも
かくる事なく万代にありかまほんと山科の石田の
森のすめ神にぬさとりむけて

阿太古　山原　同　類名

六七八七　六帖　我為に何のあだこの山なれや立しと思ふ人のいる覧
六七九七　堀百　時雨つゝ日数ふるともあだこ山楢か原に雪積り花つむ人の跡たにもなし
六八〇七　古今　あだこ山しきみか原に雪積り花つむ人の跡たにもなし
六八一七　名寄　我とはあだこの山にしをりする色木の枝の情なかなや
六八二七　愚草　あきけき朝日の影にあだこ山雪も氷も消そくたくる
六八三七　玉吟　我宿はそなたをみてそ慰むる誰かあだこの山といひけん
六八四七　夫木　あだこ山また降雪も消なくに楢か原に霞たな引
六八五七　千首　よそよりもゆきまさりけり景さすあだこの原に若な摘てん

景井戸　山城　類名　愛宕郡

六八六七　名寄　こなき摘景の井戸の杜若花の色こそへたてさりけれ
六八七七　夫木　北へ行都の空の春の雁あかたのゐとの人や聞らん
六八八七　同　山吹はいはぬ色にも咲にけり景の井戸の里のしるへに
六八九七　春雨　なく景の井戸に春くれて咲やしぬらん山吹の花
六九〇七　新葉　歌冬の花もてはやす人もなし景の井戸は都ならぬは
六九一七　千首　山吹の花の陰にや宿とはんあかたのゐとにけふも暮しつ

同　景宮　同　類名

六九二七　新続古　我頼む景の宮のます鏡くもらぬ空をあふきてそみる

栗田山　同　類名

六九三七　六帖　栗田山さゆとともこゆと思へ共猶相坂はるけかりけり
六九四七　拾十　みるまゝに烟のゝたつあはた山はれぬ悲しき世をいかにせん

師頼　仲定　家隆　雅経　讃岐　西行　慈鎮　教蓮　俊成

喜撰法師　顕仲　好忠　俊頼　定家　家隆　匡房　為尹

後京極　定家　同　崇徳院　雅有　讃岐　為家　後鳥羽

俊成　光俊　為氏　後鳥羽　炒光寺内大臣　原京親王

同　無名

師光

喜撰法師

六九五七　大木行て見よ憂ひけさはたなひくとあはだの山のすその小松を
六九六七　同　東路を行つくしつゝ葉田山よりこえて君を社思へ

飛鳥井　同　類寺

六九七七　千五百駒とめて爰にはしし宿すらんみまくさもまきあすかぬの影
六九八七　秋　新撰玉葉合　絶〳〵に影をはみせて飛鳥井の御馬草かくれ飛螢哉
六九九七　愚草いかて猶わかてにかけて結ひみんたあすか井の影斗たに
七〇〇七　夫木あすかぬに影やとしつるかり人はみつはさむみや駒にかふらん
七〇一七　家集秋はてもいかは待んあすかぬのみつわくむまてなれる身なれは

阿弥陀嶺　山城　葉塩

七〇二七　懐中道しけくさはりおほかる身なれ芙あみたか嶺はゆかむとそ思ふ
七〇三七　家集今よりはあみたの峯の月影を千代の坂まて頼むへき哉

雨森　同　夫木二当国

七〇四七　夫木ありとてもとふくなくて古郷に雨のもりくる音そかなしき
七〇五七　同　このもとを頼むこゝろも有物を雨のもりにそ思ひわつらふ

有栖河　山　同　類寺　愛宕郡

七〇六七　家集君すまぬ御ゐちほあれてありすゝ川いむすかたをも移しつる哉
七〇七七　名　寄いさしすみつねは爰に有栖河君か御幸にけふこそすみれ
七〇八七　同　いかてもと思ふ心はありす河うちなかれても年をふる哉
七〇九七　夫木春風は花さそふとし浪の上に消せぬ雪のありす川哉
七一〇七　同　多されは空もをくらの郭公有栖の山に声な忍ひそ
七一一七　同　ありす河いつきの葵の秋の花千世をかねたる松虫の声

上総　読人不知
野宮　忠房
中務　西行
定家　家隆
読人不知　同
俊頼　同
公任　同
読人不知　為家
和泉式部　為親
読人不知　光明寺
不知　定家
俊頼　行家
西行　俊成
躬恒

朝日山　嵩嶺　同　類寺　守治郡　有同名　近江ニ

七一二七　同　月ゆへはまたねぬ里の有す川夜寒しらせて衣うつせ
七一三七　同　有栖川松のまひの影みえてちとも斎のすみぬへき哉
七一四七　同　をとに聞斎の宮のありす川たゝなをかの波り成けり
七一五七　堀百　風寒み冬の夜すからをく霜の朝日山にはとけやしぬ覧
七一六七　同　後朝日山さして来つれとタ立にかつく秋はひるよしもなき
七一七七　山家集　天の原朝日山より出れはや月の光のひるにまかへる
七一八七　名　寄朝日山霞むこなたの伏見田井打おすへき時ほきにけり
七一九七　月清　末遠き朝日の山の嶺に生る松には風もときは成けり
七二〇七　玉吟　朝日山すその野へに雪消て八十うち人も若な摘也
七二一七　同　匂へたゝ朝日の山の桜花行てもおしぬ人の袖まて
七二二七　夫木　朝日山長閑き春のけしきよりやそうち人もわかな摘らし
七二三七　同　朝日山峯の紅葉を見渡せはもの梢に照まさりけり
七二四七　同　朝日山嵐や色に出ぬらんもみちふりつむうちの梁船
七二五七　同　紅葉の猶色まさる朝日山夜のまの露の心をそしる

秋山　池　山城　類寺　紀伊郡

七二六七　鳥羽殿五首　聚君か代に光もそへす末遠きちとせの秋の山のはの月
七二七七　名　寄霧晴る鳥羽田の面をみ渡せは行末遠き秋の山里
七二八七　詠藻　人とはいかにかたらん秋の山松のあらしに在明の月

建永元年八月十五夜鳥羽殿に御幸の時御製

七二九七　類聚いにしへも心のまゝにみし月の跡を尋ぬる秋の池水
七三〇七　夫木　雁の鳴とは田の面に露落て月影とめぬ秋の山風
七三一七　拾玉　月影に衣して打音さえて鹿鳴かはす秋の山里

忠房　後鳥羽
西行　他人
俊成　上阿
家隆　慈鎮
同
為家
為親
光明寺
定家
行家
俊成
躬恒

飛鳥　川　石橋　大和　藻塩　高市郡

七三二七 百二 飛鳥川あすたにみんと思やも我大君の御名忘せぬ　人丸
七三三七 同三 我せこがいにしへの里のあすかにはチ鳥鳴也嶋待兼て　長屋王
七三四七 同 けふもかもあすかの河のタさすす蛙鳴瀬の清くある監見　上古麻呂
七三五七 同四 君によりことのしげきを古郷のあすかの河に御祓しに行　代女王
七三六七 同六 古郷のあすかはあれと青丹よしならのあすかをみやことしもな　坂上郎女
七三七七 同七 年月もいまだへなくにあすか川瀬さに渡し石橋もなし　無名
七三八七 百七 飛鳥川七瀬の渡に住鳥も心あれはこそ波たさしらめ　無名
七三九七 同 あすか河瀬さに玉藻は生たれとしからみあれはなひきあへす　同
七四〇七 同 絶す行あすかの河のよもみなは心あるとや人の思はん　同
七四一七 同十 今行て聞物にもか飛鳥河春雨降て滝つせのをと　同
七四二七 同 雁金の声聞なへにあすかよりは春日の山は紅葉そめなん　同
七四三七 同 あすか川紅葉流るゝかつらきの山の木葉は今し散らん　同
七四四七 同十一 飛鳥川あすも渡らん石橋の遠き心はおもほえぬかも　人丸
七四五七 同 あすか河水行まさりいやひけに恋の増れはありかてぬかも　同
七四六七 同 飛鳥川行瀬をはやみ早見んと待らん妹を此日くらしつ　同
七四七七 同十二 あすか川高川遠し越て来るつかひは今夜あけすゆかめや　同
七四八七 同十三 飛鳥川瀬さの玉藻の打なひき心は妹によりにけるかも　無名
七四九七 同 飛鳥河川戸を清みをくれぬて恋れは都いや遠そきぬ　清麿
七五〇七 教集 世中を何にたとへんあすか川走なきまに滝つ水の泡　源順
七五一七 同 けふ人を恋る心はあすか河なかるゝみおにをとにまりけり　宗于
七五二七 同 飛鳥川人頼めなる世成けり渡初けん我そくやしき　元真
七五三七 同 あすか河ふち瀬かはらぬ今更に昔かたりのなそ流ぬる　忠見
七五四七 百六 飛鳥河淵瀬隙なき世中に人のつらさはかはらさりけり　中宮権大夫

七五五七 拾五 あすか川流てけふも暮ぬれは春にあふせは今夜せけり　恵鎮
七五六七 同 飛鳥河走なき世をいとはねは淵にも瀬にも宿る月影　同
七五七七 名寄 飛鳥風むへさえくしけうみれはまかみの原に雪は降つゝ　良清
七五八七 月清 あすか河瀬となる末も有物を袖にはふちの朽果るまて　徳業極
七五九七 同 淵と瀬も隙なくかはる飛鳥川人の心の水やなかるゝ　同
七六〇七 愚草 たをやめの袖か紅葉かあすか風徒にふく霧の遠かた　走教
七六一七 玉吟 古郷や冬は飛鳥の河風にたつたらすうつ衣かな　教隆
七六二七 玉吟 うすくこき紅葉流るゝ飛鳥川かはる淵瀬は色にみえけり　教隆

飛鳥寺　大和

拾芥抄云元興寺推古天皇始建ノ飛鳥井寺本法興寺

七六三七 続後拾 暮ぬ世ねくら尋て飛とりのあすかの寺の入相の声　久明親王
七六四七 堀後 うゐの世はけふかあすかの寺の鐘を哀いつ迄きゝんとすらん　兼昌
七六五七 名寄 いか斗光をそへん朝日まつあすかの寺の法のともしひ　知教

天香具山　同　類字

七六六七 百一 春過て夏きにけらし白妙の衣さらせり天のかく山　天皇御製
七六七七 同三 あもりつく天のかく山霞たち春にいたれは松風に　鴨君足人
七六八七 同 いつしかも神さひけるかかく山の むろの木に苔むす迄に　同
七六九七 同 わすれ草我ひもにつけかく山のふりにし里を忘ぬる為　帥大伴卿
七七〇七 同十 久方の天のかく山此夕霞たなひく春立しも　人丸
七七一七 同十一 かく山に雲みたなひくねほしくもひみしをを後恋んかも　同
七七二七 同 かく山に高へさ渡りたかくに我待君をまち出んかも　紹時
七七三七 堀百 久方の天のかく山の都公玉ゆらさなけ雲のまに〳〵　走教
七七四七 名寄 花盛霞の衣ほころひて嶺白妙の天のかく山
七七五七 同 君戸明て面白といふたくひにや天のかく山月は出けん
七七六七 名寄 香具山の滝の氷も解なくに吉野の嶺は雪消にけり　好忠

七七七　建保　夏衣いつかは時を忘れ車日も夕暮の天のかく山
七七八　同　五月雨は天のかく山をしこめて雲のいつこに有明の月
七七九　同　見渡せは朝立雲の夏衣そらにほしける天のかく山
七八〇　同　郭公鳴一こゑや過ぬらん今そ明行天のかく山
七八一　同　榊葉に夏の色とや走をるしみとりそ深き天のかく山
七八二　月清　雲はるゝ雪の光や白妙の衣はすてふ天のかく山
七八三　月清　岩戸あけし神代も今の心ちしてほのかに霞む天のかく山
七八四　玉吟　さかき葉に雪の白ゆふ春かけて霞もあへす天のかく山
七八五　御集　春のきておろす嵐はまゆれ矣霞さいそく天のかく山
七八六　夫木　いとゝしく照こそ増れ紅葉に日影移ろふ天のかく山
七八七　同　時雨つる梢はなれて夕つく日錦ほすてふ天のかく山

阿太大野　大和　仙覚抄三号回

七八八　万十　真葛原なひく秋風吹毎にあだの大野の萩の花ちる
七八九　堀百　心からあだの大野に生たちて風にたはるゝ女郎花哉
七九〇　夫木　真葛はふあだの大野に鳴鹿のひとつ恨の秋の夕くれ
七九一　同　風渡るあだの大野の葛かつら長き恨に鹿そ鳴なる
七九二　同　秋風にをけはかつらる白露のあだの大野に鶉鳴なる
七九三　御集　をく露のあだの大野のまくす原恨のほなる松虫の声
七九四　夫木　秋ふかみあだの大野の露霜にやうしはも移ろひにけり
七九五　万抄　女郎花うしろめたくもみゆるかなあだの大野にてると思へは
七九六　現六　戎り行あだの大野の夏草のみのなきかたや我身成覽

朝原　同　類多

七九七　角総巻　霧ふかきあしたの原の女郎花心をませてみる人もなき

教隆　走衡　忠走　範宗　知教　後宗極　後宗極　教隆　後鳥羽　後三条　範宗

七九八　教集　片岡の朝の原を過行は山ほとゝきす今そ鳴なる
七九九　同　いつしかといそく心のさき立て朝の原をけふみつる哉
八〇〇　同　東雲に朝の原を越くれはまたよこもれる心ちせすれ
八〇一　堀百　いつしかと朝の原にたなひけは霞そ春の始成ける
八〇二　同　我なしぬ人聞しめや珍しきあしたの原の鶯のこゑ
八〇三　堀後　浅ちふの露に上毛やそほつ覧朝の原に鶏鳴なり
八〇四　拾玉　焼すさふ朝の原は草立て春雨晴ぬ岡のへの里
八〇五　名奇　別ぬる朝の原の忘水ゆく方しらぬわか心かな
八〇六　正治　あちきなや朝の野への草枯て虫そかこる音をは鳴しか
八〇七　愚草　霜さゆる朝の原の冬枯に一花さけるやまとなてしこ
八〇八　玉吟　けふも又朝の原の春雨に染る草葉そ色まさり行
八〇九　新六　もすのみる古枝の萩も冬枯て朝の原に秋そ暮行
八一〇　草庵　降雪の朝の原にきこゆ也春をたとらぬうくひすの声
八一一　同　明渡る朝の原になく露のさやかにみえて秋はきにけり
八一二　夫木　まとろまく行かひなしや子規あしたの原に一声そ鳴
八一三　同十　露結ふ岡部の小篠明る夜の朝の原に秋は来にけり
八一四　夫木　鶯の声聞野へに出る日の朝の原は春めきにけり
八一五　同　帰るさの朝の原の青つゝらくるしき道と今そ知ぬる

無名　紳時　御門院　為教　同　後鳥羽　宋清　顕季

吾妻野　大和　類多

八一六　万一　あつまのゝ畑のたくろ所なて帰りみすれは月傾きぬ
八一七　新六　吾妻野の真弓のもとは色うりてしきはすかもいつ紅葉せん
八一八　夫木　よくに聞あつまの小野の下蕨いかなる時か折にあふへき
八一九　同　東野のさゝやの床のかり枕ふしもならはぬよを重ねつゝ
八二〇　同　あつまのゝかやか下行忘水むせふ涙やなをみたるらん

伊勢　重之　同　河内　紀伊　兼昌　慈鎮　兼昌　経家　走表　教隆　衣笠　頓阿　同　匡房　為教　後九条　俊平　人丸　行表　為教　為氏　内大臣

八二二七 同 あつま野の霞ののりねのかや延みゆらんさまでてこそ思ふとは 走衣

八二三七 千首 吾妻野の空には雲の晴ぬれと袖にしとるこ萱ゝ下露 為尹

青香具山　同　八雲御抄

八二三七 拾万 長歌 日本のあをかく山は日のたての大き御門に春の山 作者未詳 9オ

遊岡　大和　藻塩

八二四七 藻塩 ふく笛の社の神は音にきくあそひの岡や行帰る鹿

痛足　川山　同　仙覺抄ニ当四

八二五七 万七 巻向のあなしの川に行水の絶る事なく又帰りみん 人丸

八二六七 同 あなし河川浪高し巻向のゆつきか嵩に雲たてるらし 同

八二七七 万十二 巻向のあなしの山に雲みつゝ雨はふれともぬれつゝをくら 無名

八二八七 六帖 榊葉にまさきの白ゆふ引かけてけふは痛足の山のつとせよ

八二九七 堀百 みなはゝまゝとゝなめはしる痛足河隙こそなけれ波の白ゆふ

八三〇七 名寄 桜咲あなしの山の花かつら檜原をかけて匂ふ春かせ

八三一七 玉吟 巻向のゆつきか嵩に雲冴てあなし川波朝氷せり

八三二七 同 まさもくの痛足の山の山かつらかけて幾夜い人と恋らん

八三三七 千五百 巻向のあなしの檜原春くれは霞をかけて山かつらをり

八三四七 同 小夜更て嵐吹らしあなし川河音高く成増るなり

八三五七 夫木 あなし河ふる山かけてくる春のしるしとけさは水ぬるめる

八三六七 同 痛足河氷みにけり巻向の檜原の私不いかくたん

八三七七 同 巻向のあなし河風よきてふけ匂へるもみち今盛なり

八三八七 新葉 まさもくの山にや雪の積るらんあなしの檜原風静也

阿保山　同　八雲御抄

八三九七 万十 あほ山のさねかの木の花はけふもかも散まふらん人なしに 無名

八四〇七 新六 あほ山と名にこそたてれをつのうら嶺のさねかの木は花咲にけり 行家 10オ

秋津野　宮川　小野　大和　八雲御抄

八四一七 拾万一 長歌 御心を吉野の国の花散ふ秋津の野へに宮はしら 紀伊ニ有同名 人丸

八四二七 同六 みよしのゝ秋津の宮は神かんたふとかるらん国かしか 金村

八四三七 同 みよし野の秋津の河の万代に絶る事なく又帰りみん 同

八四四七 同 三吉野の秋津の小野の野上には跡見居置てみ山には 赤人

八四五七 同九 滝の上の三船山より秋津へに来鳴渡るはたれよふこ鳥 作者不審

八四六七 同十 あきつのを尾花川そへ秋萩の花をふきさね君かり庵 無名

八四七七 同十二 みよしのゝ秋津の小野にかる萱の思ひ乱てぬるよしもなき 同

八四八七 夫木 さても猶流てすめる我身かな秋津の川のあま果し世に 為家

八四九七 同 みよしのゝ秋津の鮭をのれのみなくはなしひに人もとかめす 行能

八五〇七 同 三吉野の秋津の宮の桜花いくよ咲くか神さひぬらん 尊海 10ウ

八五一七 草庵 青たてゝはや吹にけりかけろふの小野の秋津の秋の初風 頓阿

赤膚山　同　類名

八五二七 六帖 世をうしと思ひいれともあかはたの山は身をこそ隠さるけれ 喜撰法師

八五三七 新続古 衣たにふたつ有せは赤膚の山に二つはかさまし物を 住吉明神御歌

八五四七 夫木 紅葉するあかはた山を秋ゆけは下照はかり錦をりつゝ 顕仲

天河　同　河内ニ有同名

八五五七 夫木 よしの山花や散らんあまの川雲のつゝみを洗ふ白波 俊成

八五六七 同 花の色をひとつにこめて天河雲の波とやみよしのゝ山 紫光

八五七七　同　芳野山雲ゐに花のちる比は天河浪かけぬ日そなき　匡房

阿騎大野　大和　仙覧抄ニテキ野大和国也ヨシノ山ノタニアリトモ

八五八七　万一　み雪ふるあきの大野にはに薄しのをしなみ草枕　人丸

八五九七　同　あきの野に宿る旅人打なびきいもねもしや古思ふに　同

青垣山　同　八雲御抄　勅撰名所集二吉野郡

八六〇七　万一　畳有青かき山の山神のたつる御調と春へには　人丸

八六一七　同十二だいなつくあを垣山のへたつれはしほく君を言とはぬかも　無名

青嶺山　同　八雲御抄

八六二七　万一　長歌　耳高の青嶺山は背反の大きみかとにまろしなへ
神さひたてり名くはしみ吉野の山は影反の
大き御門に雲居にそ遠くありける

青根峯山　同　類聚

八六三七　万七　みよし野は青根か嶺の苔莚誰かをりけんたてぬきなしに

八六四七　同十四　青ねろに棚引雲のいさよひに物あるさく思ふ年の此比

八六五七　同　ひとねろにいはる物から青ねろにいさよふ雲のまさりつまはも

八六六七　堀百　苔莚青根か峯もみえぬまて吉野の山はみ雪降らし

八六七七　同　白雪の降しきぬれは苔莚青ねか嶺もみえす成行

八六八七　同　さほ姫のあさふ所か奥山のあをねか嶺の苔の莚は

八六九七　宝叡集　青根山苔の莚の上にしく雪はしとねの心ら社すれ

八七〇七　千五百　苔莚あをねか嶺は名のみしてたゝ白雲のまさめ也けり

八七一七　夫木　みよしのゝ青ねか嶺の名もしるくとはゝ人ゆる松の村立

八七二七　同　みよしのゝ青根か峯の時鳥苔の莚に聞人そなき

八七三七　同　花待といくよねぬらんみよしのゝ青ねか嶺の草の莚に

八七四七　同　よしの川湊の波による花や青ねか峯にまゐる白雲　頼政

八七五七　夫木　芳野山青ねか嶺に月すめはさゝの小川に玉をしつめる　知海法師

八七六七　ま抄　残なく花散にけり苔莚青ねか嶺の雪のむらきえん　仲実

八七七七　新葉　みよしのゝ青根か嶺は名のみして時雨にうつる木ゝの紅葉ゝ　中宮

在原寺　大和　類聚
ありはら寺をみて読侍りける

八七八七　玉葉　形はかり其名残とて在原のむかしの跡をみるもなつかし　為子

浅小竹原　同　八雲御抄

八七九七　百十一　神なひのあさゝゝ原の女郎花思へる君か声のしるけく　人丸

八八〇七　名奇　ゆふかけておらは惜まん神なひのあさゝゝ原の秋萩の花　同

八八一七　夫木　かれぬるかゝるものあきの神なひのあさゝゝ原の霜の下草　衣笠

八八二七　同　露しけきあさゝゝ原の女郎花いかなるふしに契をきけん　良教

秋篠　山里　同　類聚　平群郡

八八三七　玉葉　朝日さす生駒の嶽はあらはれて霧立のぼる秋篠の里　宗俊

八八四七　名奇　風吹は竹の葉さやく秋篠の里もさひしき夕間暮哉　衣笠

八八五七　玉吟　長き夜の伊駒おろしや寒ぬらん秋しの里に衣搗也　教隆

八八六七　夫木　初雪は冬のしるしに降にけり秋篠山の杉の木末に　西行

八八七七　名奇　秋篠やと山の薄ほのゝくと明る峯よりおろす秋風　玄盤

安多師野山　同　類聚

八八八七　新後　あたし野や風待露をよそにみて消ん物とも身をは思はす　為道

八八九七　宝叡集　あたしのゝ風にみだるゝ糸薄くゝなしに何まねくらん　走教

八九〇七 月清人の世は思へはなへてあたしの〻蓮かもとのひと〻白露　光俊
八九一七 玉吟 命かは何さは露のあたし野にあふにもかへぬ松虫の声　前左大臣
八九二七 夫木 あたし野に霞もつらし散初る花をそ風に立隔ましし　小宰相
八九三七 同 あたしの〻萩の末こす秋風にこほる〻露や玉河の水　公朝
八九四七 同 人心あたしの野への真萩原移ろふ色も程は有けり　隆弁
八九五七 同 あたし野の萩の末葉の露よりもあやしくもろき我泪かな　加賀法師
八九六七 同 女郎花露の衣をかさねきて何あたし野にたれふすらん　土御門入道
八九七七 同 あたし野の萩の錦や床ならむ露吹あかす女郎花哉　後鳥羽
八九八七 同 安多師野になまめきたてる女郎花見捨てえこそ帰るましけれ　後京極
八九九七 同 あたしのは名こそつらけれ女郎花露にしほれぬ隙しなけれは　表隆
九〇〇七 同 我宿にうつてもみる女郎花あたしの野へのしるあたきに　後頼
九〇一七 同 聞をきし名をあたしの〻しの薄いつれ初て招くけしきそ　同
九〇二七 同 露は猶千種なからにあたし野の秋を鶉の声のみをする　為家
九〇三七 同 浅茅原頼むにもあらすあたしの〻あたに結へる露の契は　雅光
九〇四七 同 露たつ嶺の桜の朝ほらけくれなゐくる天の川波　基俊
九〇五七 山家集 あくかれし天河原と聞からに昔の波の雲にかをれる　大炊御門右大臣
九〇六七 方子 千鳥啼天の川辺に立霧は雲とそみゆる秋の夕暮　道経
九〇七七 同 霞たつ嶺の桜の朝ほらけくれなゐくる天の川波　慈尊法師
九〇八七 玉吟 かた野わけ月にそみゆる天河遠方人の心はるは　後鳥羽

天河　河内　類字

天王寺へまいりけるに交野なと申渡り過て
みはるかれたる所の侍けるを問けれはあまの
河と申を聞て宿からんといひけん事おもひ
出されてよめり

九〇九七 新六 これや此空にはあらぬ天河交野へゆけは渡る舟橋　顕昭 13ウ
九一〇七 題林 星合の光やこゝにうつるらん かたの〻御野の天の河水　小侍従
九一一七 夫木 あまの川秋とやなれも望る覽かたの〻みの に帰る雁金　順徳院
九一二七 同 天河きしへの桃や咲ぬらん空さへ花の色に匂ぬる　象長
九一三七 同 爰にては雲ゐにみえて男山天川こそ麓なりけれ
九一四七 同 露分し野辺の秋草枯しをりみかりはつらき天の川風
九一五七 同 天河やこ夜寒なる風の音にかたの〻里も衣うつせ
九一六七 御集 天河川瀬に宿をかり衣交野の冬の雪の夕くれ

荒山　和泉　豊前ニ在同名

九一七七 建長年百首歌本夫木 いつみなるあら山桜咲ぬらし槙の葉しのきかくる白雲　公朝 14ウ

蟻通　同　神社考ニ此社当国云

九一八七 象集 かき曇りあやめもしらぬ大空にありとほしをは思ふしやは貫之
九一九七 歌林良材 七わたにまかれる玉のをこぬきく蟻通とは我をしすや　坂上郎女

有間山　摂津　類字

九二〇七 万三 歎つゝ我なく涙ありま山雲ゐたなひき雨にふりきや　人丸
九二一七 同十一 大君のみかさに成へる有間菅ありつゝみれと事なきわきも　無名
九二二七 同十二 みな人の笠に縫てふ有間菅ありて後にも逢んとそ思　興風
九二三七 六帖 あひ思はぬ人を思ふそ病なる何か有間の中へも行へき　忠房
九二四七 堀後歎のみありまの山に出る湯のかくてせもふる我身哉　兼昌 15オ
九二五七 同 わたつ海は香けき物をいかにして有間の山に塩湯出らん　俊盛女
九二六七 建保 有馬山ねろす嵐のそよきつゝ秋をもまたぬなの篠はら　中務親王
九二七七 方子 初雁のうきて思ひの有馬山立夕霧の空に鳴也　定家 14オ
九二八七 定家隆

九二八七　家集　有間山おろす嵐のさひしさに霰降せゐなのさゝ原　走家
九二九七　名奇　心ある有馬のうらの浦風は分て木葉を残すなりけり　扇王
九三〇七　明玉　神まつる花の時にやなりぬらん有馬の村にかゝる白ゆふ　光俊
九三一七　夫木　ありま山峯の松風音聞てゐなの篠原鶏鳴なり　公衡
九三二七　同　有馬山雲間も見えぬ五月雨に出湯の末も水増りけり　俊成女
九三三七　同　有馬山君か御幸も年ふりぬ頼むしるしを神もあらはせ　為家
九三四七　同　有間山しくゝ嶺のときは木に独秋しるはし紅葉哉　同
九三五七　同　ありま山おろす嵐の吹よせてゐなのさゝ原紅葉しにけり　資隆
九三六七　草庵　短夜のゐなのさゝ原明ぬれと影は有間の山の端の月　頼阿
九三七七　同　跡たれていつまりぬ爰に有馬山杉をしるしの三輪の神垣　同

万葉摂津四廿一首歌中也　然文北歌摂津成八ノ歌但勅撰名集ニ歌長門二入初句何

阿胡海　摂津

九三八七　万七　時つ風ふかまくしらすあゝの海の朝けの塩に玉も刈てな　無名

浅沢小野　沼　同　藻塩・住吉郡

九三九七　万七　住の江のあさ沢をのゝ杜若きぬにすりつけまゝ日しらすも　無名
九四〇七　堀百　杜若浅沢沼のぬま水に影をならへて咲渡るかな　師頼
九四一七　同　住吉の浅沢沼の杜若あかぬ色ゆへけふもとまりぬ　師時
九四二七　家集　いかにして浅沢沼の杜若むらさきふかく匂ひそめけん　走家
九四三七　同　萌出る草の葉末にあらはれてあさはをのに残る白雪　同
九四四七　正治　心さしあさ沢沼のあやめ草いかはねやのつまと成へき　経家
九四五七　玉吟　春の日の浅沢をのゝ薄氷誰ふみ分てねせり摘覧　家隆
九四六七　同　春ほまたあさゝは小野に吹風の草のはつかにかゝる白浪　同
九四七七　千五百　いかて猶しはしも人に住吉の浅沢水の末はたゆとも　雅経
九四八七　夫木　春の色や浅沢小野の忘水たえく霞む住吉の松　同
九四九七　同　紫の色はふかきを杜若あさ沢小野にいかて咲らん　俊成

九五〇七　同　住吉の浅沢小野の女郎花誰まつ風に露しほる覧　寂恵法師
九五一七　同　風吹はあさゝはをのゝ花薄ひとつにつく沖つ白波　為家
九五二七　同　あさゝゐる浅沢をのゝ人はなれさひしく遠き水の上哉　信定
九五三七　同　住吉のあさ沢水のたえくに岸のあら田は種蒔にけり　為家
九五四七　御集　契りさへ浅沢沼の杜若へたて出ぬる名さへつらけれ　俊馬羽

葦屋　沖津里　摂津　筑前一有同名

九五五七　万九　芦のやのうなひ乙女か奥榊をゆゝくとみれはねのみしなかる　南橘連虫丸
九五六七　出家集　浪高き蘆屋の沖をかへる船のことなく世を過んと思ふ　西行
九五七七　拾玉　眺やる心にあとはつきにけりあしやの里の雪の明ほの　慈鎮
九五八七　同　恋しくはあし屋の沖の曙に思ひもめへす袖やしほ覧　同
九五九七　同　木葉吹むこの山風立ぬらし芦屋の沖にあまの釣舟　同
九六〇七　同　都思ふあしやの里の沖つ風独身にしむはそ悲しき　同
九六一七　同　いく度か夢より夢にうつろらん蘆屋の興の舟の通路　同
九六二千五百　浦ちかき芦屋の里に日は暮て浪路の霧に蜑の漁火　忠良
九六三七　新六　夕なきにあしやの沖の塩風にそはれて鳴村千鳥かな　光俊
九六四七　建保　芦の屋の灘の塩やのうす霞まかふ烟を春やわく覧　行意
九六五七　同　あしの葉の霜枯果し里の名を霞にむる空のやへふき　俊成女
九六六七　同　あさ緑霞にけりな蘆の屋のまた霜枯の冬とみしまに　範宗
九六七七　同　津国や霞む芦やのみこもりにしたはも春の浦風そ吹　行能
九六八七　同　侘こもすめは住けり津の国のあしやの里の春の明ほの　康光
九六九七　新葉　浦にすむ思ひやなとと芦のやの絶ぬ烟をとふ人のなき　読人不知
九七〇七　現六　かきくらすあしやの里の五月雨に此比やかぬ塩さゝらくる　後京極
九七一七　月清　葦の屋の灘の塩やきいとまあれや磯山桜かさすあま人　走家
九七二七　愚草　芦の屋の我住かたのをさ桜ほのかに霞むかへるさの空　同
九七三七　同　あしのやのかりねの床のふの間に短く明る夏のよなく　同

16オ　17オ

九七四七 大木 心ありて誰か聞らん津国のあしやの里の螢のこゑ　矢衛門侍

九七五七 同 難波人芦間のあやめあしのやにやかてそへてやけふはふく覧　俊成

九七六七 同 螢とふあしやの浦に蜑のたくひとまも晴ぬ五月雨の空　後鳥羽

九七七七 同 網はめる芦屋の沖の朝霞まさめてさくたな引にけれ　後徳大寺

九七八七 御集 あしのやの灘の塩屋の海士人もしほる袖のいとなきまて　後鳥羽

九七九七 同 月残る蘆屋の里の有明に昔にたるあまのいさり火　同

九八〇七 同 津の国の芦やの里にとふ螢たかすむ方のあまの漁火　同

浅香浦　摂津　類多

九八一七 万二 夕されは塩満きなん住江のあさかの浦に玉もかりてな　弓削皇子

九八二七 千載 玉藻かる方やいつくそ霞たつあさかの浦の春の明ほの　為相

九八三七 新続 身にしめと吹にけらしな玉もかり浅香の浦の秋の初風　伊成

九八四七 大木 塩ハなふあさかの浦の追風に梶も取あへす出る船人　惟範

九八五七 同 住吉の浅香の浦のいそ枕塩みちくすはこゝにあかさん　伊嗣

芦間池　同　類多

九八六七 明玉 難波潟あしまの池の水の色も浅緑にそ春はみえける　伊勢

九八七七 名寄 水くらく芦間の池の夕闇に夜をしる虫の影そはのめく　中務

九八八七 現六 ねぬる夜はむへさえけらし今朝はまた芦間の池もつらゝにけり　知家

九八九七 夫木 なにと我芦間の池のみくりなはくるしの世にましりなん　中務

九九〇七 春爾抄 よしさらはいひたにはなくとにかくに芦間の池のさける契を　赤人

阿倍嶋　摂津　類多

九九一七 万三 あへの嶋鵜の住石に奇浪のまなく此比やまとしねもほゆ　家隆

九九二七 新勅 君の上に波こすあへの嶋つ鳥憂名にぬれて恋つゝふる　後鳥羽

九九三七 大木 あへ嶋の岩うつ波のまなくてすむとも聞ぬ千鳥鳴也　中務

九九四七 古来 あへ嶋やうのみる君に降雪の波にいくたひ消つもるらん　後鳥羽

芦浦　同　類多　伊勢ニ在同名

九九五七 拾玉 あしの浦のいとたなくもみゆるかな波は寄ても洗はさりけり　悪鎮

九九六七 新続古 深き江にしけりし物を難波潟拾くは聞しあしのうら風　読人不知

蘆若浦　江　同　藻塩

九九七七 若葉巻 あし若の浦にみるめはかたくとも立なから帰る浪かな　読人不知

九九八七 新勅 芦若の浦にまゝする白波のしらしらしな君は我思ふとも　元真

九九九七 袁集 難波潟こけと小舟は芦若のえさる程こそ久しかりけれ　同

霰松原　同　藻塩ニ住吉郡

〇〇〇八 万一 霰降あられ松原住江のおとひ乙女とみれしあらぬかも　長皇子

〇〇一八 建保 冬も今日数つもりの浦寒く雪にも成ぬ霰松原　行通

〇〇二八 同 浦風の霰松原吹ままひ玉ませぬる住江のなみ　忠定

〇〇三八 同 さま更て霰松原住吉の浦ふく風に千鳥鳴なり　知家

秋野浜　浦　同

〇〇四八 六帖 津国の秋野の浜の忘貝我はわすれす年はふれとも

〇〇五八 名寄 津国の秋野の浦のうつせ貝拾ひにゆかん波はたつ共

味経原　宮　摂津　藻塩

〇〇六八 万六 長歌 興つ鳥あちふの原に武士の八十ともの夫は庵して
都となせり旅にはあれとも
海石のしほひの共に納渚には千鳥妻まひ芦辺には

〇〇七八 同

田鶴か音しきみ見る人のかたりにすれはきく人の
みまくほりしてみけ向ふあちふの宮は見れとあぬかも
○〇八八夫木たつの浦あしへの波に袖濡て味経の宮に月をみる哉
○〇九八同　をしてるや海かたまけてみけ向ふあちふの宮に玉ひろふかも

安計小野　　同　夫木三当国

○一〇八夫木あけをのゝひさきましりの浅ちふも今はすかるの臥所成けり

上小竹葉野　　同　藻塩

○一一八万十一　妹か髪あけさゝ葉野のはなれ駒荒行けりしあはぬ思へは
○一二八堀百　網引するみつの浜へにさはかれてあけさゝほの〈田鶴帰る也
○一三八万代　妹かかみあけさゝは野の女郎花朝をく露の玉かつしせり
○一四八玉吟　たゝ髪を上さゝ葉野に乱つかさしの玉と散ちるらん

無名
小僧都玄覚
公朝
仲実
俊頼
人丸
家隆

芥河　　同　類る

○一五八六帖　月影に音をみしまの芥川あくとや君か音信もせぬ
○一六八拾遺　人をとく芥川てふ津国の名にはたはぬ物にそ有ける
○一七八金葉　津の国のまちやは人をあくた川君をつしらせはみえしか
○一八八夫木　花もまた散ぬる果の芥河帰らぬ波に春そくれぬる
○一九八新葉　おしめたゝ散なん後はあくた河それとも見えし花の白波
○二〇八名寄　あくた川みくつとなりし昔より流もあへぬ物をこそ思へ

味野原　　摂津　藻塩三当国異(マヽ)アケ野トアリ也何ニ

○二一八堀百　月清みあちの〻原の夕露にさゝめかくる衣さぬれぬ

哀其杜　　伊賀　藻塩

○二二八名寄　かきくらし雨のふる夜は時鳥鳴くすくなり哀その杜

朝熊　　伊勢　類る

○二三八続拾　神代より光をとめく朝熊のかゝみの宮にすめる月影
○二四八続古　神さひて哀幾世に成ぬらん波にはれたる朝くまの宮
○二五八風雅　春風の山根の桜吹たひに浪の花ちる朝熊の宮
○二六八夫木　朝くまのしはひに残るます鏡なとしら波の思ひ寄せん
○二七八同　朝熊や君根の桜年ふれと花の鏡の影そくもらぬ

隆弁
嘉陽門院
走忠
為教
神主尚良

朝日宮　　同　類る

伊勢遷宮の年るみ侍ける歌

○二八八玉葉　神風や朝日の宮の宮うつし影長閑なる世にそ有けれ

鎌倉右大臣

朝香山　　同　藻塩三五時雨紅葉ヨミタルハ当国

○二九八万八　時待ておつるしくれの雨やみて朝香の山の移ろひぬ覧
○三〇八夫木　いはなれはあるかの山のあやにくに紅ふかく紅葉しぬらん
○三一八夫木　雲晴ぬあるかの山も秋くれは畑を分て紅葉しけり

市原王
家隆丸
俊頼

荒城田　　伊勢　〈雲御抄或志摩

○三二八万七　ゆたねまきあらきの小田を求んとあゆみ出ぬれぬ此川の瀬に
○三三八同十五　あらき田のしゝ田の稲を倉につみてなうたくし我恋らくは

阿古木浦　　嶋　同　類る

○三四八六帖　逢事をあこきの嶋に引鯛の度かさならは人もしらなん
○三五八続千　冬ふかきあこきの嶋のもしほ木に雪つみそへてこゆる浦風

無名
忌部豊光
津守国助

○三六八 新千 いかにせんあこきか浦のうらみても度重れはかなる契を　後照念院　藻塩
○三七八 新後拾 忘すな度をかさねて塩木つむあこきか浦に駒し月影　藤全　法師
○三八 名奇 塩木つむあこきか浦に寄波のたひ重ならはいかもそしれ

安麻郡　同　藻塩

○三九八 名奇 程ふれは詠めもほしく成にけりあまの郡にゆるやしなまし

網代浜　同　八雲御抄

○四〇八 名奇 磯に咲あしろの菊を塩ひなは玉とそとしら波の下草　頼人
○四一八 夫木 我こふるやそうち人にあひもみて網代の浜にひをもふる哉　不知
○四二 袖集 塩みては入江の水もふかこし網代の浜にまる沖つ浪　躬恒

網児之山　同　八雲御抄

○四三八 万四 あこの山五百重かくせる作堤の崎そはへしみの夢にしみゆる　市原王

朝明山　郡　同　和名三伊勢国朝明郡

○四四八 名奇 このねぬるあさけの山の春風に霞を分て花を散けり　走教
○四五八 名奇 さこ分る朝けの山の下露にぬれて涼しき夏衣かな　行蓮
○四六八 同 冬寒み朝けの水とらつれは岩間の水の音そ絶ぬる

阿波羅気嶋　伊勢　歌枕名寄

神崎のむかひにちいさきしまく七つありこれを
あはらけといふそのほかに草木もおひぬいはほ
ありけなしといへこれなるへし

○四七八 名奇 あはらけの嶋は七嶋そのなかにけなしはへて八嶋せけり

21ウ

葦浦　同　藻塩

○四八八 名奇 潜帰り猶見てゆかん伊勢嶋やしまめくりする芦の浦風　管盤若入道
○四九八 同 風そよく蘆の浦間の夜半の月鏡をかけし船かとそみる　真親

22ウ

安濃　河原　松原　湊田　同　藻塩

○五〇八 名奇 鈴鹿山ふりはへ越てみ渡せはみとりに霞むあのゝ松原　西園寺入道
○五一八 同 いせの海見わたりかくる浪間より数もかくれぬあのゝ松原　専俊
○五二八 同 神風やいせちを行は冬寒し安濃の河原に千鳥鳴也　長明
○五三八 同 打渡すあのゝ湊田ほのくとかるもからぬもみえぬ朝霧　為家
○五四八 藻塩 み渡りの月は秋なる浪の上にまたほに出ぬあのゝ湊田
○五五八 夫木 伊勢の海あのゝ松原まつとてもいひし日かすに波は越つゝ

熱田　尾張

○五六八 堀百 星崎やあつたのかたの漁火のほのも知ぬや思ふ心を　仲実

阿波手浦　杜里　同　類聚

○五七八 名奇 片糸のあはてのの浦の浪高みこなたかなたに寄船もなし　経家
○五八八 同 かた糸のあたの玉のをよりかけてあはての杜に露消ねとや　走教
○五九八 同 日暮れはあはての里のわしはへの鳴ふるさは物も聞えす　読人不知
○六〇八 玉吟 たゝ染よ時雨も露も置霜もあはての杜の秋の夕暮　教隆
○六一八 同 みるめかるゝんまのあまし契しもあはての浦のかひやなからん　同
○六二八 類聚 夜もすがらくゆるもくるし波たてるあはての浦の蜑のもしほ火　後鳥羽
○六三八 建保 我恋はあはての杜の夏草の人こそしらねしけるは比かな　頓徳院
○六四八 同 さりともと色に出ぬることのはもあはての森の名にく鶯く　行意
○六五八 同 日数ふるあはての杜の下紅葉散くる露の色に出にけり　走衡
○六六八 同 名にしおはゝあはての森の呼子鳥うきはためしのまはの一声　俊成女

23オ

○六七八　同　いつとてもあはての杜の夕露のなと秋風にたへす散らん　兵衛内侍
○六八八　同　身にとまる思ひはいれもしられけりあけくの杜の夜半の木枯　忠定
○六九八　同　白露のをきたにあへす枯にけり又もあはての森の下草　知家
○七〇八　同　そのまゝにあはての杜の秋のくれ袖より外に色かはりけり　範宗
○七一八　同　きかしたゝあはての森の名もつらし憂ためしある音成けり　行家
○七二八　夫木　つゝの猶あはての杜の郭公思ひかねたる声たてつなり　琳聖法師
○七三八　同　侘はつる身を空蟬のをのれのみあはての杜に音をや鳴覽　康光
○七四八　同　みせはやなあはての浦のうつせ貝うつふし伏て歎く気色を　俤仁法師
○七五八　同　なのりそを蜑のみるめに刈なしてあはての浦にさよひ忘れぬ　基行
○七六八　同　浪風に友よひはすす小夜千鳥さてもあはてのうらみてや鳴　基良
○七七八　同　つはなぬくたりにとゝそ思ひしかあはての森に帰りぬる哉　読人不知

雨山

三河国名所歌合雨山　　参河　　或葦塩ニ筑前

○七八八　夫木　あめ山にまつゝなけはや杜鵑声の色うへぬれ渡るらん　為忠
○七九八　同　五月闇晴る間もなき雨山にいかに蛍の消せさらん　盛忠
○八〇八　懐中　雨山のあたりの雲はうちつけにくもりそのみをみえ渡りけり

安礼之崎

参河　仙覚抄ニ当国

○八一八　万一　いつこにか船はてすらむあれの崎漕絶行し棚無小舟

天中河

遠江　葦塩

○八二八　名寄　天つ空中なる川の名のみしていつはやすの渡り成けん
右記云天中河にいたりぬこれはしなのこすはの海の末となんいへるわたり船をみれは棹もさし

やらぬなるへしとなん

吾跡河　　同　葦塩　近江ニ有同名

○八三八　万七　霰降遠江にあるあと河柳刈つとも又も生てふあと川柳　人丸
○八四八　名寄　春雨は降にけりしは遠つあふみあと河柳ふかみとり也　宗尊親王

遇沢

駿河　類聚并葦塩ニ当国

○八五八　類聚　思へはなうのりし世にもあひ沢の水の泡とや人の消なん　長明

阿部

市田嶋山　　同　仙覚抄ニ当国

○八六八　万三　焼津へに我内きしかは駿河なるあへの市路にあひしらはも　春日蔵有老
○八七八　同十四　坂越てあへの田面にみるたつのともしき君はあすゝへもかな　無名
○八八八　六百　心さしあへの市路に立人は恋に命をかへんとやする　中宮権大夫
○八九八　名寄　君かためやまひになれはよつまゝへあへの市にはゝ摘也　俊頼
○九〇八　同　早苗とるあへの田面にはり立て市に出たる人をすくなき　円尊
○九一八　玉吟　田鶴のみるあへの田面の在明にまた坂越て帰るかり金　家隆
○九二八　夫木　さなへとるあへの田面の村雨に坂こえて鳴郭公かな　中務
○九三八　新葉　村雨の過行雲は坂こえてあへの田面に秋風をふく　行義
○九四八　千首　坂越てその目かりも程遠しあへの田面の明ほのゝ空　為尹

足柄山

御坂関峯　　相模

○九五八　万三　しらさたて足柄山に船木きり木に切ませつあたら船木を　沙弥清寿
○九六八　同　足柄のはこね飛越行田鶴のともしきみれはやまとしなもほゆ　無名
○九七八　同十四　足柄のをてもこのもにすすわなのかなるましつみ比あへ紐とく　同
○九八八　同　我せこをやまとへやりてまつしたす足柄山の杉の木の間か　同

〇九九八　同　足柄の箱根の山に栗まきて実とはなれるを栗なくもあやし　同

一〇〇八　同　もゝつしま足柄を舟あるきおほみ目そかるらめ心はもへし　同

一〇一八　同　足かりのまゝの小菅のすゞ枕あせかまぬさんゝろせたまくら　同

一〇二八　同　足柄の御坂かしゝみくもりよのあかしたはへきらてつるかも　同

一〇三八　同　我ゆきのいきつくしかは足柄の嶺はつくもゝみとしのはね　服部於田

一〇四八　同　足柄の御坂にたして袖ふれる若なる妹はやにみもかも　藤原部等母丸

一〇五八　家集　足柄の山にしけれる玉ゝすけ行かゝ駒もすまゝりけり　元真

一〇六八　堀百　あしからの山の峠にけふきてそふしの高ねの程はしらるゝ　河内

一〇七八　同　足柄の山の紅葉はちるなへに清見か関に秋風そふく　師頼

一〇八八　山家集　雪しくるしゝみにしたくかゝ崎の道行にくき足柄の山　西行

一〇九八　拾玉　あしからの関を夜さへ越るかな空行月に駒をまかせて　慈鎮

一一〇八　同　うれしくもそのくさかきの宮ゐして寄るにしるき足柄の関　同 26オ

一一一八　拾玉　遠さかるまゝに都の忍はれて涙せきあへぬあしからの関　慈鎮

一一二八　詠藻　足柄の山の手向に祈れともぬさと散かふ山さくらかな　俊成

一一三八　玉吟　霞分ねに行鳥もとふさたつ足柄山を越そ暮ぬる　家隆

一一四八　いめにせんすくらはゆめて足柄や横はしりする人の心を　仲正

芦海　相摸　藻塩

一一五八　道之記　今もりは思ひみたれしあしの海の深き恵みを神に任せて　長明

葦河　同　大木二当国

一一六八　大木　一夜とも宿をはかへすあまたひ立りてみる芦川の波　為相

雨降山　同　藻塩

一一七八　名寄　立まれと雨ふり山の木本は頼むかひなく成ぬへらなり 26ウ

麻機山　同　藻塩

一一八八　名寄　夜とともにあさはた山にきる物は木ゝのもみちの錦せけり

阿比中山　同　藻塩

一一九八　家集　東路やあひの中山程せはみ心の奥の見えはそあらめ　西行

秋名山　同　八雲御抄

一一〇八　百十四　あしかりの秋なの山にひゝ舟のしりひかしもまゝらはこかたに　無名

荒磯　武蔵　春雨抄ニ当国　成本勘

一一一八　大木　あら磯の岩もとのすり立浪のたましきてぬる袖かな　寂蓮

阿賀須沼　同　八雲御抄ニ当国

一一二八　拾玉　年を経て引人絶すみゆるかなあかすの沼に生るあやめは　慈鎮 27オ

荒磯　磯崎　武蔵

一一三八　百十二　草陰のあらみの崎の笠嶋をみつゝか君か山道こゆらん　無名

一一四八　千首　興つ浪あらみの磯の岩に生る松にもにたる袖の上哉　季能

一一五八　大木　ねきつ浪あらみの崎の汐風に吹よせられて鳴千鳥哉　今出河院案衛

一一六八　同　秋の夜のあらみの崎のかさしまにさし出る月は草陰もなし　為家

一一七八　現六　沖つ風あらみの崎に寄波のうけもたゆます人を恋しき　信実

阿須波神　宮　下総　類聚

一一八八　万廿　にはなかのあすはの神にこしはさしあれはいはん帰りくるまてに　若麻績部諸人

一一九八　新千　頼むそまあすはの神にすす柴のしはしの程もみねは恋しき　法印定為

一二〇八　家集　今さらにいもかへさはやいちしるきあすはの宮に柴をすすとも　俊頼 27ウ

芦穂山　常陸　仏覚抄ニ常陸国　新沼郡

一三二八　万十四　筑波ねにそかひにみゆるあしほ山あしかるとかもなみなくに　無名
一三二八　名奇　芦ほ山花咲ぬれはつくはねのそかひにみれは雲そたな引　表隆
一三三八　遠保小男鹿の角くみぬらし芦穂山ほに出て鳴秋はきにけり　表隆
一三四八　恵草　蘆穂山やまず心はつくはねのそかひにたにもみしくなき比　走表
一三五八　玉吟　桜花ふくや嵐のあしほ山そかひになひく嶺の白雲　表隆

阿自久麻山　同　藻塩

一三六八　万十四　あともへかあしくま山のゆつる葉のふきまる時に風吹すかも　昭人
一三七八　斬六　ゆつりはの常磐の色も埋れぬあしくま山に雪のふれゝは　衣笠
一三八八　同　いやましにあしくま山はみ雪ふる峯のゆつる葉いそ玉らん　行表 28オ

佐浦　常陸　藻塩

一三九八　名奇　立しまりこれもひとつにさけくなりあやしの浦の浪の心は　表隆

芦間山　同　藻塩

一四〇八　夫木　舟とむる入江のさほの音すみてあしまの山に秋風そ吹　俊光

会瀬浦　同　藻塩

一四一八　名奇　七夕のあふせの浦に寄波のまとはすれと立帰りつゝ　中務

会限川　同　陸奥有同名

一四二八　万代　つもりくとも忘す恋んかしまなるあふくま川のあふせ有やと　無名 28ウ

逢坂　山関清水　近江

一四三八　万十　わるも子に逢坂山のしの薄ほには咲出す恋波るかも　宅寺
一四四八　同十五　我妹にあふ坂山を越て来てなきつるれと逢しもなし
一四五八　賢草巻　行方をなかめもやとん此秋はあふさか山に露なへたてそ

一四六八　関屋巻　相坂の関やいかなるせきなれはしけきなけきの中を分らん
一四七八　若葉巻　年月を中にへたてゝ相坂のさもせきかたくねつる涙か
一四八六百番　別路の有けるものを逢坂の関を何しにそゝ越けん　経表
一四九八　同　会坂の関のこなたに名をとめてこれもり過ゝ歎せまとや　隆信
一五〇八　同　さきの世に契ちきりけゝ身のうきや相坂山の君か関守　兼宗
一五一八　表集　春雨に君をやりては逢坂の関の名たてに恋や渡らん　躬恒
一五二八　同　今まてに相坂山の紅葉のちらぬは関やさへてとあけゝる　同
一五三八　同　なに、我夜半にきつゝん相坂の関あけてこそ駒も引けれ　源順
一五四八　同　夜こゆと誰か告けん会坂の関かたむめり早く帰りぬ　伊勢 29オ
一五五八　表集　君と猶千年の春に逢坂のし水は我もくまんとそ思ふ　貫之
一五六八　同　思ふ人またさもあらす相坂の関の名そはなのみ成けれ　同
一五七八　同　逢坂の関路に年はへぬれとも けふの清水や名をはなかさん　清正
一五八八　同　打はへて恋しもすまし相坂の関に心をとめつるかな　元輔
一五九八　同　別路をねしむ心のさくら花逢坂まではちらてあらなん　朝忠
一六〇八　同　わかるとも又相坂の関ちかく知もしらぬもまはりけり　同
一六一八　同　跡たえて行も帰るも年をへて人の越ふるあふ坂のせき　元真
一六二八　同　さやかにもみえすそ有ける相坂のさまよりみゆるもゝ月の影　忠見
一六三八　同　見まほしと思ひし駒に引むかへ君かくらにそ相坂の関　同
一六四八　堀百　君か代の千年の秋に相坂は駒の心ものとけかりけり　顕仲
一六五八　同　鳴なるは逢坂山のくつは虫駒むかへする人やきくらん　師時
一六六八　同　数ならす君か為にと引駒はいくよの秋かあふ坂の関　紀伊 29ウ
一六七八　同　相坂の関は越にし東路をなと今さらに又まふらん　河内
一六八八　同　逢坂の関の関守出てみまむやつたひの鈴聞ゆせ　匡房
一六九八　同　こまひ引御牧の駒は相坂の山より出る月毛なりけり　顕仲
一七〇八　山家集　分てけふ相坂山のかすめるは立をくれたる春やこゆらん　西行

一七八一 拾玉 君とわかこゝろをしるしるを名にめて相坂山は行ぬ日さなき　慈鎮
一七八二 同 東路をはるかにきつるかひありて都の人にあふ坂の関　同
一七八三 同 引とめてうれしとそ思ふ君にけふ相坂山の関のしらへは　同
一七八四 詠藻 逢坂を越てしもこそ中くにしかの浦波袖にかけつれ　俊成
一七八五 建保 君に猶逢坂山のかひそなき杉のふる葉に色しみえねは　走参
一七八六 名奇 相坂の山のみねにて鳴声はましらのみこそ哀成けれ
一七八七 同 鳥居たつ会坂山のさかひなる峠の神よ我ないのめそ
一七八八 同 会坂の関の庵の琴の音はふるき梢の松風そふく
一七九八 名奇 せはくともわら屋の軒に立いらん夕立かふる相坂の関　参隆
一八〇八 月清 春や今相坂越て帰るらんゆふつけ鳥の一声そする　中務

近江海　近江

一八一八 万七 近江の海波おそろしと風守り年はやへなん漕とはなしに　無名
一八二八 同二 いきなとり近江の海を奥放て漕来る船はへにつきて　大后御歌
一八三八 同十一 あふみの海沖つ白波しもすとも妹りといはゝ七日越てん　人丸
一八四八 同 近江の海興漕舟にいかりおろしかくれて君かこと待我を　同
一八五八 同 あふみの海しつく白玉しらすして恋せしよりは今そまされる　同
一八六八 万十二 あふみの海へたは人しる奥つ波君を置てはしる人もなし　無名
一八七八 同十三 相坂を打出てみれはあふみの海白ゆふ花に浪立わたる　同
一八八八 参集 まそにのみ近江の海とかひなくて恋しき波そ立渡りける　中務
一八九八 堀百 さゝ波やあふみの海の朝代木に波とともにやひをのまるらん　匡房
一九〇八 月清 恋侘る人に近江の海といへとみるめはおひぬ物にそ有ける　有参
一九一八 六百 中くにみるめ斗はたくとも終にあふみの海と頼めよ　猪苔極
一九二八 正治 君か為近江の海をいくそたひ桑田になせと是置けん
一九三八 月清 ひら山はあふみの海の近けれは波と花とのみゆる成へし

青柳村　杜橋里　同　類多

一九四八 堀後 春の程は霞の中にみえしかと霧も立けり青柳の原　仲実
一九五八 名奇 春風の緑によれる糸なれはみたれにけりな青柳の杜　甲斐
一九六八 良玉 暮て行春やこれより過始覧花ちりつもる青柳の橋　無名
一九七八 夫木 よゝをへて絶しとそ思ふ春毎に糸ありかくる青柳の森　匡房
一九八八 同 うすくこく花田の糸をより懸て玉を染ける青柳の杜　小待従詠人不知
一九九八 夫木 木枯の風は吹とも散すして青柳の里やとゝは成らん

阿渡川　河原　湊　近江　八雲御抄

二〇〇八 万七 高嶋のあと川波はさはけとも我は参思ふたひねかなしみ　無名
二〇一八 同九 足利をは漕行舟は高嶋のあとの湊にはてにけんかも　高市
二〇二八 同 高嶋のあとの湊を漕過て塩津菅浦今か漕らん　小弁
二〇三八 名奇 楸生るあとの河原の浅茅生も残らす霜に枯果にけり　好忠
二〇四八 夫木 高嶋や阿渡川柳風吹はぬれぬしつくにかゝる白波　順徳院
二〇五八 同 楸生るあとの河原の川風にたくふ衛の声のさやけさ　清輔
二〇六八 同 夜のまにや冬はきぬらん楸おふるあとの河原に枯は散しく　禅性法師
二〇七八 同 筏おろすあとの早川せきとめて春行秋をしはしとゝめん　好忠
二〇八八 同 高嶋やあと川波に船とめてあすはかちの原を問かなん　権僧正
二〇九八 名奇 あさりして漕まふ舟は高嶋のあとの湊によりにけるかも

足利海　沖　同　仙覚抄三国

二一〇八 万九 あしりをは漕行舟は高嶋のあとの湊にはてにけんかも　高市
二一一八 玉吟 明ぬるかきた月影は高嶋の足利の浦を出るつり船　参隆
二一二八 夫木 さゝ波やこたかみ山に雲晴てあしりの沖に月落にけり　後恵
二一三八 同 たつかみし沖の白洲もかくろへぬあしりの海の五月雨の比　仲遠

浅井岡　　同　　和泉当国浅井郡

二二四八　夫木　秋はまたあさゐの岡の小篠原結ひやすらんちよの初露　　顕昭

朝妻　三井渡　　同　　仙覧抄ニ当国

二二五八　万十一　けふ行て明日はこんといふ子鹿(カ)に朝妻山に霞たな引　　慈鎮

二二六八　万十子　ちか名につけのよろしき朝つまの片山岸に霞たな引　　同

二二七八　袁集　朝妻の三井のこのかけ茂り合てさかへ行せをみるかたのしき　　同

二二八八　袁集　おほつのな伊吹おろしの風さきに朝妻船はあひやしぬ覧　　衣笠

二二九八　同　くれ舟よ朝妻渡り今朝なませそ伊吹か嵩に雪しまく也　　親房

二三〇八　詩歌合　朝妻や空のをちこち霞むなり花かあしぬか志賀の浦波　　無名

二三一八　月清　朝妻や遠の外山に出る日の氷をみかくしの辛崎　　成茂

二三二八　夫木　あさつまの片山桜咲にけりあすはんといふ人にみせはや　　基氏

二三三八　同　夜をこめて春は来にけり朝妻やかた風山に霞たなひく　　為家

二三四八　同　鳥の海や朝妻舟も出にけり つなく氷を風やとくらむ　　為家

二三五八　御集　春は猶あさつま山を出る日に浪立をむるしのかた崎　　慈鎮

二三六八　千首　雪もまた朝妻船に降つまてかけろふみゐる浦風そ吹　　衣笠

近江宮　　近江　類名

二三七八　拾遺　さゝ波やあふみの宮は名のみして霞たな引宮木寺なし　　親房

栗津　原野　森里　　同　類名

二三八八　六帖　思ひ出て恋しくも有かあはつ野の小萩か本に我行しより　　無名

二三九八　袁集　うゐあしき里の名なれや君に我あはつの原のあはて帰れは　　成茂

二三〇八　同　栗津野のあはて帰ればせたの橋こひてかへれと思ふ成へし　　基氏

二三一八　堀百　我せこかかりにのみぐるあはつ野に鶏鳴なり草かくれつゝ　　俊光

二三二八　六百　鷹の子を手にはすへねと鶏鳴栗津の原にけふもくらしつ　　顕昭

二三三八　拾玉　栗津野の尾花か末にほのみえて霧立渡るせたの長橋　　慈鎮

二三四八　同　露ゑめてさことも見えすあはつのすくろの薄いつく成らん　　同

二三五八　同　あはつの尾花か風に散やそてにくる露は蛍成けり　　同

二三六八　同　栗津野の尾花か下に吹めて風に波すす山おろしかな　　同

二三七八　拾玉　栗津野の尾花につくさゝ波を吹なみたりそ山おろしの風　　慈鎮

二三八八　新六　とやかへるつみを手にすへ栗津の、鶏かちんと此日くらしつ　　衣笠

二三九八　夫木　こふれともあはつの原に咲萩の花と散なん名を惜けれ　　親房

二四〇八　万代　鷹の子はまろに給はん手にすてくあはつの原に鶏からせん　　無名

二四一八　現六　みるめなき浦こそ袖のぬれもせめうたくあはつの杜の下露　　成茂

二四二八　同　関嵐夜さむに吹やさゝ浪の栗津の里に衣うつなり　　基氏

二四三八　夫木　いるけふは衣手ぬれてふる雪のあはつの小野に若な摘ん　　為家

二四四八　同　古郷のあはつの原の桜花むかしの春もさくや匂ひし　　能宣

二四五八　同　栗津野や遠き霞に声もりて花のかつたふ入相の鐘　　為家

二四六八　同　夏ふかみまたかりそめぬあはつの雉子のひなの草隠つゝ　　衣笠

二四七八　御集　層深き栗津の原の暮かたは合する鷹も手に帰る也　　後鳥羽

二四八八　夫木　女郎花花の色さへあはつのに結へる露の乱てそちる　　為顕

二四九八　同　人そりて栗津の杜にゐる鷺のみのけにとかと思ひたせ共　　鎌倉中務

二五〇八　同　夕つくひ関越行はあはつのゝ杜の木末に月そいさよふ　　知教

二五一八　同　あはつのゝ沢辺の沼に蛙鳴春のみとりそふかく成らん　　元輔

二五二八　同　栗津野に小萩か花に色さへて時しりかほにましるきくさ　　永範

梓杣　山　　近江　類名

二五三八　袁宮集　数ならてあつさの杣に立ぬしとも すきのもとまはかこ忘れん　　俊頼

二五四八　散木　杜鵑あつさのそまの杣人に声うちさへて宮木引らし　　好忠

二五五八　名奇　梓山みのゝ中道絶しより我身に秋のくると知にき　　肥後

二五六八 夫木 天つ風吹すさ有らし夏の日の梓の山に雲ものとけし　能宣
二五七八 同 代さをへて梓の山に八月の影まとかなる秋の空かな　同
二五八八 同 道とをみあつさの袖に尋来て夕暮に聞時鳥かな　信実 34オ
二五九八 同 私たくみ引やまさきのつなしにさこそ梓の山とまむらめ　堪能 法師 35オ

阿知幾余川　近江　春雨抄三百四十五番歌未勘

二六〇八 夫木 世中はあちきな河のにしに生るしほし斗を何思ふらん　慈鎮

浅間森　同　同

二六一八 夫木 いかこせんかゝる浮世にあふち咲あさまの杜の浅しのみや　慈鎮
二六二八 同 樗咲花にかくれて時鳥名さへあさまの杜になくせ　慈鎮

青木里　同　藻塩

二六三八 名寄 木枯の風は吹とも散すして青木の里やときは成覧　慈鎮

阿波野　同　夫木三百四十五

二六四八 方七 かこみなる我見し君をあはの野の花橘の玉にひろひつ　慈鎮
二六五八 夫木 子規今来なけとやかこみなるあはのゝ原に匂ふ立花　慈鎮

朝日山　野辺里　同　朝日里　藻塩三百四十五

二六六八 千載 露ふかき朝日の野へにをかや刈殺か伏もかくはぬれしを　慈鎮
二六七八 名寄 早苗とる袖は猶こそしほる覧朝日の山の麓なれしも　慈鎮
二六八八 夫木 春のくることせうれしきあかねさす朝日か野へに雉子鳴也　慈鎮
二六九八 同 君か代は朝日の山の玉椿ちりもくもして八千世をへめ　慈鎮
二七〇八 同 朝日山麓をかけてゆふたすき明暮神を祈るへきかな　慈鎮
二七一八 同 いつしかと朝日の里を立出ていくまもはこふ御調物哉　慈鎮

青墓里　美濃　藻塩

東の方よりのぼりけるにあふほかといふ所に泊りて侍けるにあるしの心あるさまにみえけれは
あかつき立とて

二七二八 柳葉 しるらめや都を旅になし果て猶あつまちにとまる心を　法師
二七三八 名寄 尋はやいつれの苔の下ならん名は大かたのあをはかの里　長明
二七四八 拾玉 一夜みし人のなさけは立帰り心にやとる青はかの里　慈鎮

赤坂　美濃

二七五八 教集 古も泪をもにちらしてきあか坂にしもなをなむしけん　後鳥羽
二七六八 夫木 匂ふなる花はさなかし赤坂の名をあらはして咲つし哉　為相
二七七八 同 赤坂をすみのぼる夜の月影に光をそふる玉篠の露　為忠
二七八八 同 秋きてそみるへかりける赤坂の紅葉の色も月の光も　盛長

青野原　同

二七九八 千首 伊吹山さしも待つる時鳥青野か原をやすく過ぬる　為尹

浅間　山高里　信濃

二八〇八 六帖 驚の谷を立出て音信はあさまの里に声はふりせす　重之
二八一八 教集 信濃なる浅間の山のあやしきは雪こそ消れ火やけもえなん　西行
二八二八 山家 いつとなく思ひにもゆる我身かな浅間の烟しめるもなく　慈鎮
二八三八 拾玉 ふしのねもあさまの山もをのつから絶くに社煙たちけれ　僧極
二八四八 月清 消かたき下の思ひはなき物をふしも浅間も烟たてとも　同
二八五八 同 春霞東よりこそ立にけれ浅間の山は雪なからに　定家
二八六八 愚車 胸のうちよしれかし今もくらへみは浅間の山はたえぬ煙を　家隆
二八七八 玉吟 よしさらは雲たにかくせ徒に我身あさまの心なし烟は　同
二八八八 同 しらすへき烟も雲に埋れてあさまの嵩の夕暮の空　月花門院
二八九八 夫木 いくしをり越て尋んなにたかき浅間の山の嶺の白雲

二九〇八　名寄　雲晴ぬ浅間の嵩の秋の暮煙を分て紅葉しにけり　俊頼

浅葉野　原　信濃　類多　一説武蔵

二九一八　万十一　紅のあさはの野らに苅かやのつかのあひだも我忘れなし
二九二八　同十二　浅葉野に立みは小菅根かくれて誰故にかわが恋すらん　知家
二九三八　名寄　霜枯る人の心のあさは野に立みはこすけねさへくらめや　人丸
二九四八　家集　君をこそあさはの原にをはつむしつのいしみのふかく思へは　同
二九五八　玉吟　紅のあさはの野らの露の上に我しく袖も人なとかめそ　家隆
二九六八　夫木　春は猶あさはの野へのいつのまに雪も消せすもゆる早蕨　俊頼
二九七八　同　紅のあさはのほらの草も木もまた染果ぬ初しくれかな　光長
二九八八　同　冬はまた浅葉の野らに置霜の雪もりふかき東雲の空　家長
二九九八　同　浅は野にたつみは小菅敷たえて枕にしても一夜明しつ　定家
三〇〇八　同　あさはのゝ露の白菅打たゝてかくれて長きねにそなるぬる　為家

有明山　峯　同　類多

三〇一八　拾玉　夏の月は有明の山は淡路嶋住吉の松に風も涼しき　同
三〇二八　同　月影にあかて有明の山の端や秋なく鹿の立と成らん　家隆
三〇三八　同　おほろなる月は入ぬる嶺に又花に光のありあけの山　俊頼
三〇四八　名寄　花の色は三月の末に移ろひぬ月そつれなき在明の山　家隆
三〇五八　御集　過ぬるか有明の嶺の部公物思ふ時もいとひやはせん　範光
三〇六八　玉吟　今はとやねらかへりなくる規をのか五月も在明の山　家長
三〇七八　愚草　照かはる紅葉を峯の光にてまつ月をそ有明の山　為家
三〇八八　夫木　しのゝめの月より嶺はあらはれて有明の山と秋風そ吹　定家
三〇九八　同　散くもる峯の木葉の風の上に月はしくれぬ有明の山　為実
三一〇八　同　我ならて又物思ふ袖なれや木葉しくる有明の山　為相
光俊

会地関　信濃　藻塩

三一一八　名寄　しなのちや道ふ心は有なからこもそあふちの関はうひしき　知家
三一二八　春雨抄　信濃なるあひそめ川のほたに社すゝせ結ひの神はましませ　同

相初河　同　安太師野　山　同　藻塩

三一三八　源順集　あたしのゝ草村にのみましりつる匂ひは今や人に知れん　もりのふ
三一四八　懐中　夜と共に頼れぬかな信濃なる名に立けるあたしのゝ山　無名

安蘇山　村　上野　勅撰名所集二当国　安積郡

三一五八　万十四　かみつけのあそのまそ村かきむたきぬれとあぬをあしあかせん　無名
三一六八　同　かみつけのあそ山つゝらのをひろみはひにし物をあかたへせん　同
三一七八　名寄　吹ねろすあそ山嵐今朝寒て冬野を広み雪を積れる
三一八八　夫木　安蘇山の中より出る白川のいかてしらせん深き心を　慈鎮
三一九八　同　我恋はあそ山本の青つゝら夏野をひろみ今こかりせ　為家

阿加木社　同　大不二当国

三二〇八　夫木　かみつけのすたのあかきのから社やまとにいかて跡を垂けん　鎌倉右大臣

安素河原　下野　類多　安積郡

三二一八　万十四　しもつけのあその河原に石ふまるすゝらゐとりぬまなかの心の　無名
三二二八　桁千　石ふまぬあその河原に行春てみかほの崎にけふ泊らん　蓮生法師

朝香山　沼原　陸奥　類多　朝香郡

三二三八　万十六　あさか山影さへみゆる山の井の浅き心を我思はなくに　采女

三二四八 巻巻 あさか山浅くも人を思はぬになと山の井のかけはなる覧　信実
三二五八 六帖 朝香山霞の谷にかけかくし我物思ひはるさもなし　能因
三二六八 小大君 象集 くるしきに何求むらんあやめ草朝かの沼にねふと社きけ　法師
三二七八 象集 陸奥のあさかの原のしらまゆ心つよくもみ用る君かな　兼盛
三二八八 同 音に聞あさかの沼の朝ほらけたんぬ煙は名のみ成けり　元真
三二九八 同 月やとる朝香の沼の水清みまるも秋のなひくをそみる　忠見
三三〇八 堀百 五月雨の隙なき比は水まさりあさかの沼の名にやたかはん　紀伊
三三一八 堀後 いかにせん朝香の沼の浅ましやつみる人にあはぬさろよ　大進
三三二八 建保 心あさかの沼のうす氷かつ見るかに消やわたらん　慶徳院
三三三八 同 浅からぬ朝香の沼の花かつみかつ見る色に出けるかな　走衡
三三四八 同 契こそ浅香の沼の花かつみかつみる色に露そこほる　儀盛女
三三五八 同 つしきをも憂をもしらぬ心かなあさかの沼のつみなからに　忠走
三三六八 同 心さしさこそあさかの沼に生るかつ見る程はわすれ知るゝ　知教
三三七八 同 人心あさかの沼のかつみてもあはぬやふかき契なるらむ　範宗
三三八八 同 いかにせん朝かの沼のかつみてもぬるこは袖のならひ成けり　行教
三三九八 拾玉 尋こし朝香の沼の杜若色はかりこそふかくみえけれ　慈鎮
三四〇八 同 あさか山その山の井に忘水あさくも袖をぬらす比かな　同
三四一八 同 あやめとる賤の菅笠ならふめり朝香の沼の雨の夕くれ　同
三四二八 名寄 あやめ苅朝香の沼に風吹なをちの旅人袖かほるなり　後鶏
三四三八 同 春駒はあさかの沼にあさりしてかつみの下葉ふみしたくせ　同
三四四八 愚草 いかにせん朝かの沼にねふとゝく草葉に付てはつる涙を　走教
三四五八 同 ふみしたくあさかの沼の夏草にかつみたれそふ忍ふもちすり　同
三四六八 玉吟 ねをふかく我こそ思へ人こゝろあさかの沼の春の若草　家隆
三四七八 御集 さゝ分しあさかの沼の花かつみかつみる夢のあくる程なき　後鳥羽 39オ

阿せ瀬　陸奥　大不二当国

三四八八 夫木 あやの瀬に紅葉の錦立かさねふたへになれるたつた姫哉　信実

此歌はとこはといふ所を舟に乗て下るほとある物

このわたりをあやのせとそ云侍歌よみて神に奉

るところなりといへはまめると云

吾田多良　同

三四九八 万七 陸奥のあたらの真弓絃すけて引はかへ人の我を事なさん　無名
三五〇八 同十四 あたらのねに伏鹿の有つもあへはいたらむねとなりそね　同
三五一八 同 みちのくのあたらの真弓はしき置てさらしめさはつらはめかも　同

阿武隈　川　同　藻塩三巻郡

三五二八 象集 あふくまにまりたてといひしから衣袖の渡りに夜も明けり　重之 39ウ
三五三八 同 かくしつゝせをやつくさん陸奥のあふくま川をいかて渡らん　中務
三五四八 堀百 名にしねはゝあふ隈川を渡ん恋しき人の影やうつると　顕仲
三五五八 同 ぬれ衣といふにつけてや流けんあふ隈川の名こそ惜けれ　永縁
三五六八 六百 君か住あふくま河は名のみしてそなたのみ恋や渡らん　兼宗
三五七八 愚草 わか君にあふくま川のさま千鳥かきとめたる跡そうれしき　走教
三五八八 同 たちくもるあふくま河の霧のまに秋をはやしの関もすへなん　同
三五九八 玉吟 みなはなすもろ〻命も早き瀬にあふ隈川のいつ頼まん　家隆
三六〇八 同 長月やいくく在明にめくりて阿武隈河にやとる月影　同
三六一八 千五百 名にしおはゝ尋も行人陸奥のあふくま川は程遠くとも　小侍従
三六二八 夫木 忘れしよ又あふ隈の川風にしはしなれぬと千鳥鳴也　経卿
三六三八 同 あふくまをいつれと人にとひれはなそこの関のあなた成けり　読人不知 40オ
三六四八 夫木 風はやきあふくま川の小夜千鳥泪なそ袖のこほりに　後鳥羽
三六五八 同 明ぬるか遠方人もあふくまの七瀬の霧に袖の見え行　矢衛内侍

三六六八　同　ふかき秋にあふくま川はしくれと色こそ見えぬせゝの埋木　康光
三六七八　同　あすは又あふくま河のしかみに昨日の秋の色や残らむ　順徳院
三六八八　同　冬の夜を長くや契る友千鳥あふくま川の絶ぬ汀に　有表

姉葉松　橋　陸奥　藻塩　阿礼葉松トモ云歟

三六九八　伊勢物語　くりはらのあれはの松の人ならは都のつとにいさといはましを　秀頼
三七〇八　千五百　栗原のあねはの松をさそひても都はいつとしらぬ旅かな　能因法師
三七一八　類聚　朽ぬらんあねはの橋も朝なく浪風吹て寒き渡りに　祐尊
三七二八　藻塩　あへなくてあねはの松も朽ぬ覧塩風ふきてあしき浜へに　鴨長明
三七三八　夫木　かくはかり年つもりぬる我よりもあねはの松は老ぬらんかし　40ウ
三七四八　同　古郷の人にかたらん栗原やあねはの松のうくひすの声

安達　野原　同

三七五八　愚草　そなたより霞や下に忍くらん安達の真弓春はとなりと　走象
三七六八　玉吟　武士の安達の原のしらまゆ引てふやすくくるゝ空かな　象隆
三七七八　同　狩人のあたちの真弓末たはによるやゝ小鹿の秋の紅葉ゝ　同
三七八八　建保　時雨行あたちの原の白真弓しらす木葉は散果ぬらん　走衡
三七九八　同　春を待あたちの真弓もと末も降つむ雪に引人そなき　俊成女
三八〇八　同　雪ふれは安達のまゆみ末たはみ引手もやすく暮る空哉　兵衛内侍
三八一八　同　降雪にあたちの原もしらまゆ春の梢の面影そたつ　知象
三八二八　同　白妙のすそのゝ原のかり衣あたちの原の雪の明ほの　範宗
三八三八　同　我為はこれや安達の黒塚に伊ふくさ分て人はいりにき　行象
三八四八　建保　嵐吹この下露や結ふらしあたちの原は霜かれにけり　41オ
三八五八　同　百　安達野も雪降にけり狩人のひかぬまゆみの末たはむまで　康光
三八六八　新六　あたちの原の黒塚おにこめて心にくくも世を過すかな　忠走
三八七八　名音　あたちのゝ野沢のま菅萌にけりいはゆる駒のけしとも　為象
三八八八　新六　陸奥の安達の真弓そり高みをし返しても惜き春哉　後鳥羽大寺
三八九八　御集　人とはぬあたちの檀たかひなは末さへまるの錦なるらん　衣笠
三九〇八　新葉　みちのくの安達の真弓取初しその世につかぬ名を歎つゝ　後鳥羽
三九一八　大木　安達野の秋風そよく村薄うち物とやや鹿の鳴覧　行家
三九二八　同　紅葉ゝや安達の原の白真弓のゝ梢にあらし吹なり　具親
三九三八　同　染はてぬ木葉時雨も陸奥のなとり安達のはらふ山風　親王
三九四八　同　冬枯のあたちの原に鳴雉子頼む草葉もかれなのをや　八条院

会津山　根河　関里　陸奥　類名　会津郡

三九五八　万十四　あひつねのくにを里遠みあはなは忍ひにせんと翅結はさね　無名
三九六八　帖　心にもあして渡りし会津川うき名を水にうつしつる哉　貫之
三九七八　堀百　会津山すそのゝ野へにともしすとほくしに火をそかけあかしつる　昭俊
三九八八　象集　くるさとに会津の関も我といへはたくなしてもぬらす袖哉　俊頼
三九九八　千五百　火事影鹿にあひつの山なれはいるにかひあるさつを成けり　顕昭
四〇〇八　夫木　はかなしや尋きたれと陸奥の会津の里も名のみ世けり　宗円

会瀬河　同　類名

四〇一八　新続　程もなく流そとまる逢瀬川かはる心や井せきなるらん　盛方
四〇二八　藻塩　関とめぬ人目つゝみにことよせて流もやらぬあふ川かな　重走
四〇三八　夫木　会瀬川袖つくはかり浅けれと君ゆるさねはえゝそ渡らね　42オ

秋田山　陸奥　藻塩

四〇四八　象集　陸奥の秋田の山は秋霧の立野の駒も近付ぬらし　好忠

荒野牧　同　藻塩

四〇五八　詠藻　みちのくのあら野の牧の駒たにもとれはとられて則行物を

阿保登関　出羽　藻塩

四〇六八　六帖　いてはなるあをとの関のすみた川流とも見ん水やにごると

阿古耶松　同　藻塩

四〇七八　堀百　ねはつかないさいにしへのことはんあこやの松と物かたりして

四〇八八　夫木　陸奥のあこやの松に木隠て出たる月のいてやらぬのな

四〇八九　同　みちのくはひろき国さと聞物をあこやの松にはる月影

青羽山　若狭　仙覚抄二当国

四一〇八　万八　秋の露はうつしなりけり水鳥の青はの山の色付みれは

四一一八　差柔春　身にちかく秋やきぬらん見るまに青はの山も移ろひにけり

四一二八　堀百　水鳥の青羽の山も神無月しくれにあへす色かはる覧

四一三八　同　後　雪消ぬ青羽の山の青つら春はれとも猶寒き哉

四一四八　同　真鳥色の青羽の山も秋くれは露のしつくに下紅葉せり

四一五八　詠藻　秋ふかみ青羽の山も紅葉せり名をは時雨も染しと思ふに

四一六八　玉吟　をしなへて夏は青葉の山桜花にや色もまかはさりけり

四一七八　千五百　散のこる青はの山のさくら花風より後を尋さりせは

四一八八　夫木　ちりにける花のふるすは木隠て青葉の山にまよふ鶯

四一九八　同　秋やくる色はつれなきときは木の青はの山に風かはるなり

四二〇八　夫木　水鳥の青羽の山の夏木立うきねにかへる花をこそ思へ

四二一八　同　露時雨上毛にはらふ水鳥の青はの山も色に出つゝ

安土山　若狭　大木二当国

四二二八　夫木　春の夜の月ろはりになる時はあつちの山にいろはみゆ覧

俊成　忠孝　顕仲　詠人不知 42ウ　三康王　仲実　忠房　仲実　俊成　教隆　通具　後一条　知教 43オ　良教　光明寺　詠人不知

安治麻野　越前　仙覚抄二当国

四二三八　万千五　あらま野に宿れる君か帰こん時のむかへをいつとか待む　娘子

四二四八　玉吟　あちまのにあちこえ咲る夕月夜露の宿りは秋ならす共　教隆

有乳山　同　同

四二五八　万十　矢田の野の浅茅色つくあら山嶺の淡雪寒く降らし　無名

四二六八　堀百　雲かゝるあらちの山を雁金の道にまとはてかてきつらん　河内 43ウ

四二七八　同　初み雪降にけらしなあらち山こしの旅人そりに乗まて　兼昌

四二八八　名寄　都出し衣手かれて有乳山色かほり行秋風そふく　知教

四二九八　千五百　程もなく風のけしきもあらち山嶺より分て積る白雪　宮内

四三〇八　同　夕間暮風の気色も有乳山雪に宿かる越の旅人　三宮

四三一八　建保　冬の夜の峯の嵐や有乳山月よりかゝる野への浅ちふ　慎徳院

四三二八　同　吹しほる嶺の嵐もあらち山越路くやしき雪の夕暮　俊成女

四三三八　同　夕くれは風の気色のあらち山ふもとの野へにあは雪と降　兵衛内侍

四三四八　同　兼てより思ひこしちの有ち山ことはり過る嶺の白雪　知教

四三五八　同　嵐吹あらちの山の夕しくれやゝて雪けの雲やたつらん　範宗

四三六八　同　さゝくらす風も有乳の山高み雲より上にみゆる白雪　行意

四三七八　同　冬こもる夜のまの風のあらち山いかに木葉のまなく散らん　慶光

四三八八　拾玉　宿もなししさわひしらに越きつる有乳の山の雪の夕くれ　慈鎮 44オ

四三九八　玉吟　有乳山ちりかひくもり花とみる雪に老らく道やまよはん　教隆

四四〇八　同　あらち山谷の鷹野へに出てなけともいまた春の淡雪　同

四四一八　夫木　有乳山嶺のあは雪いかならん麓の浅茅うら枯にけり　行意

四四二八　同　いか斗降つみぬらんあらち山岩のかけちにくつれおつる雪　清輔

四四三八　同　あらち山時雨降らし矢田野なる石枝の櫨は紅葉しにけり　実伊

朝水橋　越前　和名二当国丹生郡朝水　阿佐布豆

四四四八　懐中　あさうつの橋は思ひて渡れともとろくとなるそ侘しき　誰そこのね覚て聞はあさうつのくろとの橋をふみとろかす

四四五八　同

四四六八　藻塩　ことつてん人の心もあやうきにふみたにもみぬ朝水のはし

四四七八　夫木　朝水の橋のところと降し雨のふりにし雨を誰そこの

四四八八　同　見し人も袖やぬるらん五月雨に名さへ忘る朝水のはし

四四九八　金葉百　日をへつゝ積れる雪にかくろへぬ名のみ成けり朝水の橋

有磯渡　越中　類聚

四五〇八　万十七　かゝらんと兼てしりせは越の海のありそ の波もみせまし物を　大伴家持

四五一八　同　白浪のありそによるしふ谷のさゝ秋ほりまつたえの　同

四五二八　同十八　をろかにそ我は思ひしをふの浦の有磯のめりみれとあかぬかも　田辺福麻呂史

四五三八　家集　ありそ海の浜にはあらぬ底にても数しらす柱建しかりけれ　伊勢

四五四八　拾玉　ありそ海の浦吹風にあらねとも其やむ時もなく物をこそ思へ　慈鎮

四五五八　同　世中に今いくとせか有磯海の根なかに渡をかさへへん　同

四五六八　夫木　吹風のありその渡り渡越て葛の若葉にむすふ白露　後九条

四五七八　新六　風をいたみありそに通ふ浜鳥渡たかゝらし跡もとゝめす　知家

四五八八　御集　いかにせん思ひ有磯の忘貝かひもなきうに渡ふ袖　後鳥羽

四五九八　新葉　ありそ海の浦吹風もよはれかしいひしまこなる浪の音かは　京極良経

四六〇八　新葉　今はまも思ひも出しきて世に有その浦のうらみ侘ともに　関白左大臣 45オ

安乎能浦　越中　仏覚抄并八雲御抄ニ当国

四六一八　万十八　あをの浦によする白波いやましに立しきよせくあゆをいたみかも　大伴家持

有明浦　越後　夫木ニ当国

四六二八　夫木　浪の色に有明の浦の末みえて塩せもしろく残る月影　為実

穴雄　丹波

あなをの観音をみたてまつりて

四六三八　千載　見るまゝに涙そ落る限なき命にかはるすみかと思へは　覚忠

阿遅可麻潟　丹後

四六四八　万十四　あちかまの潟にさくなみひら瀬にも紐とく物悲しけをおきて　無名

四六五八　同　あちかまのかけの湊にいる塩のこてたくもかりてねまくも　同 44ウ

遊浦　同　藻塩并歌枕ニ当国

四六六八　懐中　打よするみるかひありてよさの海のあくひの浦に比もぬへし

海士橋立　同　類聚

四六七八　家集　みつ塩ものほりかねてやのほらん波さへ高きあまの橋立　源順

四六八八　同　音に聞あまの橋立はし立てをよはぬ恋も我はする哉　伊勢

四六九八　同　誰為に渡し初けんよさの海の浦に世をふる天の橋立　能宣

四七〇八　堀百　舟とめてみれともあかす松風に渡よせ帰る天のはし立　紀伊

四七一八　千五百　風渡る松の下ねの小夜枕夢路とかるあまの橋立　雅経 46オ

四七二八　拾玉　はや晴よ松の奥こそ床しけれ霜立渡るあまの橋立　慈鎮

四七三八　建保ほのゝとよさのふけねのあま霧にあらはれ渡る天の橋立　行意

四七四八　同　草の原いく野の末にしくるらん秋風を吹あまの橋立　順徳院

四七五八　名寄　よさの海の内との浜にうらさひてよるうみ渡る天の橋立　定家

四七六八　愚草　むは玉の夜渡る月のすむ里ほけに久かたのあまの橋立　家隆

四七七八　玉吟　みつ塩に朽せぬ松やはし柱あまの橋立千代もかさらし　同

四七八八　同　春の雁声をほにあけて行舟もあまのと渡る天の橋立　有家

四七九八　夫木　雁帰る渡ちはるかに打霞あけこそ渡れ天のはし立

四八〇八 同　時鳥我かまつをはいとへとも鳴わたるなり天の橋立
四八一八 同　たちまよふ波と霞の絶間より雲みにみゆる天の橋立
四八二八 同　雁かへるよさの浪路の雲ゐまて春に霞める天の橋立
四八三八 同　花なみの里としきけは物うきに君引わたせ天の橋立
四八四八 同　あさりするほけ斗をしるへにて心のまよふあまの橋立
四八五八 同　詠れは入日の影のうつろひて松の葉うすき天の橋立
四八六八 御集　久方の天の橋立霞つ雲みを渡る雁そ鳴なる

足占山　丹後　類題

四八七八 続古　行末のすきかまほしきは何方にふみ是むらん足の占山

穴憂里　同　藻塩

四八八八 名寄　音に聞あなうの里や是ならん人の心の名に社有けれ

朝来山　但馬　和名抄ニ当国　朝来郡

四八九八 懐中　秋の色はあさこの山のかち錦露いかなれは分て染けん

朝香潟　播磨　或陸奥八雲御抄ニ当国

四九〇八 百十一　行てみて来てこそ恋しあさか潟山越にきていねてぬるも
四九一八 同　朝香潟塩干のゆたに思へしはうけしか花の色に出めやも
四九二八 寛治　夕浪のたゆたひくれはあさか潟塩ひのゆたに千鳥鳴也
四九三八 夫木　山こしに烟そみゆるあさかかたしき恋する蜑のしわさか
四九四八 千首　月残る塩干の跡の朝香潟みせはや人にあさるなかめを
四九五八 良玉　あさか潟林恋しきの立なへにかたしく袖の露しほれぬる
四九六八 新六　朝香潟うけしか花のいとこ又色こそみえねけふも暮つゝ

明石　難田　潟　浦　浜　沖　播磨

四九七八 万三　燈のあかしの灘に入日にや漕別れなん袁のあたりみゆ

長奥　如願　法師　俊成女　和泉式部　滝へ　不知　経家　後鳥羽　定頼　頼円　無名　同　知家　後一条　為尹　顕仲　知家　人丸　門部王　無名　同　元真　中務　顕仲　師頼　肥後　行意　俊成女　兵衛内侍　知家　範宗　康光　西行　同　慈鎮　同　同

47オ　46ウ　47ウ　48オ

四九八八 同　見渡せは明石の浦にたける火のほにそ出ぬる妹にこふらく
四九九八 同　七　我舟はあかしの浜に漕とめん沖かるなさ夜更にけり
五〇〇八 同十五　あまをかるひなの長路を恋くれは明石のとより袁のたりみゆ
五〇一八 明石巻　歎つゝあかしの浦に朝霧のたつやと人を思ひやる哉
五〇二八 若菜巻　世を捨て明石の浦に住人も心のやみはらけしもせし
五〇三八 同　あま船にかゝは思ひをくれけん明石の浦にいさりせし君
五〇四八 六百草　枕ひとりあかしの浦風にいと涙そおちまさりける
五〇五八 袁集　ほの〻と明石の浜を漕くれはまのふ恋しき波を立けるる
五〇六八 同　朝日さす明石の浜を立みせし浪も長閑になる世なりけり
五〇七八 同　身のうきに思ひ明石の浦風にあまのけさはいつのあるへき
五〇八八 同　かひなくてあかしの浦の秋風に恋しき波を立渡りける
五〇九八 堀百　浦風に浪やおるらん夜もすから思ひあかしの朝かほの花
五一〇八 同　夜を寒み明石の浦の浜風にと渡る千鳥声さはくせ
五一一八 同　月影のあかしの浦をみ渡せは心はすまの関にとまりぬ
五一二八 建保　夕霧に明石のとなみ漕舟のほの〻きゆる跡の塩風
五一三八 建保　秋もへぬ月にねぬ夜のさひしさを思ひあかしの波風の音
五一四八 同　あかし潟霧もまよはぬ波の上に鳴かくれせぬ秋の夜の月
五一五八 同　秋の夜をこそともなく明石潟浦わの月のあかぬ空かな
五一六八 同　明石潟月に見え行浦の名を秋とふ人や空にしるらん
五一七八 同　長き夜を誰ふし侘て明石潟浦の苫屋の月をみる覧
五一八八 山家集　なへてなき所の名をやおしむらんあかしは分て月のさやけき
五一九八 同　月を見て明石の浦を出る船は波のよるとや思はるらん
五二〇八 拾玉　明けはて沖の釣舟霞むなりあかしの浦の春の明ほの
五二一八 同　ほの〻とこれや明石の嶋かくれ我ゆく舟と誰なかむらん
五二二八 同　月影のあかしの浦の春の夜は霞もしはし晴やしぬ覧

五二三八　同　海のはてには有けるものを秋の夜の月を明石の浦に詠て
五二四八　詠藻　詠れは雲は浪路に消つゝてあかしの沖にすめる月かな
五二五八　散木　しなはやと思ひあかしの浦をみて生田の森をまそにみる哉
五二六八　新六　すま明石浦のみ渡し近けれはあゆみくるしき高すなこ哉
五二七八　名寄　夏の夜を明石のせとの波の上に月吹かへす磯の松かせ
五二八八　同　旅枕幾度夢のさめぬらん思ひあかしのむまやくに
五二九八　月清　霧ふかき明石の沖に漕行を嶋かくれぬと誰詠むらん
五三〇八　同　明石より浦つたひ行反なれやすまにもおなし月をみる哉
五三一八　愚草　波風の月よせかへる秋の夜を独あかしのうらみてそぬる
五三二八　玉吟　あかし潟海士の焼火のほに出て冬もちかしと浦風そ吹
五三三八　同　明石潟嶋かくれつゝ行舟の霧より上に月そ残れる
五三四八　夫木　あかしかた帰る浪路や霞むらん嶋かくれ行春の雁金

青山　播磨　〈雲御抄并藻塩三当国

五三五八　万四　青山をよこきる雲のいちしろく我と為みして人にしらるな
五三六八　同十二　物思はて道行なんもあを山をふりさけみれはつゝし花
五三七八　帖　かきこしに犬よひこして鳥狩するあを山のはしけき
やまへに馬やすめ君
五三八八　名寄　青山の峯の白雲朝ゝにつねにみれともめつらしき君
五三九八　家集　君ゝふといもねられぬに杜鵑青山へより鳴渡るなり
五四〇八　同　青山のあせみの花のにくからぬ君にはしめやまれは恋し
五四一八　夫木　ゆきかてに吹春風は早けれと青山なれは寒からなくに
五四二八　同　いつとなく色もはら岐青山は蟬の声にそ夏を知らん
五四三八　同　道遠みいそかさりせは青山の木陰はいかに立りかしまし
五四四八　名寄　青山の所たになき紅葉こそ折かけてけりしてかとそ見る

同　俊成　48ウ
俊頼　光俊
鷲羽　定家
後京極　同
定家　家隆
同　伊平
同　俊頼
同　定家
同　慈鎮
同　道念　法師

阿須香潟　同

此歌万葉二明潟アタンカタト和セリ又名所歌枕并勅撰名所集ニアヌカ潟トアリ依テ如此入

五四五八　万六　あすか潟塩干の道をあすよりはした堪しけん家近つけは　赤人
五四六八　類聚　あすか潟跡ふみつくるから人の塩干の道に千鳥鳴なり　頼氏

秋坂山　備中　類字

五四七八　玉葉　初時雨降にけらしなあすよりは秋坂山の紅葉かさん　頼資

阿利木山　同　藻塩

五四八八　夫木　万代にありきの山の白つはき君かさかゆ行卯杖にやきる　盛永
五四九八　同　阿利木山今ありきとも君ゝそはかへへもしらぬ松の千とせを　同

朝河　備後　夫木二当国

五五〇八　夫木　稀にきてあかす別しあした川涙ゝ袖にみなとなかるゝ　読人不知

安武郡　長門　和名ニ安武郡

五五一八　新六　長門なるあふの郡の私板はもろこしへすすめすりける　光俊

赤間　関　同　藻塩

五五二八　家集　君ゝふとをさふる袖はあかまにて海にしられぬ浪そ立ける　俊頼
五五三八　拾玉　涙ゆへ袖も赤間の関なれと比は紅葉にもちくせ英　慈鎮

安武松原　同　類字　安武郡一説播磨

五五四八　拾玉　さゝくに心つくしに行船やかへるすかたあふの松原　慈鎮
五五五八　塩百　はりま潟恨てのみそ過しかと今夜とまりはあふの松原　顕季
五五六八　愚草　漕舟の風にまかせるまほにたにそこしへぬあふの松はら　定家
五五七八　千五百　末遠く千世の御かけを願むかな契あれはそあふの松原　忠良
五五八八　同　播磨潟恨ても猶頼めとや末にありてふあふの松原　季能

49オ　50オ　49ウ　50ウ

五五九八 現六 むかしより心つくしに年はへぬ今はをしへまあふの松はら　静賢

阿胡海　同　八雲御抄并仙覚抄二当国

五六〇八 万十三 あさの海の荒磯のうへに浜なつむ蜑乙女らかまつひたる　無名

五六一八 同 あさの海の荒磯の上のさゝら波我恋ゆくはやむ時もなし　同

五六二八 同十五 あさの海に船乗すらん乙女らかあかものすそに塩満覧か　同

五六三八 夫木 あさの浦の釣のうけ舟近つけは反さをふなりあさのよひこゑ

阿須波原　同　類聚二当国

五六四八 類聚 こふれ矣あすはの原に咲萩の花と散なん名こそおしけれ

阿胡根浦　紀伊　仙覚抄二当国

五六五八 万一 我ほりし野嶋はみせつ底深きあこねの浦の玉を拾はぬ　中皇命

五六六八 万代 よしさらは思ひもたえね敷嶋やあこねの浦のたまくしもなし　季能

年魚市方　紀伊　仙覚抄二当国

五六七八 万三 桜田へたつ鳴渡るあゆちかた塩ひにけらし田鶴啼渡る　高市連黒人

五六八八 同七 あゆち方塩干にけらし知田の浦に朝漕舟も沖によるみゆ　無名

五六九八 万代 あゆち方塩音すなりたづの江の朝けの霧にたほかくれて　覚性親王

五七〇八 夫木 夕波のたゆたふみへはあゆち方塩干のゆたに千鳥鳴なり　知表

五七一八 同 あゆちかた塩ひにけらし夕さらすあさふ衝も声長閑なり　光俊

五七二八 同 あゆち方朝漕舟のほのゝと知田の浦へに浪よするみゆ　中こ

五七三八 同 浪の上に夕立すれとあゆち方雲もかからぬ浦の遠山　政時

五七四八 同 あゆちかた塩満ぬらし桜田のほむけの風にたつ鳴わたる　権僧正公朝

秋津野　里浜浦　同　藻塩三日高郡

五七五八 万四 かくしのみ恋や渡らん秋津野にたな引雲の遍とはなしに　大伴千室

五七六八 同七 席ならぬ人国山の秋津野の杜若をし夢にみるとも　無名

五七七八 同 秋津野を人のかれはまゐてゝく君おもほえて歎はやます　同

五七八八 同 秋つ野に朝みる雲のうせゆけは昔も今もなき人おもほゆ　同

五七九八 同十三 とまりにし人を思ふに秋つ野にみな白雲のやむ時もなし　同

五八〇八 名寄 六月の比ともみえぬ草葉哉秋津の里の道の露けさ　定円

五八一八 同 藻刈舟秋津の浦に棹さして思ふまとち漕つゝ行　慈重法師

五八二八 夫木 あさつのさゝへのこかたに道みすへしふみなしかる人はたれ　光俊

五八三八 同 見渡せはきりめの山も霞つゝ秋津の里は春めきにけり　詠人不知

蟻戸渡　同　藻塩

五八四八 出教集 さゝ深みきりゝすくるを朝立てなひきわつらふ蟻の渡り　西行

飽浦　紀伊　藻塩并仙覚抄二当国

五八五八 万七 網引する海士とや見らんあきの浦の清き荒磯をみに来し我を　人丸

会野　同　名寄歌枕二当国

五八六八 蜜葉 別にし君にあふ野と思ひせはしけき露をも歎さらまし　行意

飽等浜　同　類聚

五八七八 万十一 きの国のあくらの浜の忘貝我はわすれす年はふれとも　人丸

五八八八 一宝抄 日をへつゝあくらの浜の忘貝わすれ果ぬと間そ悲しき　俊頼

有間村　同　藻塩三当国或摂津

五八九八 名寄百 きの国やありまの村にます神の銭手向る花はらしとそ思ふ　公能

五九〇八 夫木 神まつる花の時にや成ぬらん有間の村にかくるしらゆふ　光俊

五九一八　同　春風に稍さゝゆく紀の国やありまの村にかみ火つりせよ　読人不知

東屋嶺　同　藻塩

五九二八　山家集　神無月時雨晴れはあつま屋の嶺にそ月はむねとすみけり　西行

浅野原　淡路　類音

五九三八　万三　長歌　滝の上のあさのさゝすす明ぬとし立さほくらし
いさ子ともあへて漕出んにはもしつけし

五九四八　現六　霜枯の浅野の雉子ふみ立て滝の上行猟人やたれ

五九五八　名青　岩そゝく垂氷も解ぬ滝の上の浅野の若な今やつまし

五九六八　夫木　萌さめていくかもあらぬ初草の浅野の原に雉子鳴也

五九七八　同　滝の上の浅野の原のあさ緑うらに霞て春雨そふる

五九八八　新集　いかにせん忍ふとすれとねに立て浅野の雉子隠なき身を

五九九八　草庵　落滝つ玉とみるまて滝の上の浅野の露に秋風そ吹

六〇〇八　千首　我も又涙に帰るき如くの浅野の雉子音をや鳴覧

淡路嶋　潟沖浦　淡路

六〇一八　万七　荒磯こす波をかしこみあはち嶋見すてや過んこた近きを

六〇二八　同十二　住江の岸にむかへるあはち嶋あはれと君をいはぬ日はなし

六〇三八　同十五　吾妹を行てはや見ん淡路嶋雲ゐにみえぬ袁つくしも

六〇四八　同十七　淡路嶋と渡る舟の梶間にも我は忘れす教をしそ思ふ

六〇五八　明石亀　あはとみる淡路の嶋の袁さへ残るくまなくすめる夜の月

六〇六八　拾玉　眺めやる心さへこそ晴やらぬ霞ゆめたるあはちしま山

六〇七八　同　西に行あはちの嶋のしまおろしむかへの雲を吹はらふなよ

六〇八八　同　淡路嶋わしの高ねにあらねとも有明の月をみるそ嬉しき

六〇九八　同　あはち嶋在明の月のいり塩に漕はなるらん袖そ床しき

作者不詳　洞院左大臣　光明峯寺[53オ]　衣笠　隆祐　宗名　頓阿　為尹　無名　同　同　慈鎮[53ウ]　同　同

六一〇八　同　みせはやな淡路の嶋のけさの雪うなからうつす池のあたりを　同

六一一八　同　なゆめやる心の末をせく物は霞に残るあはちしま山　同

六一二八　名寄　淡路舟霧かくれ漕こまの音の声斗こそせと渡りけれ　寺覚

六一三八　同　あはち潟小船漕出る夕風に浪路を送る竿鹿の声　教長

六一四八　同　あさまだき淡路の浦を漕わけは絵嶋もみえす霧にけたれて　仲正

六一五八　同　はるくしとあはちの興にうく鳴もあまの小船に見まをへつる　親佐

六一六八　愚草　淡路嶋千鳥と渡る声毎にいふかひもなく物そかなしき　走教

六一七八　同　あはちかた往来の舟の友かほにかまひ馴たる浦千鳥かな　同

六一八八　千五百　見渡せはすまの浦よりくもりきて時雨と渡るあはち嶋山　三宮[54オ]

六一九八　夫木　あはち嶋やと渡る船のかち梶のかしらに浮世をしはれてそふる　為教

六二〇八　御集　なかむれは淡路の せとの夕霧にむら消わたるあまの釣舟　後鳥羽

淡路迫門　淡路

六二一八　山家集　あはち潟磯わの千鳥声しけしせとの塩風寒増る夜は　西行

六二二八　同　淡路潟せとの塩干の夕暮に須磨より通ふ千鳥鳴なり　同

六二三八　同　あはち嶋せとのなゝろはたにかく共此塩わたにたをし渡らはや　同

六二四八　堀百　大塩や淡路のせとの吹分にのほりくたりのかたはやくなり　匡房

六二五八　夫木　あはちかた塩のはやみのせと渡り心さらなる月をみるかな　光俊

粟嶋　阿波　仙覚抄ニ讃岐国ニアリトモ已ニ勅撰名所集類音ニ当国ニ入上八司為異分

六二六八　万三　むこの浦を漕たむ小船粟嶋をそやひにみつゝ朝なきに　赤人[54ウ]

六二七八　同四　たゝ向ふあはちを過てあは嶋をそやひにみつゝ朝なきに　丹比真人

六二八八　同七　粟嶋に漕渡らんと思へとも明石のとなみいまたさはけり　無名

六二九八　同十二　浪間より雲ゐにみ命るあはね嶋のあはね物思へ我によるこら　同

六三〇八　同十五　いつしかも見んと思ひしあは嶋をよそにや恋ん行ましをなみ　同

六三一八 同　あは嶋のあはしと思ふ妹にあれややすいもねすくあが恋渡る　同　知家

六三二八 現六 むこの浦や朝みつ塩の追風に粟嶋かけて渡る船人　光俊

六三三八 新六 播磨潟沖漕舟のほのかにも見え渡る山は粟の嶋かも

粟小嶋　同

六三四八 万九 百伝の八十の嶋わを漕ぐれとあはの小嶋はみれあかぬかも　人丸

六三五八 夫木 もつたふ八十の船路の夕霞くへたてつあはの嶋山　重之

六三六八 同　秋霧にむこの浪路をみ渡せはほのかになりぬ粟の嶋山　俊成

六三七八 同　なきすみの舟瀬を過て今みれはそむきに霞むあはの嶋山　光俊

阿波門　阿波　類聚

六三八八 明石　あはとみる淡路の嶋の哀さへ残りくまなくすめる夜の月　貫之

六三九八 新古 あはちにてあはと香に見し月を近き今夜は所からかも　躬恒

六四〇八 家集 あはと見る道たにあるを春霞かすめる方のはるかなる哉

阿波山　同　仙覚抄三当国

六四一八 万六 眉のごと雲みにみゆるあはの山かけて漕船泊しらすも　船王

阿野河

讃岐　類聚　阿野郡

六四二八 後拾 晴ぬあやの川へに鳴千鳥声にや友の行方をしる　孝善

網能浦　同　万葉ノ詞書ニ見タリ

六四三八 万一 あみの浦の海士乙女らか焼塩の思ひそやくるわが下こころ　孝善

六四四八 玉吟 浪風もしつかなるよの春にあひて網の浦人たゝぬ日もなき　畢王

六四五八 夫木 網の浦の朝ひく汐の浪間よりめにもかしす行千鳥哉　表隆

六四六八 千首 いさなとるあみの浦人涙さへ目にもたまらぬ夕春の空　後九条為尹

飽田津　伊予　仙覚抄ニ見タリ

六四七八 万三 百敷の大宮人のあきたつに船乗しけん年のしらなく　赤人

安楽寺　筑前

つくしにまかりて安楽寺にてよみ侍ける

六四八八 金葉 神垣にむかし我みし梅花ともに老木と成にける哉　経信

六四九八 新古 情なくなる人つらし我宿のあるし忘ぬ梅の立枝を

此歌はつくしへまかりけるものゝ安楽寺の梅を折て侍ける夜の夢に見えけるとなん

荒津浜　海崎　筑前　仙覚抄ニ当国

六五〇八 万十二 白妙の袖の別をかたみしてあら津の浜に宿りするかも　無名

六五一八 同　草枕旅行君を荒津までをくりくるともあきたらすこそ　同

六五二八 同　あら津の海我ぬさまつりはひてん早帰りませ面かはりせて　同

六五三八 同十五 神さふるあらつの崎によする波まなくや妹に恋渡りなん　稲立卿

六五四八 同十七 荒津の海塩干塩満時はあれといつれの時か我恋さらん　不作者

六五五八 夫木 興つ風あら津の浜の浪枕なは如物のねんかたもなし　衣笠

芦屋里　同　藻塩

六五六八 拾玉 唐国の空もひとつにみゆる迄あしやの沖にすめる月かけ　慈鎮

六五七八 同 行とまる心つくしの哀さは芦屋の里の松の夕くれ　同

六五八八 同 津の国のあしやを出し心そ此芦屋にもかはらしりけれ　同

六五九八 名寄 つくし船うらみをつみてもとるにほ芦やにねてもねをそする　俊頼

朝倉山　関　同　類聚

六六〇八 山家集 めつらしな朝くら山の雲みるしたひ出たる赤星の影　西行

六六一八 詠藻 雲間よりよそに聞こそ哀なれ朝倉山の鷹のこゑ　俊成

六六二八　玉吟　またまより秋そとなのるたそかれに朝倉山のまそのの松風　　長田王

六六三八　千五百部公木の丸殿の雲みまてあさくら山の思ひ出の声　　中務

六六四八　類聚なのりして夜ふかく過ぬ杜鵑我をゆるさぬ朝倉の関　　俊頼

六六五八　名青　とはねとも名葉て過ぬ子規朝倉山の雲みはるかに　　公継

六六六八　夫木　時鳥雲みはるかになのれはや朝倉山のまそくに鳴らん　　小侍従

六六七八　同　里わかすなのるなれとも時鳥朝くら山のたそかれの空　　範光

六六八八　夫木　朝倉やをめの湊に網引するたまのめさしいあひきあひにけり　　匡房

六六九八　御集　あさくらや木の丸殿にすむ月の光もなのる心ちこそすれ　　為家

六七〇八　同　名葉なり雲みはるかに子規朝倉山のたそかれの空　　読人不知

六七一八　夫木　ときしもに鳥そ鳴なる朝倉や木の丸とのをそうたふ曙　　後鳥羽

芦城　野河山　筑前　八雲御抄

同　御門

六七二八　万八　女郎花秋萩ましりあしきのはけふをはしめて万代にみん　　家隆

六七三八　同　玉くしけあしきの川をけふみれは万代までに忘られめやも　　作者不詳

六七四八　同十二　芦城山稍葉(こずえ)であすまりはなひきたるそ妹かあたりみん　　同

六七五八　夫木　うき事を思ひつくしのあしき山歎きこりつむ年やへぬらん　　同

六七六八　同　降雨のくもるさつきの玉置あしきの河は水まさるらん　　読人不知

六七七八　名青　玉置あしきの河の瀬を早み明行月の影そなかるゝ　　後九条為氏

荒船御社　同　類名

六七八八　拾遺　荒も葉もみな緑なるふる芹はあらふねのみやしろくみゆらん　　すけみ

有干潟　同　八雲御抄并藻塩二当国

六七九八　万十二　ありち潟ありなくさめてゆかめ共象なる妹やいふかしみせん　　無名

芦北　肥後　夫木二芦北　野坂浦　二所ニ依立ニ今又載之

六八〇八　万三　あし北の野坂の浦に船出して水嶋にゆけん波たつなゆめ　　長田王

六八一八　現六　あまはみな水嶋にゆけ芦北の野坂の浦は舟も残らす　　中務

六八二八　名青　夜半に吹浦風寒み芦北の野坂の里は衣うつなり　　俊頼

六八三八　象集　あし北の野坂の浦のうつせ貝いもせをなへて幾せへぬ覧　　俊頼

六八四八　夫木　芦北の野坂の浦にくもりて松の南ははるゝ白雪

阿蘇宮　肥後　類名

宇佐使にてくたり待ける時あそのやしろにまふてゝ雪の積れるを見てよめる

六八五八　夫木　今はとてしものはふりくいとまあれやあそのみ山に雪の積れる　　基長

阿素御池　同　名青歌枕二当国

六八六八　堀後　世に侘てなみたちまちにいつなれはあそのみ池にぬさ奉る　　俊頼

荒山　豊前　藻塩

六八七八　万三　皇は神にしませは槙のたつあら山中に海をなすかも　　人丸

六八八八　堀百　うはそくかをこなひすらん槙の立荒山中にまふしつ　　師時

安岐湊　同　夫木二当国

六八九八　夫木　梢にはみえすなり行紅葉のとまりやあきの湊成覧　　摂津

穂原　日向　類名

六九〇八　続古　西の海やあはきか原の塩ちまりあらはれ出し住吉の神　　兼直

浅茅山　対馬　類名

六九一八　万十五　百船のはつるつしまのあさら山時雨の雨にもみたひにけり　　無名

六九二八　新勅　浅茅山色かはり行秋風にかれなて鹿の妻を恋覧　　知家

六九三八 夫木 吹風のねさまる御代の浅茅山出る月日の影ものどけし　顕代

跡見岡　未勘　藻塩

六九四八 夫木 水茎のあとみの岡の梅花くれや木毎に積る白雪

六九五八 同 霜枯の跡見の岡の冬草もかくれはてゝつもるしら雪　公朝

知隆 59オ

暁山　未勘

六九六八 家集 夕つくよあかつき山の朝かけに我身は成ぬ恋のしけきに　源順

六九七八 月清 猶うきは雲らぬ名のみ残る夜の月はとまらぬ暁の山　俊京極

六九八八 夫木 ゆ〻しくの暁山の郭公誰にわかれて音をはなくらん　中務

安部嶋山　同　類字二未勘或夫木三入和ェ

六九九八 続古 あへ嶋の山の若かね片敷てゝぬる今夜の月のさやけさ　藏人不知

七〇〇八 風雅 玉勝間あへ嶋山の夕露に旅ねしかねつ長き此夜を　通具

七〇一八 名寄 都思ふ神もかたくほしあへあへ嶋山は露ふかくして

痛背河　同　紀女郎 59ウ

七〇二八 万 四世中の乙女にあしは我渡るあなせの河を渡かねめや

安志桃石井　同

七〇三八 万 七あしひなるさかへ君かほりし井のいしゐの水はのめとあかぬかも

安可見山　同　人丸

七〇四八 万十四あかみ山草根苅つゝけあはすかへあとそふ妹とやゝに悲しも

阿知方海　同　類字一説芸州トェ

七〇五八 詞花 春くれはあち方の海一方にうくてふいをの名こそ惜けれ　匡房

赤良間小嶋関　同

七〇六八 帖 あからまの小嶋の関のかためては妹か心はうたがひもなし

阿羅布池　同　類字

七〇七八 新拾 河上やあらふの池の浮ぬなはうき事あれやくる人もなし　好忠 60オ

七〇八八 名寄 白波のあらふの池のうきぬなはひくねにまて玉ぞこほるゝ　家隆

雨宮　未勘　類字

七〇九八 続古 音に聞衣笠風をまたみねは待つそふる雨の宮には

有田川　同

七一〇八 拾玉 世をいとふ心はかりはありた川君にくたけてすみそわつらふ　慈鎮

曙山　同

七一一八 愚草 いたつらに松の雪こそつもるらめわかふみ分し明ほのゝ山　定家

七一二八 藤川百色 もかもしらてはこえし梅花匂ふ春への明ほのゝ山　同

阿野　同

七一三八 夫木 宮人の花すり衣いそかなん露に咲そふあのゝ萩原　為家 60ウ

梓池　同

七一四八 六帖 思へとも人目をつゝむ涙こそあつさの池と成ぬへらなれ　貫之

朝浜　同

七一五八 夫木 立かへるあしたのはまの浜千鳥恋しき浪にねをのみそ鳴　家持

赤木山　同

七一六八 夫木 万代にあかきの山のしら椿君かさか行卯杖にそさる　詠人不知

嵐池　同

七一七八　夫木　逢事はあらしの池の水なれや絶みたえすみ年のへぬ覧　読人不知

麻葉河　同

七一八八　夫木　御祓するあさの葉河の風分て秋をませくる波の夕声　嘉陽門院越前　61オ

秋風山　未勘

七一九八　夫木　みるもさひし梢の紅葉もろく散て夕すくなき秋風の山　実文

阿登村里　同

七二〇八　夫木　鹿のねに草の庵りも露けくて涙流るゝあと村の里　相模

朝原　里　同

七二一八　名寄　あさ原にさ夜打更て恋しきはせこそしるらめ独ぬるまは

七二二八　夫木　早苗とるたゝの隙なみ五月雨のふるも時しる朝原の里

芥火里　同

七二三八　夫木　下もえにまをのみつくす人ならて誰かふすへる芥火の里　祐夸

妄太人池　同

七二四八　夫木　住果ん心そこともしらなくにいかに頼まんあた人の池　衣笠　61ウ

朝田原　同

七二五八　名寄　朝日さすあさ田の原の霜よりも消て恋しき君かことのは

青見原　同

七二六八　曽我集　道芝もけふは春へとあをみ原おりゐるひはりどくへぬへし　好忠

松葉名所和歌集第十一終

62オ